

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第239集

都城市所在

なかとこまる

中床丸遺跡  
(第一次・二次)

県道飯野松山都城線（都城志布志道路）梅北工区道路整備工事に伴う発掘調査報告書 2

2016

宮崎県埋蔵文化財センター

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第239集

都城市所在

なかとこまる

# 中床丸遺跡

県道飯野松山都城線（都城志布志道路）梅北工区道路整備工事に伴う発掘調査報告書 2

2016

宮崎県埋蔵文化財センター





中床丸遺跡遠景（遺跡南から霧島方向を仰ぐ）



縄文土器（後期）





# 序

宮崎県教育委員会では、平成 25 年度、平成 26 年度に県道飯野松山都城線（都城志布志道路）梅北工区道路整備工事に伴い、都城市梅北町に所在する中床丸遺跡の埋蔵文化財発掘調査を実施しました。本書はその発掘調査の記録を掲載した報告書です。

中床丸遺跡では、鬼界アカホヤ火山灰層の下位で縄文時代早期に属する集石遺構が検出されました。また、縄文時代後期から晩期の遺物も多数出土しました。それらは都城盆地における先人の暮らしを物語る文化遺産として大きな意義を有するものです。本書や出土遺物・記録類が、学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場で活用され、埋蔵文化財の保護に対する認識と理解の一助となることを期待します。

なお、最後になりましたが、調査にあたって御協力いただいた関係諸機関、地元の方々に心より厚くお礼申し上げます。

平成 28 年 3 月

宮崎県埋蔵文化財センター  
所 長 岩 切 隆 志

## 例 言

- 1 本書は県道飯野松山都城線（都城志布志道路）梅北工区道路整備工事に伴い宮崎県教育委員会が実施した宮崎県都城市梅北町に所在する中床丸遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は都城土木事務所の依頼を受け、宮崎県教育委員会が主体となり宮崎県埋蔵文化財センターが実施し、第1次発掘調査（現地調査）は平成25年10月2日から平成26年3月25日までの99日間実施し、第2次発掘調査（現地調査）は平成26年4月21日から平成27年1月16日までの145日間実施した。
- 3 第1次発掘調査は永野一美、山田洋一郎が担当し、第2次発掘調査は松林豊樹、永野一美、野崎一人が担当した。現地調査における図面作成および写真撮影については、調査担当者が分担して行った。
- 4 調査に際しては、世界測地系に準拠した10mグリッドを設定した。この座標グリッドにアルファベットと整数で名称を与え、この区画を基準として遺構等の図化作業を行った。また、本書中の座標値についても世界測地系に準拠した。
- 5 遺物・図面の整理作業は宮崎県埋蔵文化財センターで行った。図面作成・遺物実測・トレースは、永野一美が整理作業員の補助を得て行った。

### 【実測図凡例】

#### (1) 土器実測（調整等の表現方法）について

土器の残存状況が径1/4未満でも、反転復元できる場合には、外形線・稜線を復元した。

#### (2) 石器実測（使用痕等の表現方法）について

ア 節理面は1点鎖線、自然面はドットを使って表現した。

イ 欠損面については、調査時等の新しい欠損面と判断できるものは白抜きとし、それ以外の欠損面に關してはリング及びフィッシャーを入れて表現した。

ウ 磨面・敲石・砥石・石皿の使用痕跡は、平面上、断面上、網掛を用いて使用の範囲を表現した。

#### (3) 挿図の縮尺について

遺構配置図 = 1 : 1500、遺構実測図 = 1 : 20 1 : 30 1 : 40 1 : 60、土器 = 1 : 3

石器 = 2 : 3 1 : 3 1 : 4 を基本とし、以外のものを含めて挿図中にその縮尺を明示した。

#### 6 空中写真撮影は有限会社スカイサーベイ九州に、基準点測量等の測量業務は株式会社南日本総合コンサルタントに、石器実測委託は株式会社九州文化財研究所に、自然科学分析（放射性C14年代測定・種実同定・テフラ分析・蛍光X線分析）は株式会社古環境研究所にそれぞれ委託した。

#### 7 石材の分類は、赤崎広志の監修のもと、永野が行った。

#### 8 出土遺物・実測図・その他の諸記録は、宮崎県埋蔵文化財センターで保管している。

#### 9 本書の執筆は第1章・第1節を松林豊樹が、その他の執筆・編集を永野一美が行った。

#### 10 本書で使用した位置図は、国土地理院発行の5万分の1図を基に作成した。

#### 11 本書で使用した土層断面及び遺物の色調等は農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」を参考にした。

#### 12 本書で使用した方位は、全て座標北「G.N.」で示している。レベル表示（L）は海拔絶対高を使用した。

#### 13 本書で使用した遺構略記号は以下のとおりである。

堅穴状遺構…SA 掘立柱建物跡…SB 土坑・陥し穴状遺構…SC 集石遺構…SI  
 溝状遺構…SE 環状ピット列…SJ 不明遺構…SZ

## 本文目次

第Ⅰ章 はじめに	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の組織	1～2
第3節 発掘作業の経過	3～4
第4節 整理作業の経過	4～5
第5節 教育普及活動	5
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	
第1節 地理的環境	6
第2節 歴史的環境・参考文献	6～8
第Ⅲ章 調査の方法と成果	
第1節 調査の方法	9・10
第2節 層序	10～13
第3節 旧石器時代の遺物	14・15
第4節 縄文時代早期の遺構と遺物	16～25
第5節 縄文時代後期～晩期の遺構と遺物	26～87
第6節 古代～中世の遺構と遺物	88～99
第7節 その他の遺構と遺物	100～105
第Ⅳ章 自然科学分析の成果	106～113
第Ⅴ章 総括・参考文献	114・115
第1節 旧石器時代	
第2節 縄文時代	
第3節 古代～中世	

## 挿図目次

第1図 中床丸遺跡および周辺遺跡位置図	8	第6図 旧石器時代遺物分布図	14
第2図 調査区及びグリッド配置図	10	第7・8図 旧石器時代遺物実測図①・②	14・15
第3図 調査区内の等高線図	11	第9～11図 縄文時代早期遺構実測図①～③	18～20
第4図 土層記録位置と第1次調査区・A区・P21Gr土層断面図	12	第12図 縄文時代早期遺構分布図	21
第5図 第2次調査区(B-1・B-7・C区)土層断面図	13	第13図 縄文土器実測図①	22

## 表目次

第 14 図 縄文時代早期土器分布図	23
第 15 図 縄文時代早期石器実測図	24
第 16 図 縄文時代早期土器分布図	25
第 17 図 SC1 実測図	26
第 18 図 縄文時代後期土坑位置図	27
第 19 図 縄文時代後期土器分布図	28
第 20 図 縄文時代晩期土器分布図	33
第 21 ～ 59 図 縄文土器実測図①～⑳	34 ～ 72
第 60 図 縄文時代後期～晩期石器分布図	82
第 61 ～ 64 図 縄文時代後期～晩期石器実測図①～④	83 ～ 86
第 65 図 古代～中世遺構分布図	89
第 66 図 SE1 ～ SE4 平面図	90
第 67 図 SE1 ～ SE4 断面図	91
第 68 図 SE5 ～ SE9 平面図	91
第 69 図 SE5 ～ SE9 断面図	92
第 70 図 SB1・SC2 実測図	93
第 71 図 S21 実測図	94
第 72 ～ 74 図 古代～中世遺物実測図①～③	95 ～ 97
第 75 図 その他の遺構分布図	101
第 76 図 SA1 実測図	101
第 77 図 SC3 ～ SC6・SJ1 実測図	102
第 78 図 SJ2 ～ SJ4 実測図	103
第 79 図 陥し穴状遺構 (SC7) 実測図	104
第 80 図 その他の遺物実測図	105
第 81 図 暦年校正結果	111
第 82 図 漆料炭化物組成	112
第 83 図 原料率測定結果	112
第 84 図 蛍光 X 線分析結果	112

第 1 表 基本順序	11
第 2 表 遺物計測表 (旧石器時代)	14
第 3 表 土器観察表 (縄文時代早期)	23
第 4 表 石器計測表 (縄文時代早期)	25
第 5 表 土器観察表 (縄文時代後期)	73 ～ 78
第 6 表 土器観察表 (縄文時代晩期)	79 ～ 80
第 7 表 石器計測表 (縄文時代後期～晩期)	87
第 8 表 遺物観察表 (古代～中世)	98 ～ 99
第 9 表 遺物観察表 (その他)	105
第 10 表 遺物計測表 (その他)	105
第 11 表 放射性炭素年代測定の方法	106
第 12 表 放射性炭素年代測定の結果	106
第 13 表 炭化精光同定結果	112
第 14 表 テラフ分析結果	112
第 15 表 蛍光 X 線分析結果	113

## 写真図版目次

色紙図版一 中床丸遺跡遺構 (遺跡南から墓山方向を向く)	
色紙図版二 縄文土器 (後期)	
写真図版一 調査区全景	116
写真図版二 S11 上面の地理・S11 ～ S17	117
写真図版三 SIR ～ S11・1 号地土路・SC1・SC2・SB1	118
写真図版四 SC2・SE1 ～ SE4	119
写真図版五 SE5 ～ SE9・SJ1 ～ SJ4	120
写真図版六 SC3 ～ SC6・陥穴状遺構・陥し穴状遺構	121
写真図版七 旧石器時代の遺物・縄文土器① (早期)	122
写真図版八 縄文土器② (早期)・石器① (縄文時代早期)	123
写真図版九～三二 縄文土器③～⑨ (後期)	124 ～ 147
写真図版三二～三七 縄文土器⑩～⑭ (晩期)	147 ～ 152
写真図版三七～四一 石器②～⑥ (縄文時代後期～晩期)	152 ～ 156
写真図版四二～四五 古代～中世の遺物①～⑤	157 ～ 160
写真図版四六 その他の遺物	161

## 第1章 はじめに

### 第1節 調査に至る経緯

都城志布志道路は、平成6年12月、宮崎県都市を起点に鹿児島県曾於市を經由し、鹿児島県志布志市に至る総延長約40kmに及び地域高規格道路として計画されている。

本遺跡が所在する都市は、平成18年度の生産農業所得統計によると全国2位の農業産出額であり、中でも畜産産出額においては全国1位を誇る。また、隣接する曾於市や鹿屋市も同統計において全国上位5位内の畜産産出額であり、都市周辺は国内有数の畜産地帯と言える。一方、終点側の鹿児島県志布志市には志布志港が所在する。平成21年度の港湾統計によれば、志布志港における取扱貨物の9割以上が家畜の餌となる飼料であり、その出荷量は年々増加している。このような状況の中、志布志港は平成24年に九州では唯一、穀物分野の「国際バルク戦略港湾」に選定され、国際競争力の強化を狙った整備が現在も進められている。都城志布志道路は両地域の産業特性を有機的につなぐ重要な道として、大きな期待が寄せられている。また、医療分野や地域間交流、観光振興などの面でもその整備効果は高いと考えられることから、地域住民は早期の開通を要望している。

都城志布志道路のうち、宮崎県側の区間における九州縦貫自動車道都城ICから都市五十町ICまでの約13.4kmの区間は、都城道路として国土交通省が事業を進めている。また、五十町ICから鹿児島県境に至る約8kmの区間については、主要地方道都城東環状線として宮崎県が事業を進めており、五十町ICから梅北ICまでの区間はすでに供用が開始されている。このように、都城志布志道路は一つの道路でありながら北側を国、南側を県が施工しており、ここに報告する中床丸遺跡は、梅北IC以南の宮崎県が施工する区間（梅北工区）内に位置している。

都城東環状線については、平成12年9月に宮崎県都市計画課から宮崎県文化課（現文化財課）へ協議がなされた。文化課は同年10月、路線内に8箇所の周知の埋蔵文化財包蔵地があることを回答し、以後、開発計画と埋蔵文化財の保護について協議を重ね、現状保存が困難な遺跡についてはやむを得ず記録保存の措置をとることとなった。

中床丸遺跡では平成25年7月に文化財課による確認調査が行われた。確認調査の結果、鬼界アカホヤ火山灰層の上位及び下位において遺構・遺物が検出されたため、平成25年10月2日～平成26年3月25日にかけて1,600㎡を対象とする発掘調査（第1次調査）を実施した。また、第1次調査の際、周辺地において確認調査を実施したところ、同様の遺構・遺物が検出されたため、平成26年4月21日～平成27年1月16日にかけて4,500㎡を対象とする発掘調査（第2次調査）を実施した。

### 第2節 調査の組織

中床丸遺跡の発掘調査・整理作業及び報告書作成は下記の体制で実施した。

調査主体：宮崎県教育委員会

教育長	飛田 洋（平成25～27年度）
教育次長（総括）	高原みゆき（平成25年度）
	原田 幸二（平成26～27年度）
教育次長（教育施策担当）	西立野康弘（平成25年度）
	谷口 英彦（平成26年度）

教育次長（教育振興担当）	川井田和人（平成27年度） 中野 通彦（平成25年度） 今村 卓也（平成26年度） 川崎 辰巳（平成27年度）
事業調整：宮崎県教育庁文化財課	
課長	田方 浩二（平成25～26年度） 大西 敏夫（平成27年度）
課長補佐	壺岐 進（平成25年度） 谷口 武範（平成26～27年度）
埋蔵文化財担当リーダー	谷口 武範（平成25年度） 飯田 博之（平成26～27年度）
埋蔵文化財担当	堀田 孝博（平成25年度事業調整担当） 二宮 満夫（平成26年度事業調整担当） 松本 茂（平成27年度事業調整担当）
発掘調査・整理作業及び報告書作成：宮崎県埋蔵文化財センター	
所長	向井 大蔵（平成25年度） 岩切 隆志（平成26～27年度）
副所長	長津 宗重（平成25年度）
副所長兼総務課長	長津 宗重（平成26年度）
副所長兼調査課長	菅付 和樹（平成27年度）
総務課長	坂上 恒俊（平成25年度） 上谷 政隆（平成27年度）
総務担当リーダー	高園 寿恵（平成25年度） 安藤 忠洋（平成26～27年度）
総務担当	甲斐 郁士（平成25年度） 赤木 恭子（平成25～27年度） 関 雅文（平成26～27年度）
調査第二課長	菅付 和樹（平成25年度）
調査課長	菅付 和樹（平成26年度）
調査第三担当リーダー	吉本 正典（平成25年度）
調査第一担当リーダー	松林 豊樹（平成26～27年度）
調査第三担当	永野 一美（平成25年度、1次調査主任） 山田洋一郎（平成25年度、1次調査副主任）
調査第一担当	永野 一美（平成26年度、2次調査主任）
調査第二担当	野崎 一人（平成26年度、2次調査副主任） 甲斐 貴充（平成26年度、2次調査）
調査協力：都城市教育委員会	

### 第3節 発掘作業の経過

平成25年度に着手した中床丸遺跡の調査は、工事計画等を助案して調査対象範囲(6,100㎡)を2分割し、2か年度に渡って実施した。調査着手以前の調査区は、畑地として利用されていた。

#### 1 第1次調査(平成25年度)

本調査は、平成25年10月2日から平成26年3月25日にかけて行った。まず、県道飯野松山都城線(都城志布志道路)梅北工区道路整備工事の関係上、調査区南西側の約1,600㎡に着手した。確認調査により、調査区全域において第Ⅱ層(桜島文明軽石堆積層、SZ-3)及び第Ⅲ層(黒色土)は無遺物層と判明していたため、平成25年10月7日～8日にかけて南西部分の表土～Ⅲ層までの表土剥ぎを行った。10月15日より作業員を雇用しての人力による包含層掘削及び精査を開始した。11月22日までにⅣ層～Ⅴb層までの調査を終了し、縄文時代後期の土坑を1基検出した。サブトレンチ掘削により縄文時代早期のⅣ層については、Ⅳ層との境目から約10cm程度までは無遺物層であることが事前に判明していたため、11月25日から11月27日にかけてⅤb層の遺物を含んでいない部分からⅣ層下部の遺物を含まない部分までを重機で除去した。12月2日からⅣ層の人力掘削を開始したが、地盤が人力で掘削するには非常に硬く、遺物密度が想定していたよりも低かったため、12月4日から12月12日にかけてⅣ層の残りをⅣ層付近約10cmまで再度重機で除去した。その後、平成26年1月14日までにⅣ層～Ⅴ層の上部を人力掘削し、集石遺構1基、焼土集中区を2箇所、散礫1箇所を検出した。平成26年1月15日に第1回の空中写真撮影を実施した。平成26年1月16日からⅣ層人力掘削及び遺構掘削・実測等を進め、平成26年3月16日までにⅣⅦ層(シラス)までの旧石器時代の確認トレンチ調査を行い、小杭状の痕跡をもつ陥し穴状遺構を1基検出した。また、2月9日には当センターの普及事業の一環として現地説明会を実施し、84名の参加者を得た。平成26年3月17日、18日で埋め戻しを完了し、3月19日、20日で第2次調査のA区の表土剥ぎを行い、平成26年3月25日で第1次調査をすべて終了した。

#### 2 第2次調査(平成26年度)

第2次調査は平成26年4月21日から平成27年1月16日にかけて行った。排土置き場の確保や中床丸遺跡中央を市道が通っていることから、第2次調査区(4,500㎡)をA、B、C、Dに4分割して調査を行った。以下、調査区毎に調査内容を記述する。

##### (A区)

A区は北側部分が旧石器時代の層まで深く攪乱を受けていることが判明していたため、その範囲は排土置き場として使用した。また、A区の中央付近から南側は、ほとんどが造成を受けていたり、ゴボウトレンチャーが縦横に交差していたりしてⅤa層からⅤb層まで削平されている部分がほとんどであった。まず、4月23日から作業員を動員し、人力による作業を開始した。6月下旬までにⅢ層～Ⅴb層までの掘り下げを行い、縄文時代の土坑1基やピット群、中世の掘立柱建物跡1棟を確認した。Ⅴb層からは遺物が出土しなくなったため、7月2日からⅤb層～Ⅳ層の無遺物部分までを重機で除去した。7月22日からⅣ層下部の遺物包含部分から人力掘削を行い、縄文時代早期の調査を開始した。8月2日からⅣ層の調査を開始し、8月21日にⅣⅠ層上面で第1回の空撮を実施した。8月29日から9月4日まで旧石器時代の確認トレンチ掘削を行い、9月10日までにA区のすべての作業を終えた。A区では、縄文時代早期の散礫を1箇所確認した。



#### (B区)

B区は、市道部分を含めた中床丸遺跡の東側半分である。また、B区は調査区内に民家や畑への進入路が通っているため、B-1区～B-7区の7ヵ所に区切って調査を実施した。ただしB-4区については、トレンチ調査の結果、旧石器時代の層まで攪乱が及んでいることが判明したため、調査対象外とした。なお、旧石器時代から縄文時代早期の調査については尾根状の地形であるB-6区を除いて、トレンチ調査に変更した。B区の調査はA区の調査の途中である7月28日にB-1区～B-3区のⅢ層下部まで表土掘削を開始した。その後、9月8日から作業員によるⅣ層人力掘削を開始した。10月16日までにB-1区～B-3区(B区東側)までの調査をすべて終えた。そして、10月20日に第2回目の空撮を行った。10月27日からは遺跡の中央を通る市道部分(B-5区～B-7区)のコンクリート除去及び表土剥ぎを開始した。11月4日から作業員を投入しての調査を開始し、12月25日までに調査をすべて終了する予定であったが、B-6区で礫密度の高い散礫や時期差が考えられる集石遺構を検出したために調査期間の延長を行った。平成27年1月16日までに旧石器時代の確認トレンチ調査を行い、B区の調査をすべて終了した。B区では、縄文時代早期の集石遺構6基、中世の堀立柱建物跡1棟、土坑1基、溝状遺構5条、時期不明な遺構として竪穴状遺構1基、土坑4基、環状ピット列4基、陥し穴状遺構1基を検出した。

#### (C区)

C区は、中床丸遺跡の最も南側で約600㎡の面積がある。C区はA区やB区の調査と同時進行で行った。平成27年6月9日から表土剥ぎを開始し、6月20日からⅣ層の人力掘削を開始した。Va層上面で溝状遺構を4条(SE1～SE4)検出した。また、第Ⅳ層～第Ⅴ層中で集石遺構を3基、土坑を1基検出した。10月31日までに埋め戻しを終え、C区の調査をすべて完了した。

#### (D区)

D区は、第1次調査区であったが、隣接するビニールハウスへの進入路となっていたため、B区の調査と併行して平成26年10月27日に表土剥ぎを行った。その際、D区は遺跡中央の尾根状の地形にあたるため、表土直下ですでに第Ⅷ層(鬼界アカホヤ火山灰層)を確認した。そのため、包含層であるⅨ層下部まで重機で掘削した。そして、第Ⅹ層で集石遺構を1基検出した。その後、11月25日から旧石器時代の確認トレンチを行い、第ⅩⅡ層中で縄文時代草創期から早期と考えられる無紋の縄文土器を確認した。そして、12月2日にD区の調査をすべて終了した。

### 第4節 整理事業の経過

1 整理事業は、当センターの整理事業員の協力を得て、平成26年11月1日から水洗を開始した。平成28年1月21日までの期間に注記、接合、拓本、トレース、取蔵前整理を行った。同時に遺構分布図や遺構実測図などの挿図を作成し、併行して本文執筆を進めていった。

#### 2 フローテーション作業について

##### フローテーションを実施した理由

本遺跡では、土坑が6基検出され、その中の1基である1号土坑は縄文時代後期の土坑の可能性があり、その埋土から炭化木片や植物炭化種子が検出される可能性があった。炭化木片や植物炭化種子が検出されれば、放射性炭素年代測定、樹種同定、種実同定が実施でき、当時の本遺跡における食生活や植生の

復元が可能になると考え、フローテーション作業を行うことにした。

#### フローテーション作業の流れ

フローテーション法における一連の作業の流れは、土壌採取→土壌乾燥→土壌水洗→残存物乾燥→選別→分析である。調査現場では、土坑から土の採取を行い、本センターで土壌乾燥から後の作業を行った。分析（種実同定）については業者に委託した。

#### フローテーション作業の実際

##### ○ 土壌採取

土壌は土坑の中心部から採取し、土嚢袋で保存した。

##### ○ 土壌乾燥

本センターにおいて、土嚢袋から土壌をメッシュかごに移す作業を行った。深さ5cm程の土壌を入れた8箱のメッシュかごには新聞紙を敷き、風通しのよい場所に1日間置いた。

##### ○ 土壌水洗

乾燥した土は、フローテーション装置を使って水洗作業を進めた。

##### ○ 残存物乾燥

篩とタンクに残った残存物を紙箱に入れ、風通しの良い所で乾燥させた。

##### ○ 選別

十分乾燥した残存物を電気スタンドとルーペ、実体顕微鏡を使って種実と炭化物などに選別した。

## 第5節 教育普及活動

教育普及活動は現地では2回実施した。平成25年11月12日（火）に宮崎西高等学校附属中学校第2学年の生徒79名を対象に発掘体験授業を実施した。また、平成26年2月9日（日）の午前と午後に分けて2回の現地説明会を実施した。都城市や宮崎市、鹿児島県から84名の参加があった。他には、民間放送の情報番組で中床丸遺跡の紹介や発掘体験等のテレビ放映も行われた。



現地説明会の様子

## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

都城市は九州東南部、宮崎県南西部の都城盆地内に位置し、高原町・宮崎市・三股町・日南市・串間市の3市町に隣接する。人口は約17万人で、面積は約650km<sup>2</sup>に及び宮崎県内で最大である。都城盆地は東西約25km、南北約15kmに渡る楕円状を成している。北西に高千穂峰(1574m)を最大峰とする霧島火山群を仰ぎ、東から南にかけては鰐塚山系の山々に囲まれ、西南方のみわずかに開かれた地勢を呈する。ここから北流する大淀川は、都城盆地内の中小河川と合流し、都城市高城町の狭隘な山間地を経て、宮崎平野にそそいでいる。

この都城盆地は年代指標となる広域テフラとして鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah、約7,300年前)、霧島御池軽石(Kr-M、約4,600年前)、桜島文明降下軽石(SZ-3、P3、AD1470前後)などの堆積層も明瞭に確認できる。中床丸遺跡は、この都城盆地の中でも南東部に位置し、南東方向には金岳岳(標高472m)を中心とした鰐塚山系に連なる山地が広がっている。また、遺跡西側には梅北川が流れ、盆地中央部の大淀川へと流れこんでいる。今回調査の対象となった箇所は、市の中心部から南に約7km、鹿児島県県境まで約2km弱の標高約167m前後の台地上に立地し、現況は畑地となっている。

### 第2節 歴史的環境

#### 旧石器時代

県内では300箇所近い旧石器時代の遺跡が確認されているが、そのほとんどは県北五ヶ瀬川流域と宮崎平野に集中している。県西部や県南部の地域ではシラスをはじめとする火砕流や火山灰堆積が厚いため、現在確認されている遺跡数は極端に少ない。都城盆地では大岩田上村遺跡、池増遺跡、雀ヶ野第3遺跡、軍人原遺跡がある。いずれも細石刃石器群が確認されている。

#### 縄文時代

草創期の遺跡としては、山之口町王子山遺跡や平成26年度に都城市が調査を実施した軍人原遺跡があり、草創期の土器が細石刃と共に出土している。

早期の遺跡では南九州では珍しい全面に縄文が施されている円筒形土器の「五十市式土器」が完形品として採取された宮野・立野(五十市)遺跡が知られている。この期の土器としては円筒形土器のほか吉田式土器、条痕文土器、突帯文土器、貝殻文円筒形土器を中心に押型文土器、手向山土器、平格式土器、寒ノ神式土器、撚糸文土器などが出土している。田尻・尻枝遺跡で陥し穴状遺構2基とビット群、加治屋B遺跡で集石遺構19基、立岩遺跡で集石遺構31基と土坑6基、艶女木遺跡で集石遺構1基と土坑1基、松ヶ追遺跡では連結土坑が検出されている。

今回、中床丸遺跡の調査で確認された遺物は、ほとんどが後期に属するものである。後期は遺跡数が急激に増加する。土器では円線文土器、綾式土器、指宿式土器、市来式土器、中岳式土器、三万田式土器、丸野式土器、西平式土器のほか、黒色磨研の精製土器と粗製土器も出現する。立岩遺跡では堅穴建物跡2軒と土坑数十基、中岳式土器等が出土している。今房遺跡では磨製石斧と磨石を埋納した土坑が検出された。上牧第2遺跡では九州では発見例の少ない後期初頭の堅穴建物跡が確認され床面中央には焼土を含み畑と思われる土坑が設けられている。

晩期には条痕文土器や組織痕土器、無刻目突帯文土器や孔列文土器が見られる。大岩田村ノ前遺跡では柱穴と見られるビットが楕円形状に巡る堅穴状遺構、中尾山・馬渡遺跡では土坑6基、横尾原遺跡で

は隅丸方形の小型の竪穴建物跡1軒が検出されている。横尾原遺跡、黒川遺跡、筆無遺跡、働女木遺跡では後期～晩期の土器、中尾山・馬渡遺跡、油田遺跡では晩期の土器が出土している。

#### 弥生時代

南部九州における刻目突帯土器期の稲作の可能性は、市地区遺跡群の調査によって確実なものとなってきている。まず坂元A遺跡では、擬似畦畔によって区画された一区画10m前後の不整形な水田跡が検出された。同遺跡では、早期・前期後半・中期後半・古代・中世に至る水田跡が検出され、同地区で脈々と稲作文化が継承されていったことを物語っている。また、横尾川対岸の駄穴遺跡では、刻目突帯土器や擦り切り穿孔をもつ石包丁等を伴う早期から前期にかけての松菊里型の円形竪穴建物跡と水田層が検出された。さらに大岩田地区の黒土遺跡でも擦り切り穿孔をもつ石包丁や榎痕土器等が出土しており、イネのプラントオーバーも検出されている。

中期になると遺跡数も急激に増え、その中でも特に後半に位置づけられる遺跡は多くなる。坂元A遺跡では、中期後半の水田層から南九州では検出例の少ない農具と考えられる木製品が出土している。大岩田村ノ前遺跡では、熊本県に分布の中心がある黒髮式の甕を伴う竪穴状遺構が検出されている。また、牧の原第2遺跡や諸麦遺跡では、竪穴建物跡の埋土中から瀬戸内系の凹線文土器も出土している。このような調査結果から、この頃になると各地との交流を盛んに行い始めた社会的構造が垣間見える。一方、当該期には在地系の山ノ口式土器が出現する時期でもあり、様々な文化が交流し合いながら地域社会の発展を遂げていったことも窺える。この他、40軒の竪穴建物跡が検出された加治屋B遺跡や、検出例の少ない独立棟持柱をもつ掘立柱建物跡を検出した岩立遺跡も当該期の遺跡として付け加えておきたい。

後期では、ベッド状遺構を伴う竪穴建物跡と、周溝状遺構が検出された加治屋A遺跡がある。同遺跡では、絵画土器や鉄斧等も出土している。平田遺跡D・E地点でも、中期後半から後期初頭にかけての同様の遺構が検出されているが、竪穴建物跡から約31.7cmの長鋒型の鉄矛が出土したことは特筆すべき点である。後半から終末期にかけては、花卉状建物跡や周溝状遺構等が検出された今房遺跡がある。この周溝状遺構からは、免田式の長頸壺や安国寺式の複合口緑壺等が出土している。駄穴遺跡でも、同時期の溝状遺構と木組状遺構とが直交する形で検出されている。

#### 古代～中世

平峰遺跡では、古代から中世の道路・溝状遺構2条、中世の溝状遺構2条、土坑2基が確認されている。王子原第2遺跡では、古代から中世の掘立柱建物跡7軒、溝状遺構5条、土坑墓3基、土坑87基が検出された。坂元A遺跡では、中世前期の水田跡や小ピット群（足跡状遺構）が検出された。大岩田上村遺跡では、中世から近世にかけての溝状遺構37条、道路状遺構1条、土坑墓2基が確認されている。鶴尾遺跡では、水田跡5、畠跡2、溝状遺構3条、遺物としては土師器、陶磁器が出土している。坂ノ下遺跡では、畠跡1、土師器、須恵器が出土している。

#### [参考文献]

- 宮崎県埋蔵文化財センター 2007『梅北佐土原遺跡』宮崎県埋蔵文化財発掘調査報告書第76集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2008『諸麦遺跡』宮崎県埋蔵文化財発掘調査報告書第168集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2011『梅北針谷遺跡』宮崎県埋蔵文化財発掘調査報告書第204集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2011『働女木遺跡』宮崎県埋蔵文化財発掘調査報告書第205集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2012『平峰遺跡』宮崎県埋蔵文化財発掘調査報告書第211集



- |             |          |            |            |
|-------------|----------|------------|------------|
| 1 中床丸遺跡     | 2 大年遺跡   | 3 笹ヶ崎遺跡    | 4 梅北針谷遺跡   |
| 5 梅北城跡      | 6 黒尾神社   | 7 下久保遺跡    | 8 今町一里塚    |
| 9 鶴尾遺跡      | 10 坂ノ下遺跡 | 11 働女木遺跡   | 12 平峰遺跡    |
| 13 油田遺跡     | 14 筆無遺跡  | 15 大岩田上村遺跡 | 16 黒土遺跡    |
| 17 大岩田村ノ前遺跡 | 18 大岩田城跡 | 19 王子原遺跡   | 20 梅北佐土原遺跡 |
| 21 大浦遺跡     | 22 嫁坂遺跡  | 23 金御岳遺跡   | 24 西生寺跡    |
| 25 千手院跡     | 26 保木島遺跡 | 27 高樋遺跡    |            |

第1図 中床丸遺跡および周辺遺跡位置図 (S = 1 / 50000)

## 第三章 調査の方法と成果

### 第1節 調査の方法

#### 発掘区とグリッドの設定

第1次調査は工事の都合上、遺跡の中央を南北に通る市道の西側を調査範囲とした。また、第2次調査は、第1次調査区以外のすべての範囲を調査対象とした。第1次調査では、当初3200㎡を調査対象面積とし、排土置き場の確保のため調査区を半分に区切り、反転して調査を行うこととした。しかし、縄文時代早期の文化層から想定していた以上に遺構や遺物が検出されたため、調査期間の都合上、当初予定した調査面積3200㎡を半分の1600㎡に変更せざるを得なかった。

第2調査は、調査区の中央を市道が南北に通り、民家や畑への進入路となっていたためA、B、C、Dに4分割して実施した。さらに、B区は市道部分を含むことから、B-1区～B-7区へ細分して調査を行った。ただし、B-4区については、先行トレンチによる調査の結果、入戸火砕流層まで攪乱が及んでいたことから調査対象外とした。グリッドの設定は、調査対象区全域に対して国土座標（新測地系）に基づいた10m×10mのグリッドを設定、南北方向のグリッドに算用数字、東西方向のグリッドにアルファベットを付してグリッド名とした。

グリッド杭の設置は、第1次調査区及び第2次調査A区は業者に委託して表土剥ぎ終了後に行った。第2次調査のB・C・D区については、調査員でグリッド杭の設置を行った。

#### 表土の掘削と遺構の検出

表土の掘削は、重機で行った。確認調査により、事前に第IV層が縄文時代後期～晩期の包含層であることが判明していたため、第IV層上面の数cm上まで重機で掘削し、その後は人力で精査して遺構確認作業や包含層掘削を進めた。

縄文時代早期の調査については、確認調査で集石遺構や遺物包含層が確認されていたことから、Vb層からIX層下部まで重機で掘削した後、全面人力掘削を行った。また、第2次調査のA区では、同様に全面人力による包含層掘削を行ったが、土器片が数点出土するに留まった。そのため、B・C・D区については、集石遺構を検出した尾根状の地形を中心に調査を進めた。旧石器時代の調査については、グリッド毎にトレンチ調査を行い、第1次調査区で流紋岩製の剥片4点が出土した。

遺物の取り上げは、グリッド一括もしくはトータルステーションを用いて点上げを行った。第1次調査では、遺物の量が少なかったため、長径5cm以上の土器片及び石器は点上げ対象とした。第2次調査では、第1次調査に比べて遺物の量が大幅に増加したため、比較的大きめの土器片でも胴部や特徴のないものについては、グリッド一括で取り上げた。遺構に伴う遺物は、原則として出土レベルと位置を図面上に記録することとした。

#### 遺構の実測及び写真撮影

遺構の平面図は、主に1/10、1/20で、溝状遺構は部分的に1/100で、土層断面図は1/20で実測した。遺構の写真撮影は基本的に35mmのカメラで白黒、リバーサル2種類のフィルムを使用した。なお、全調査区において業者委託による空中写真撮影を行った。

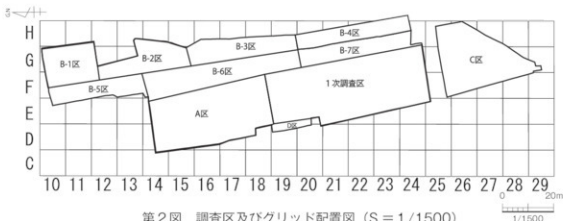
#### 自然科学分析

縄文時代早期の集石遺構11基中3基で炭化物を検出し、放射性炭素(C14)年代測定を実施し、遺構の構築年代を判断する材料とした。また、縄文時代後期の遺物包含層からは種実と推測される炭化物が検出されており、当時の植生を推測する判断材料を得ることを目的に種実同定を実施した。陥し穴状遺構の埋土からは、本遺跡の基本層序に該当しないと推測されるテフラを検出したため、遺構の

構築年代を判断する材料を得ることを目的にテフラ分析を実施した。また、縄文時代の包含層から辰砂ではないかと推測される赤い石片が2点と縄文土器の一部に赤色と白色の顔料のような付着物を伴うものが数点出土しており、他地域との交流を知る判断材料とするための顔料分析を行った。

#### 整理作業

現地調査終了後、宮崎県埋蔵文化財センター本館で整理作業を行った。整理作業では、写真や図面、遺物の整理、遺構・遺物のトレース、報告書の本文作成、石器実測や自然科学分析の委託等も同時に行った。



第2図 調査区及びグリッド配置図 (S = 1/1500)

## 第2節 層序

遺跡の土層堆積状況を第4図と第5図に示した。今回の調査対象範囲における土層の堆積状況は、桜島文明軽石 (SZ-3、AD1471) を含む層、霧島御池軽石 (Kr-M、約4600年前) を含む層、鬼界アカホヤ火山灰層 (K-Ah、約7300年前)、桜島11テフラ (SZ-11、約8000年前)、桜島薩摩テフラ (SZ-S、P14、約12800年前) の5層を基準層とし、谷地形等の特異な場合を除いて堆積状況に大きな差異は認められない。よって、第4図と第5図は調査区内の基本層序を概ね反映している。I層は、表土で平均層厚25cm程である。II層は、桜島文明軽石を含む浅黄橙色土であるが、耕作等の影響で主に第1次調査区の東壁に部分的にしか残存していなかった。残存している部分でも、約6cm前後しか確認できなかった。III層の黒色土は中世から縄文時代晩期の遺物包含層であるが、耕作等の影響で上面が削平されている部分が多いものの平均層厚は35cm程である。IV層は縄文時代後期～晩期の遺物包含層で、耕作等の影響で上面が削平されている箇所もあるが平均層厚は25cm程である。V層は御池軽石の含み具合で2層に分層できる。Va層は霧島御池軽石をわずかに含み全体的に黄色味を帯び、縄文時代後期の遺物が多く出土した。平均層厚は25cm程である。Vb層ではさらに霧島御池軽石を含む量が増える。Vb層からは遺物の量が極端に減少する。平均層厚は、30cm程である。第VI層は、霧島御池軽石層であるが、きちんとした層を形成しておらず、Vb層中と同じ土にブロック状に点在しており、遺物は確認できなかった。VII層は黒色土の無遺物層で平均層厚15cm～20cm程である。VIII a層は鬼界アカホヤ火山灰の漸移層である。第VIII b層は鬼界アカホヤ火山灰の一次堆積層で火山豆石が確認できる。第IX a層は部分的にしか確認できないが、牛のすね火山灰と推測される。テフラ分析は実施していない。平均層厚は、15cm程である。第IX b層は、桜島11テフラを含む黒褐色土層であり、平均層厚20cm程である。IX b層下部より縄文時代早期の遺物包含層となる。X層は縄文時代早期の遺物包含層で、バミスの密度によって3層 (X a、X b、X c) に分けられる。いずれも平均層厚は15cm程である。XI層は桜島薩摩火山灰を含む黄褐色土層で非常に硬い。平均層厚は、15cm程である。XII層とXIII層は無遺物層で、平均層厚はXII層が5cm～20cm程、XIII層が30cm程である。XIV層は旧石器時代の遺物包

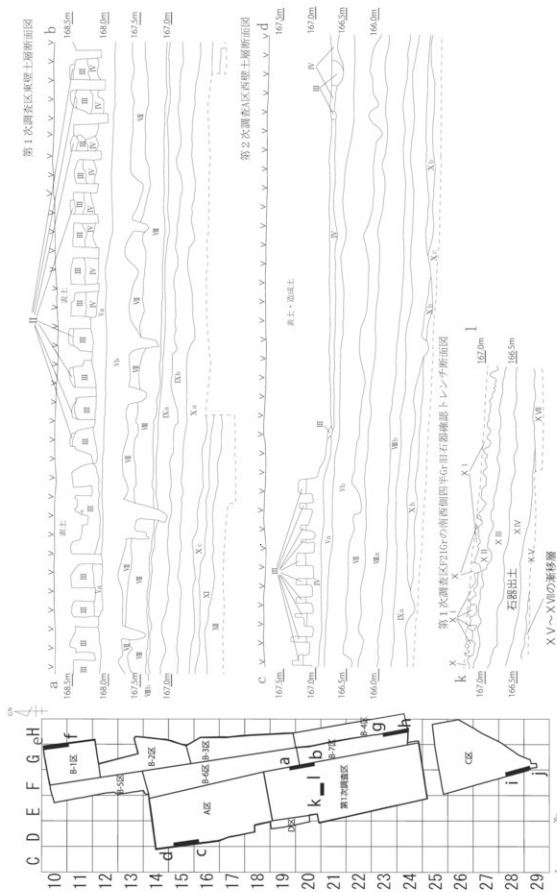
合層で平均層厚 27cm 程である。X V 層以下は無遺物層で、X V 層は平均層厚 15cm 程、X VI 層は平均層厚 20cm ～ 30cm 程、X VI 層は平均層厚 20cm ～ 30cm 程である。X VII 層は入戸火砕流堆積物であり、層厚は不明である。

第 1 表 基本層序

I 層	表土 (畑作土、造成土)
II 層	浅黄褐色土 (掘溝 3 (文明) テフラをまばらに含む。)
III 層	黒色土 (粒が細かくバラバラしている。)
IV a 層	褐色土 (粒が細かくパリスを 3% 程含む。)
IV b 層	明褐色土 (粒が細かく、締まっている。霧島御池テフラを 3% 程含む。)
V a 層	褐色土 (粒が細かくパリスを 3% 程含む。)
V b 層	黒褐色土 (粒が細かく、霧島御池テフラを 20% 以上含む。)
VI 層	明褐色土 (霧島御池テフラをブロック状に含む。)
VII 層	黒色土 (霧島御池テフラを 5% 程含む。)
VIII a 層	灰帯アカホヤテフラの降下火山灰層 (粒が細かくバラバラしている。)
VIII b 層	褐色土 (灰帯アカホヤ火山灰の火山豆石を含む。)
IX a 層	黒褐色土 (粒が細かく非常に硬い。褐色のパリス (P11 火山灰) を 10% 程含む。牛のすね火山灰層下部。)
IX b 層	黒褐色土 (粒が細かく非常に硬い。褐色のパリス (P11 火山灰) を 20% 程含む。)
X a 層	黒褐色土 (粒が細かく、バラバラしている。褐色のパリス (P11 火山灰) を 5% 程含む。)
X b 層	黒褐色土 (粒が細かく、バラバラしている。褐色のパリス (P11 火山灰) を少量含む。)
X c 層	暗褐色土 (粒が細かく、バラバラしている。褐色のパリス (P11 火山灰) を極少量含む。)
X I 層	黄褐色土 (0.3 ～ 10mm の黄色パリス (P14 火山灰) を 10% 程含む。φ 50mm の黄色パリスを極めてわずかに含む。)
X II 層	黒褐色土 (上方からの下方傾斜と考えられる黄色パリス (φ 3 ～ 10mm) を 7% 含む。)
X III 層	暗褐色土 (パリスがなく、強粘性)
X IV 層	黒褐色土 (パリスがなく、強粘性)
X V 層	明褐色土 (やや硬く、φ 25 ～ 30mm の球状物が部分的に発達)
X VI 層	明黄褐色 (硬さは普通で、強粘性)
X VII 層	黄褐色 (硬く、砂質) 入戸火砕流 (シラス)

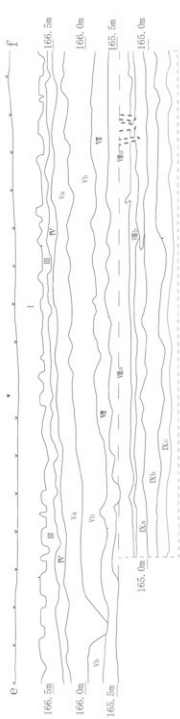




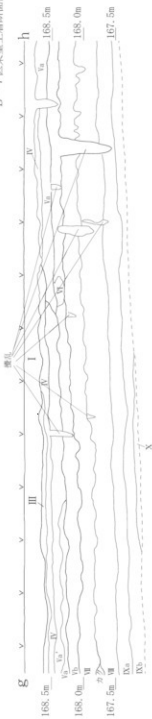


第4図 土層記録位置と第1次調査区・A区・F21Gr土層断面図 (S=1/60)

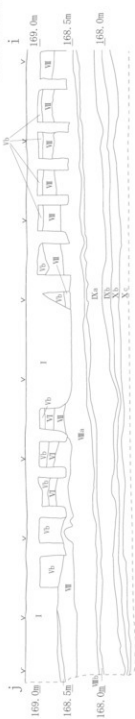
B-1 区東壁土層断面図



B-7 区東壁土層断面図



C区西壁土層断面図



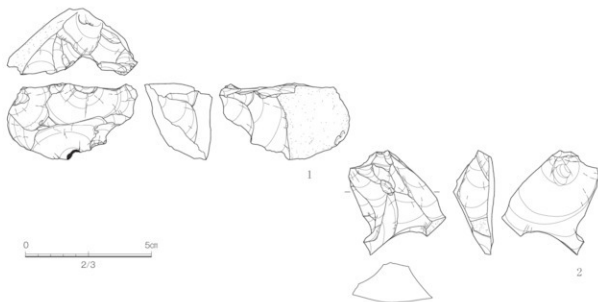
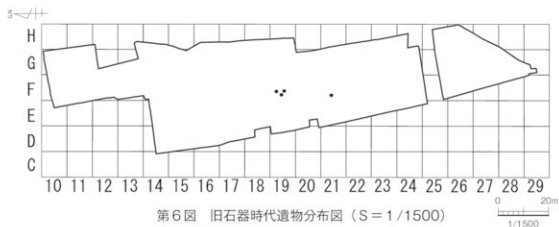
第5図 第2次調査区(B-1・B-7・C区)土層断面図(S=1/60)

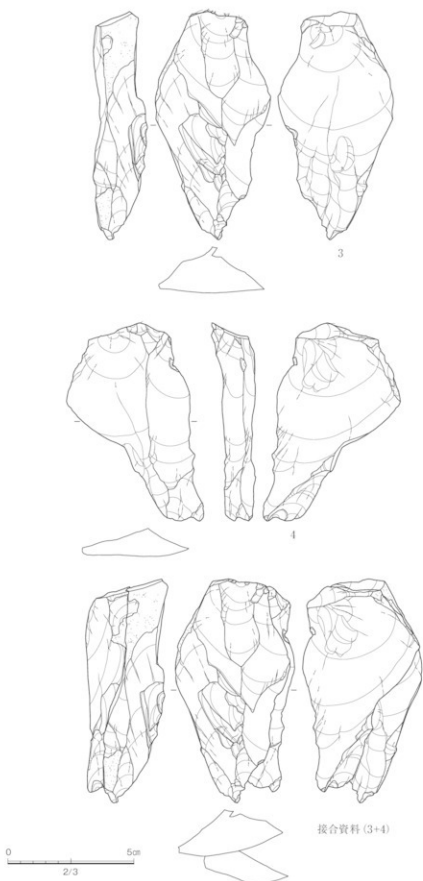
### 第3節 旧石器時代の遺物（第2表1～4 第7・8図1～4・接合資料）

旧石器時代の遺物は、流紋岩の剥片が4点出土し、すべて図化した。出土位置は1がF21Gr、2～4がF19Grである。出土層位はすべてXIV層である。石材はすべて縞模様のある流紋岩である。3と4の接合資料が1点である。各石器の詳細は、表2の通りである。

第2表 遺物計測表（旧石器時代）

掲載 番号	器種	石材	出土地点		長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重さ g	その他
			遺構・Gr	層位					
1	剥片	流紋岩	F21	XIV	303	51.3	26.4	278	
2	剥片	流紋岩	F19	XIV	41.2	38.2	16.2	183	
3	剥片	流紋岩	F19	XIV	90.0	45.2	22.0	686	
4	剥片	流紋岩	F19	XIV	78.2	54.2	17.3	453	





第8図 旧石器時代遺物実測図②

## 第4節 縄文時代早期の遺構と遺物

### 1 遺構

縄文時代早期の遺構としては、X層で集石遺構11基、焼土跡2箇所を検出した。焼土跡や集石遺構の多くは、調査区中央部を東西に走る尾根状の地形や比較的標高の高いC区北側に集中していた。なお、本遺跡では、礫が散漫に分布している範囲を散礫、礫が密集している箇所を集石遺構とした。ただし、礫が集中している場合でも、礫が上下に重なっていない場合は散礫として扱った。また、礫の集中が少ない場合でも掘り込みに伴う土の変色が確認できたものは集石遺構として認定した。中床丸遺跡で検出した集石遺構はすべて配石を持たず、掘り込みのあるタイプが11基中9基であった。多くの集石遺構が砂岩で構成されており、赤変も多数確認できた。B-6区南側で検出した集石遺構(SI8～SI11)は、検出面がX層上部と下部に分かれており時期差が考えられた。しかし、集石遺構(SI8、SI9)から検出した炭化物の放射性炭素年代測定結果からは遺構の構築時期に差違は見られなかった。また、D区で検出した集石遺構(SI7)についても、SI8、SI9と構築時期がほぼ同じであった。

#### (1) 集石遺構(第9～11区)

##### 1号集石遺構(SI1)

E21Grに位置し、X層で検出した。検出した集石遺構の中では内部に礫が一番多く残存し、比較的良好な状態で検出した。掘り込みの形状は平面形が約90cm～1.0mの円形プランで、断面は皿状を呈し、深さは最大で20cmを図る。配石はなく、遺構の構成礫はすべて砂岩で、総重量16.9kgを図り、赤化したものが多く確認できた。遺構の埋土は黒褐色粘質土の1層のみで粘性やしまりは普通である。集石遺構の上部には散礫が見られ、掘り込みの周囲に80cm～1.5m程度広がっていた。散礫部分の礫もすべて砂岩で構成されており、総重量92.7kgを図る。遺構内からは縄文土器の破片が2点出土したが、小片のため図化できなかった。

##### 2号集石遺構(SI2)

F26Grに位置し、X層で検出した。掘り込みの形状は平面形が約80cm～85cmのほぼ円形に近いプランで、断面は皿状を呈し、深さは最大で8cmを図る。配石はなく、遺構の構成礫はすべて砂岩である。遺構の埋土は黒褐色土(10YR3/1)の1層のみで、遺物は出土しなかった。

##### 3号集石遺構(SI3)

G26Grに位置し、X層で検出した。掘り込みはなく、構成礫はほとんどが砂岩で、遺物は出土しなかった。

##### 4号集石遺構(SI4)

G18Gr～H18Gr付近に位置し、X層で検出した。集石遺構の中には礫が多く残存し、比較的良好な状態で検出した。掘り込みの形状は平面形が約85cm～95cmの円形プランで、断面は皿状を呈し、深さは最大で15cmを図る。配石はなく、遺構の構成礫は大部分が砂岩で、赤化したものが多く確認できた。遺構の埋土は黒褐色土の1層である。散礫が掘り込みの周囲に広がっていた。遺物は出土しなかった。

##### 5号集石遺構(SI5)

G25Grに位置し、X層で検出した。掘り込みはなく、遺構の構成礫は大部分が砂岩である。遺物は出土しなかった。

##### 6号集石遺構(SI6)

G11Grに位置し、X層で検出した。掘り込みの形状は平面形が約65cm～75cmの方形に近いプランで、断面は皿状を呈し、深さは最大で8cmを図る。配石はなく、遺構の構成礫はほとんどが砂岩であるが、西側部分の残存状況が良好でない。遺構の埋土は黒褐色土(10YR3/1)の1層で、しまりが弱く粘性は

ない。遺物は出土しなかった。

#### 7号集石遺構 (SI7)

D19Grに位置し、X層で検出した。礫はほとんど残存していないが、掘り込みが確認できたため集石遺構として認定した。掘り込みの形状は平面形が約65cm～75cmの不整形で、断面は皿状を呈し、深さは最大で9cmを図る。配石はなく、遺構の構成礫はほとんどが砂岩である。遺構の埋土は黒褐色土(10YR3/1)の1層で、炭化物を確認した。ゴボウトレンチャーにより遺構の一部が東西に削平を受けていた。遺物は出土しなかった。

#### 8号集石遺構 (SI8)

G19Grに位置し、X層の散礫中で検出した。掘り込みの形状は平面形が約75cm～90cmの円形プランで、断面は皿状を呈し、深さは最大で7cmを図る。配石はなく、遺構の構成礫はほとんどが砂岩である。遺物は出土しなかった。

#### 9号集石遺構 (SI9)

G18Gr～H18Gr付近に位置し、X層の散礫中で検出した。掘り込みの形状は平面形が約1.03m～1.10mの円形プランで、断面は皿状を呈し、深さは最大で13cmを図る。配石はなく、遺構の構成礫はほとんどが砂岩である。遺構内の遺物は縄文時代早期に属する土器片が1点出土し図化した。5は深鉢の口縁部である。外面に横方向の山形押型文を施し、内面に横方向の山形押型文を施す。内面の口縁端部には原体条痕を施す。

#### 10号集石遺構 (SI10)

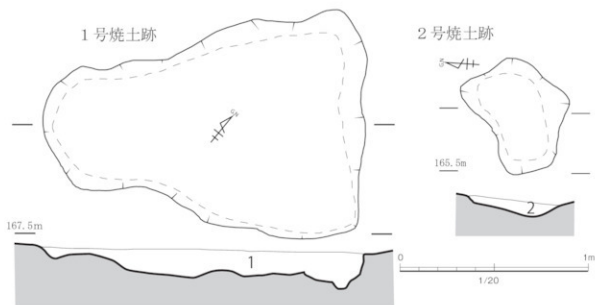
G17Grに位置し、X層の散礫中で検出した。掘り込みの形状は平面形が約79cm～1.27mの楕円形プランで、断面は皿状を呈し、深さは最大で11cmを図る。配石はなく、遺構の構成礫はほとんどが砂岩である。遺物は出土しなかった。

#### 11号集石遺構 (SI11)

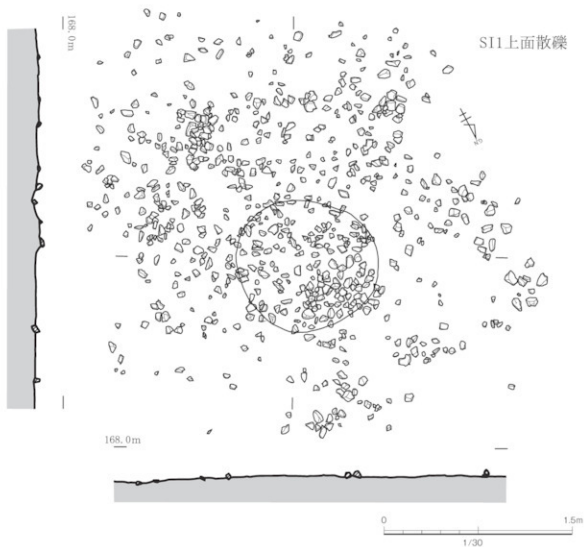
G19Grに位置し、8号集石遺構のすぐ北側で検出した遺構である。X層の散礫中で検出した。遺構の北西部部分以外の礫はほとんど残存していないが、掘り込みの一部が確認できたため集石遺構として認定した。掘り込みの平面形は、はっきりとせず不明である。断面は皿状を呈し、深さは最大で7cmを図る。配石はなく、遺構の構成礫はほとんどが砂岩である。遺物は出土しなかった。

#### (2) 1・2号焼土跡 (第9図)

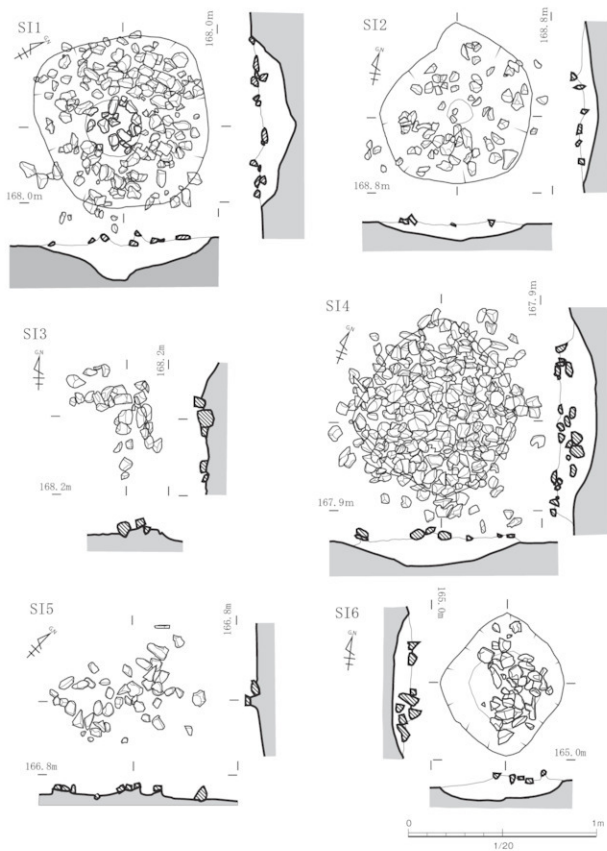
焼土跡は、F19Grで1箇所、F22Grで1箇所、合計2箇所検出した。F19Grに位置する1号焼土跡は長軸1.7m×短軸1.0m程の不整な二等片三角形に近い形状を呈する範囲に焼土が集中し、炭化物も極わずかであるが認められたため、焼土跡とした。掘り込みがあり、断面は皿状を呈し、深さは最大で約20cmを図る。焼土跡から遺物は出土してはいないが、検出面がX層であることや集石遺構を近くで検出したことから縄文時代早期の遺構と認定した。また、F22Grに位置する2号焼土跡は長軸30cm×短軸20cm程の不整な隅丸方形に近い形状を呈し、焼土が集中しており硬化面が認められたため、焼土跡とした。掘り込みがあり、断面は浅い皿状を呈し、深さは最大で約4cmを図る。遺物は出土してはいないが、検出面がX層で集石遺構も近くで検出したことから縄文時代早期の焼土跡と認定した。



- 1号焼土跡…褐色土 (10YR 4/5) 1~5mmの炭化物粒をくわずかに含む
- 2号焼土跡…暗褐色シルト (10YR 3/3) 1~5mmの黄色バミスわずかに含む

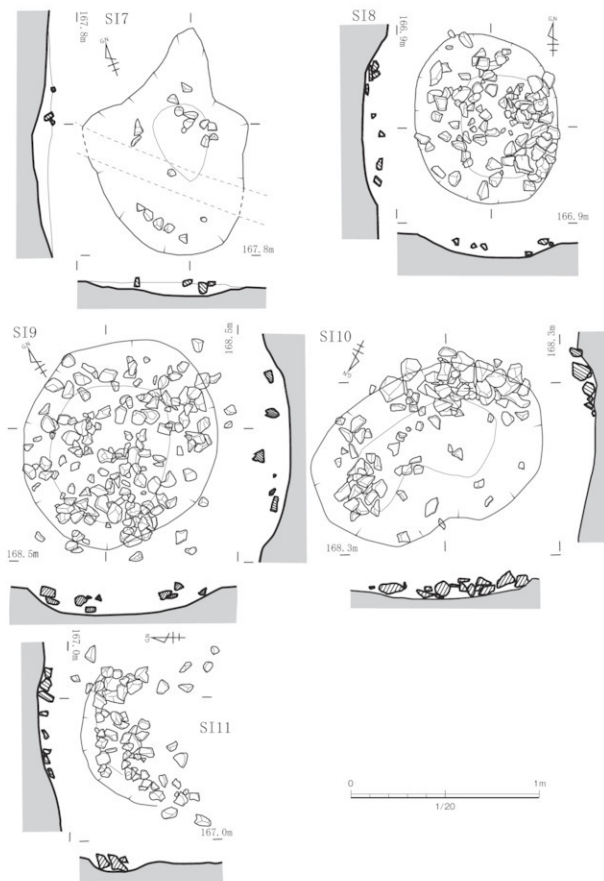


第9図 縄文時代早期遺構実測図① (1・2号焼土跡、SI1上面散礫)

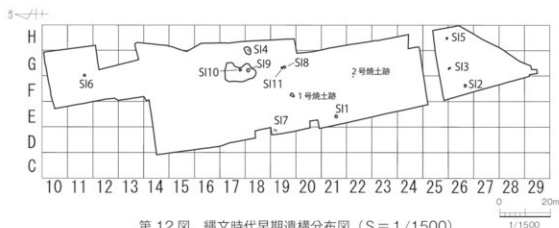


第10図 縄文時代早期遺構実測図② (SI1 ~ SI6)





第 11 図 縄文時代早期遺構実測図③ (SI7 ~ SI11)



第 12 図 縄文時代早期遺構分布図 (S = 1/1500)

## 2 遺物

### (1) 土器 (第 13 図 5～21)

本遺跡では、縄文時代早期の包含層からの遺物量は少ない。ほとんどが第 1 次調査区の北側で、尾根状の地形から出土した。器種はすべて深鉢である。

#### I 草創期から早期の土器 (第 13 図 6)

6 は D 区の P14 火山灰層下の X II 層から 1 点だけ単独で出土した。遺跡内からは同じ層位から土器は出土しなかったが、D 区の南東側では、旧石器時代と考えられる流紋岩製の剥片が出土しているため、縄文時代草創期から早期の可能性がある。器種は深鉢と思われ、無文の土器である。外面にスズ状の黒色の付着物があり、内面も黒褐色である。断面を見ると胎土に大きめの白色砂粒が目立つ。

#### II 早期の土器

##### 前平式土器 (第 13 図 7)

7 は E17Gr の X 層から出土した。口縁部上端部で口唇後部にヘラ状工具による二段の連続押圧を行い、それ以下は胴部にかけて横位や斜位の貝殻による浅い条痕文を施す。内面の調整は横方向のナデである。

##### 下剥峯式土器 (第 13 図 8～13)

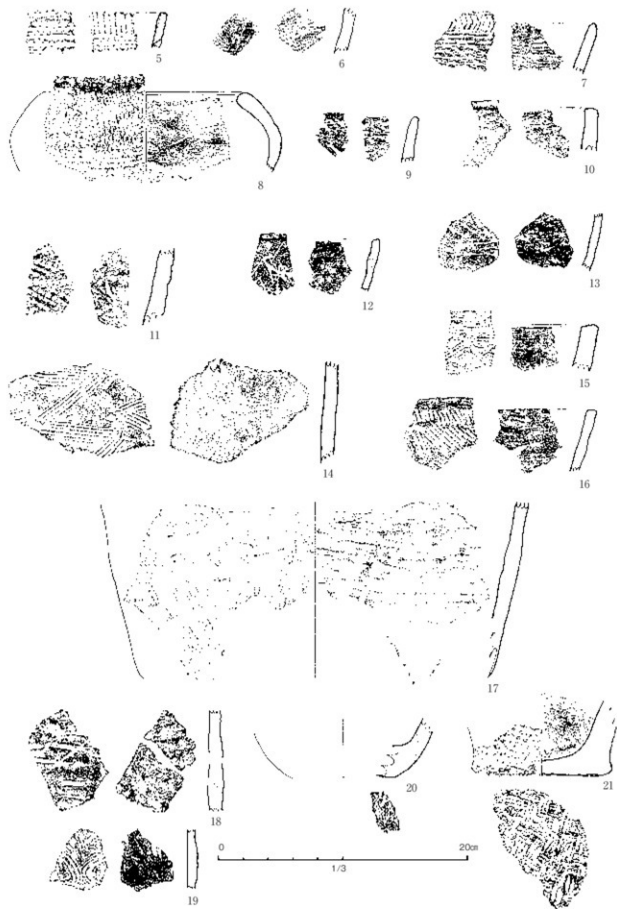
8 は口縁部から胴部にかけて縦方向に連点状の短沈線文と貝殻刺突文を、胴部からは横方向の貝殻刺突文を施す。内外面とも黒斑があり、内面の調整はナデである。内面は 6 に似た大きめの白色砂粒を含む。9・10 は口縁部で貝殻腹縁による連続刺突を行っている。10 は内外面とも黒斑がある。12・13 は外面に綾杉状の短沈線文を施している。11 は胴部で、綾杉状の貝殻刺突文を施す。

##### 桑ノ丸式土器 (第 13 図 14～17)

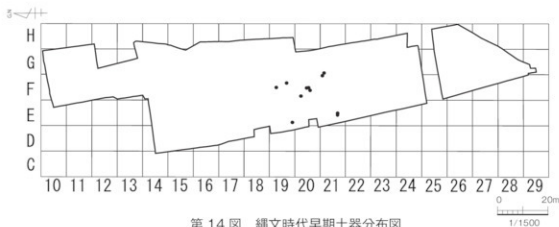
14・15・17 は櫛状工具による鋸歯状文を施す。16 は口縁部外面にやや斜位の貝殻条痕文、その下に斜位の貝殻条痕文を施す。内面に炭化物の付着が見られる。

##### その他の土器 (第 13 図 18～21)

18・19 は型式不明な深鉢の胴部である。18 は工具による斜位の短沈線文を施し、19 は櫛状工具による流水文を施す。18・19 の内面の調整はヘラ状工具によるミガキである。20・21 も型式不明な深鉢の胴部から底部である。20 は無文で内外面ともに工具による丁寧なナデを施す。21 は外面に多方向の摺糸文に近い文様を呈しているが、部分的には楕円押し型文に見える。



第 13 图 縄文土器実測图



第 14 図 縄文時代早期土器分布図

第 3 表 土器観察表 (縄文時代早期)

掲載番号	実測番号	器種	部位	出土地点		器面調整・模様		色調		胎土の特徴	型式その他
				区・Gr	層	外面	内面	外面	内面		
5	20	深鉢	口縁部	S19	X	ナデ、山形押型	唇体垂直山形押型	にぶい黒 7.5YR5-3	にぶい黄黒 10YR5-3	微細な光沢粒を多量、3mm以下の灰白色粒を少量含む	9号瓦直横溝穿孔あり
6	4	深鉢か	胴部	D区	X II	ナデ	ナデ	黒 7.5YR2-2	黒黒 7.5YR2-2	2mm以下の白色粒と光沢粒、3~1mmの白色砂粒を少量含む	無文土器
7	1	深鉢	口縁部	E17	X	二段光沢押型、貝殻裏面	ナデ	にぶい黄橙 10YR6-4	にぶい黄橙 10YR6-4	2mm以下の黄褐色粒をわずく、1mm以下の黒色粒、透明光沢粒、灰白色粒をわずかに含む	前平式土器 スス状の黒色付着物
8	7	深鉢	口縁 -胴部	F20G21	IX	列点状の短沈線、貝殻裏面	ナデ	にぶい黄橙 10YR7-2	にぶい黄橙 10YR7-3	2mm以下の白色粒とにぶい光沢粒を少量、2mm以下の乳母を少量含む	下調平式土器 黒染あり
9	3	深鉢	口縁部	B-5-6区	造成	貝殻微線列突	不明	明黄黒 10YR6-6	にぶい黄黒 10YR5-3	2mm以下の白色粒と光沢粒、黒色粒を微量含む	下調平式土器 風化著しい
10	9	深鉢	口縁部	H22	X	貝殻微線列突	ナデ	明黄黒 10YR7-6	にぶい黄橙 10YR7-4	微細な角閃石と透明光沢粒をわずく、微細な灰白色粒を少量含む	下調平式土器 黒染あり
11	11	深鉢	胴部	E21	X II	縦糸状の貝殻列突	ミギキ	にぶい黒 7.5YR5-3	にぶい黒 7.5YR5-4	2mm以下の雲母片、黄褐色粒、灰褐色粒、にぶい橙色粒を少量含む	下調平式土器
12	14	深鉢	口縁部	E19	IX	ナデ、縦糸状の短沈線	ナデ	にぶい橙 5YR6-4	にぶい黄橙 10YR6-4	微細な白色粒を多量、微細な黒色粒を中量、微細な光沢粒をわずかに含む	下調平式土器
13	16	深鉢	胴部	F20	X	ナデ、縦糸状の短沈線	ナデ	黒灰 10YR4-1	にぶい黄黒 10YR5-3	2mm以下の灰白色粒と1.5mm以下の極小な雲母を多量含む	下調平式土器
14	19	深鉢	胴部	C区	X	ナデ、縦糸状	ナデ	橙 5YR6-6	にぶい橙 7.5YR7-4	1mm以下の黒色光沢粒、透明光沢粒、白色粒を多量、1mm以下の細褐色粒を少量含む	桑ノ丸式土器
15	10	深鉢	口縁部	G27	X	ナデ、縦糸状	ミギキ	黒黒 10YR3-2	にぶい黄橙 10YR6-4	微細な赤褐色粒をわずく、微細な光沢粒を、1mm以下の乳白色粒を含む	桑ノ丸式土器
16	2	深鉢	口縁部	F19	X	短い貝殻条面	ナデ	にぶい黄黒 10YR5-3	黒黒 10YR3-1	3mm以下の灰白色粒をわずく、微細な黄褐色の雲母を多く含む	桑ノ丸式土器 スス状の黒色付着物
17	17	深鉢	胴部	F20	X	短い貝殻条面	ミギキ	橙 5YR6-6	灰黄黒 10YR5-2	2mm以下の浅黄色粒、半透明粒、1mm以下の角閃石、灰白色粒を含む	桑ノ丸式土器 スス状の黒色付着物
18	13	深鉢	胴部	H23	X	ナデ、短沈線	ミギキ	にぶい黒 7.5YR5-4	黒 7.5YR2-1	微細な灰白色粒と微細な黒色光沢粒を多量に、微細な透明光沢粒を中量含む	
19	15	深鉢	胴部	H23	X	ナデ、流水	ミギキ	橙 7.5YR6-6	にぶい橙 7.5YR6-4	1mm以下の灰褐色、褐色粒、黄褐色粒、角閃石を中量、1mm以下の黒灰色粒を少量、3mm以下の灰白色粒を含む	
20	12	深鉢	胴-底部	E21	X	ナデ	ナデ	にぶい赤黒 5YR5-4	にぶい赤黒 5YR5-4	2~6mmの灰白色粒を少量、微細な透明光沢粒を中量含む	
21	6	深鉢	底部	F20	IX	黒赤か短形押型か	ナデ	にぶい黒 7.5YR6-3	にぶい黒 7.5YR6-3	3mm以下の灰白色粒と光沢粒を少量、2mm以下の雲母を少量含む	内面や中風化 網状底

## 2 石器 (第15図22～34)

Ⅸ層からⅩ層では、縄文時代早期に属すると考えられる石器が出土し、13点を図化した。以下、器種別に記載する。

### I 打製石鏃 (第15図22～31)

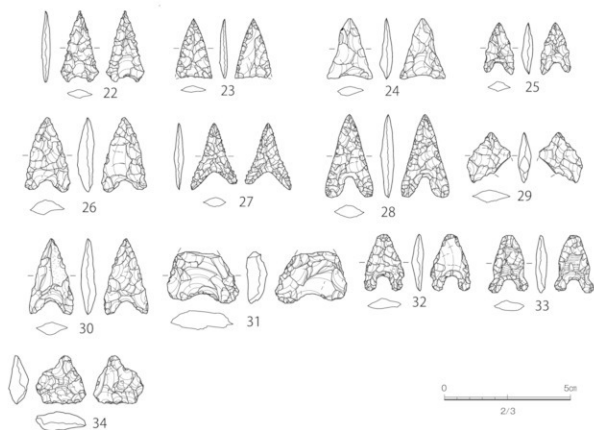
打製石鏃は10点を図化した。出土した層位は、Ⅸ層下部からⅩ層である。形状は、すべて二等辺三角形に近い。基部の形態は平基(23・24)、浅い凹基(22・31)、V字形凹基(27)、U字形凹基(25・26・28・30)に類別できる。石材は22・23・26・28・29がチャート製、25・30は安山岩製、24はホルンフェルス製、27は黒曜石製、31は流紋岩製である。また、脚端部の形態では、尖脚(22・23・25・27・29・30)、円脚(26・28・31)、方脚(24)に分かれる。22・27は側縁部がそれぞれ鋸歯状を呈する。25はB-6区の散礫中から出土した。28は早期の石鏃では最も長い。29は右端部が欠損しており、やや鋸歯状を呈している。31は上半分が欠損している。

### II 異形石器 (第15図32・33)

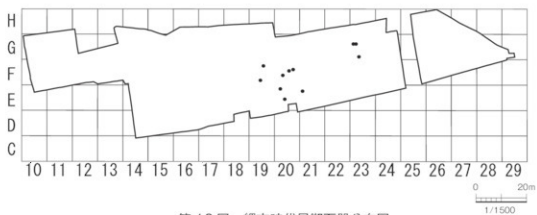
異形石器は2点を図化した。2点ともいわゆるトロトロ石器で、縞模様のあるチャート製である。2点とも石鏃のような平面形で挟りが施されている。32はE20GrのⅨ層から出土し、先端を丸く整える。33はF20GrのⅩ層から出土し、先端を丸く整え、両面に研磨痕が見られる。

### III 二次加工剥片 (第15図34)

二次加工剥片は1点を図化した。黒曜石製で、石鏃の未製品のような形状を呈す。



第15図 縄文時代早期石器実測図



第 16 図 縄文時代早期石器分布図

第 4 表 石器計測表（縄文時代早期）

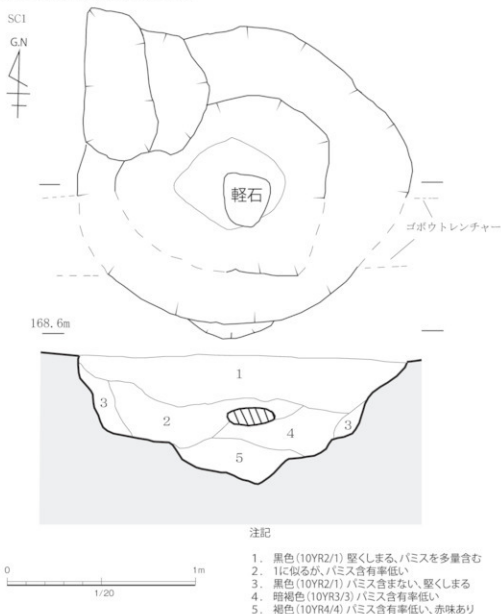
掲載 番号	器種	石材	出土地点		長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重さ g	その他
			遺構・Gr	層位					
22	石鏃	チャート	E21	X	28.0	15.0	3.6	1.0	
23	石鏃	チャート	E20	X	23.2	14.1	3.0	0.7	
24	石鏃	ホルンフェルス	G23	IX	23.6	17.9	5.0	1.3	
25	石鏃	安山岩	B4区敷裡	X	20.2	12.0	4.2	0.7	
26	石鏃	チャート	G23	IX	29.4	17.8	6.4	2.4	
27	石鏃	黒曜石	F19	X	26.1	18.2	3.8	0.8	
28	石鏃	チャート	G23	IX	32.6	18.7	5.3	2.1	
29	石鏃	チャート	F20	X	19.8	17.2	5.0	1.2	
30	石鏃	安山岩	F20	X	29.7	17.5	5.8	2.1	
31	石鏃	流紋岩	E19	X	20.2	28.1	8.0	4.8	
32	翼形石器	チャート	E20	IX	22.0	15.6	4.9	1.2	
33	翼形石器	チャート	F20	X	22.4	15.5	4.3	1.3	
34	二次加工剥片	黒曜石	F19	X	19.0	19.6	7.7	2.0	

## 第5節 縄文時代後期～晩期の遺構と遺物

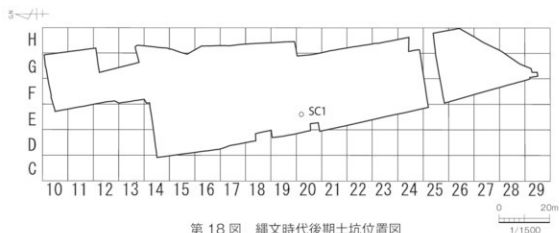
### 1 縄文時代後期の遺構

1号土坑 (SC1: 第17図 遺物: 第64図444)

縄文時代後期の遺構は、鬼界アカホヤ層上面で土坑1基を検出した。SC1を検出した第1次調査区の北西側は現代の耕作により削平を受け、表土剥ぎを行った時点で鬼界アカホヤ火山灰層が露出していたため、本来の遺構掘削面は不明である。平面形状は長軸1.70m×短軸1.56m程のほぼ円形プランを呈し、深さは最深部で約68cmを図る。SC1の北西側の一部は後世のビットにより削平されていた。また、SC1の上部はゴボウトレンチャーにより一部東西に削平されていた。埋土は5つの層で構成され、そのうち4つの層で霧島御池降下軽石と推測されるバミスを確認した。遺物は、土坑の中央付近の4層上面で長径26cm×短径22cm程の大きめの軽石を確認した。444は上部中央部分に窪みがある軽石で、二等辺三角形に近い形状を呈している。土坑内からは市来式系の土器を軽石の上方約10cm付近で1点確認したが、小片のため図化しなかった。



第17図 SC1実測図



第 18 図 縄文時代後期土坑位置図

## 2 縄文時代後期～晩期の土器 (第 21～59 図 35～396)

### (1) 分類

縄文時代後期の土器は、貝殻文系土器と磨消縄文系土器、その他の土器に大きく 3 類に分け、それぞれをさらに口縁部形態や文様、その他の特徴や胴部や底部の部位ごとに説明を行う。

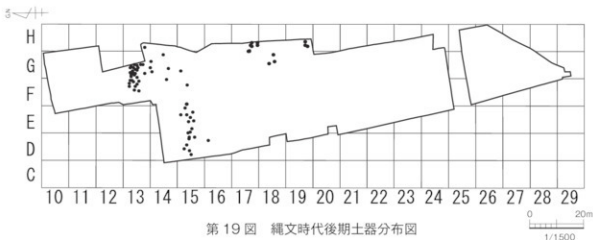
縄文時代晩期の土器は、上水流通遺跡 1 (2007 鹿児島県立埋蔵文化財センター) の分類を参考に、器面調整を優先して分類を行った。「粗製土器」、「半粗半精製土器」、「精製土器」の 3 種類に分け、器面内外面共に貝殻条痕文やナデなどの調整のみのものを粗製、器面内外面共にミガキ調整を施すものを精製、器面の内面または外面の片方にミガキやヘラ状工具によるナデなどを施すものを半粗半精製として位置づける。さらに、それぞれは器形の特徴などから細分した。

### (2) 縄文時代後期前半の土器 (第 21～49 図 35～280)

後期の土器は、主に D・E-15Gr や F・G-13～15Gr で出土した。特に、F・G-13・14Gr での出土量が多い。「市来式土器」(第 21～30 図 35～88)

54 点図化した。口縁部の断面が三角形または逆「く」字状をなす屈曲部が強く張り出すものである。文様は、貝殻腹縁による連続刺突文や工具による爪形あるいは「D」字形の連続刺突文や単独の刺突文、沈線文や凹線文などを施す。文様は、単一文の繰り返しや単純な組み合わせのものが多く、平口縁と波状口縁がある。35～41 は、口唇部をわずかに拡張させたような口縁部文様帯幅の比較的狭いもので、文様は「D」字形連続刺突文や貝殻腹縁刺突文、沈線文などである。波状口縁土器においても波頂部の文様は簡素なものである。35・37 は口縁部外面に「D」字形の連続刺突文を施すものである。36 は、口縁部外面に横位 2 列の沈線文と口縁部内外面の一部に縦位の刻目あるいは短沈線文を施す。38・41 は、口縁部外面に貝殻腹縁による連続刺突文を施し、38 は胴部に縦位 2 列の工具による刺突文を施す。39 は波頂部外面に横位の太い短沈線文を施し、その両端に刺突文を施す。頸部には貝殻腹縁による斜位の連続刺突文を巡らす。40 は波頂部の口縁部外面に三角形の沈線途中を刺突で止めている。中央に 1 条の横位短沈線文、その両脇に縦位 2 本の短沈線 (刺突か) を施し、胴部には波頂部直下に集約される斜位の沈線文を施す。42～65 は口縁部断面が三角形に強く肥厚し文様帯幅が比較的広いもので、波頂部が 35～41 に比べて上に延びる。文様は、沈線文間またはその上下に貝殻腹縁や棒状工具による連続刺突文を充填させたものである。42・43 は波頂口唇部に刺突文を施し、42～46 は波頂部内面に刺突文もしくは横位の短沈線文が見られる。42 の外面は口縁部に 4～5 条の沈線文、頸部に連続刺突文、43 の外面には波頂部に 4 列の刺突文、その横は両脇に 2 本の刺突のある横位短沈線文、その下は連続刺突文である。44 の外面は口縁部に連続刺突文に囲まれた横位沈線文、頸部に三角形の沈線文が施





第19図 縄文時代後期土器分布図

される。45～49・52は口縁部外面に上下2条の連続刺突文を施し、その間に沈線文や刺突文を施す。47・49は波頂部内面にも横位の連続刺突文を施す。50は波頂部内外面共に縦位の連続刺突文、波頂部外面には連続刺突文や縦位の短沈線文を施す。51は口縁部外面に上下2条の連続刺突文を施し、その間に浅い3条の平行な沈線文を施す。波頂部は外面のみ縦位の連続刺突文を施す。53は波頂部の肥厚がやや弱く、口縁部外面に縦・横・斜位の短沈線文を施し、屈曲上部の一部及びその下の頸部まで貝殻腹縁刺突文を施す。54・56は口縁部外面に、上下2条の連続刺突文を施し、54はその間に浅くて太い沈線文を、56は横位3条の沈線文と2条の短沈線文を施す。55は口縁部形態が35～40に類似し1条の連続刺突文を施すのみであるが、胴部には横位3～4条の浅い凹線文や短凹線文を巡らせ、その下に貝殻腹縁による刺突文を施して文様帯としている。57は口縁部外面に、上下2条の連続刺突文を施し、その間に浅い沈線文を2条、胴部には不規則な横位の沈線文を多く施す。58は口縁部に波状の沈線文、その下に貝殻腹縁刺突文を、59は上下2条の連続刺突文の間に斜位、および3条の沈線文を施し、下の2条は端部を合わせて弧状にしている。また、胴部にも横位の沈線文を施す。60は波頂部外面の中央に縦位と横位の刺突文を施し、その横に斜位の短沈線文を3条と弧状沈線文を施す。胴部は横位2条の沈線文の下に弧状の短沈線文、間に横位の貝殻腹縁刺突文を施す。波頂部内面には、指圧痕が確認できる。61・62・65は口縁部の上下に横位の連続刺突文を施し、その間は波頂部に刺突文や斜位の沈線文を、その横は横位沈線文を複雑に充填させている。63は屈曲部を挟んで上下に2条の貝殻腹縁刺突文を施す。64は口縁部外面にヘラ状工具による斜位の連続刺突文を2条施し、その間に1条の太い沈線文を施す。66～80は、口縁部が大きく逆「く」字状に屈曲するものである。文様は、波頂部には横位短沈線文とその両脇に斜位の短沈線文、その両側に横位沈線文を施すことを基本とし、口縁部の上下または下部、あるいは頸部に連続刺突文を施している。73は波頂部の口唇部に押圧を、74は波頂部内面に貝殻腹縁刺突文を、75は波頂部内面に1点の刺突文を施す。80はほとんど肥厚しない断面形態や文様構成など次の丸尾式土器の古式のものに相当する可能性がある。81～88は平口縁で、口縁部断面が逆「く」字または三角形に肥厚し、貝殻腹縁による連続刺突文や工具による浅い凹線文を1～4条巡らす比較的単純な文様の簡素なものである。

「丸尾式土器」(第31～34図89～102・105～107)

17点図化した。器面調整や施文法などかつては「市来式土器」の範疇に入れられていた「市来式土器」との強い関連がある土器である。「市来式土器」の特徴である口縁部断面の肥厚や逆「く」字形の屈曲などが少なくなるか、あるいは全く見られないもので、外面頸部のくびれ付近から口縁部が外傾

または外反し、口唇部が肥厚せず尖るか丸みを帯びて上に延びるものである。文様は口縁部～頸部付近に施され、パターン化されたものや貝殻腹縁による単純な連続刺突文が施される。前迫によると(1992前迫亮一)逆「く」字形の口縁になるAタイプと外反するBタイプがあり、それぞれに波状口縁(a)と平口縁(b)があるが、ここでは殆どが波状口縁で、平口縁は105(A bタイプ)のみである。ただ、次の「草野式土器」に分類した144・153・154～158などは口縁部の断面形態や文様などから「丸尾式土器」の平口縁(B bタイプ)の可能性が有る。89～94・100～102・106・107は口縁部の肥厚がほとんど見られず、逆「く」字形の屈曲が少し残るもので、文様は口縁部外面屈曲部から頸部にかけて2条の貝殻腹縁刺突文を施す。92・94・100は、その下に短い貝殻腹縁刺突文、93は工具による連続刺突文を施す。102は口縁上部にも1条の貝殻腹縁刺突文を施す。105～107は口縁部に「市来式土器」の66～80でも見られたパターン化された沈線文が見られる。平口縁の105(A bタイプ)を除いてこれらは前迫のA aタイプである。95～99は口縁部が強く外反し、逆「く」字形の屈曲が全く見られないもので、前迫のB bタイプである。95・96は貝殻腹縁刺突文を1条、97は2条施す。97は2条目が途中で一部無文となる。103・104・108は「丸尾式土器」とするには文様構成が異なるが、口縁部の外反や断面形態の類似からこの項で説明する。103は円形の沈線文を施し、円の内部に4箇所の連続刺突文を施す。外面はナデ調整である。104は沈線文や連続刺突文を充填させ、複雑な文様を施す。108は口縁部外面に貝殻腹縁刺突文を2条施し、その間に二又状工具による縦位の沈線文を施し、その間に縦位の連続刺突文を施す。頸部にも1条の連続刺突文が見られる。109は口縁部外面にヘラ状工具による斜位の連続刺突文を3条施し、その間に浅い横位の沈線文を施す土器であるが、口縁部形態や磨消縄文を意識したような意匠からこの類に入れておく。

#### 「草野式土器」(第35～41図110～158)

49点図化した。かつては「草野式土器」と称され現在は「市来式土器」の一器種としてとらえられている土器である。外面のくびれ付近から口縁部が短く外傾または外反し、口唇部から口縁端部は断面が小さな三角形または丸みを帯びる。文様は、口縁端部外面や頸部～胴部に貝殻腹縁による連続刺突文や工具による刺突文、沈線文を巡らす単純なものが多く、橋状把手や刺突文のあるコブ状突起などの貼付文を付ける文様帯幅の広いものもある。110～116・118～121は貼付文を施すものである。110・111は橋状の把手及び突起が付き、突起上部は「角」状に分かれる。110は口縁部外面から胴部にかけて3条の工具による連続刺突文を、111は口唇部に工具による連続刺突文、頸部に沈線文を施す。112・113は口縁端部外面に貝殻腹縁刺突文を、その下の頸部に沈線文を施す。114は口縁端部外面にヘラ状工具による斜位の連続刺突文を、頸部に横位3条の沈線文を巡らし、その下には横位の貝殻腹縁による上下2段の連続刺突文を施す。115・118・119は胴部に沈線文を施す。116・117は口唇部と頸部から胴部にかけて斜位の貝殻腹縁刺突文を施す。117は、その下に横位の沈線文が見られる。120・121は口縁部外面～頸部に横位の沈線文を、その下の胴部にかけて斜位の平行沈線文やその間に平行する貝殻腹縁刺突文を充填させる。122～127は頸部から胴部にかけて平行沈線文とその間に貝殻腹縁による横位の刺突文を施す。128～130は胴部外面に横位の沈線文と横位の貝殻腹縁刺突文を交互に巡らす。131～145・153～155・157・158は頸部のくびれ付近に1条の貝殻腹縁刺突文を巡らす簡素な文様の土器である。146～152は糸痕文のみの無文土器であるが、口縁部形態からここに含めた。あるいは150など「市来式土器」の無文土器に当たるかもしれない。このうち154～158は「草野式土器」に分類したが、先に述べたとおり「丸尾式土器」の平口縁(B bタイプ)と考えられる口縁部断面形態であり、この154～158は「丸尾式土器」の可能性が有る。

「底部」(第41～42図159～175)

17点図化した。底部まで分かる完形の土器があまり出土していないので、上記のどの類の土器にどの底部が対応するのか不明であるため、ここでは一括して取り上げた。平底土器の胴部～底部で、以下の3類に分類できる。なお、159は底部が欠損しているが、「市来式土器」の一部に見られる脚台状の底部になるものと考えられる。精製深鉢と思われる。

ア 脚台状底部 (159)

イ 底面から直角気味に胴部が立ち上がる。(160・162～164・166・169・170・175)

ウ 底面からやや外傾して胴部が広がり気味に立ち上がる。(161・165・167・168・171～174)

「台付皿」・「脚台付浅鉢」(第43～46図176～232)

55図化した。脚台が付き、波状口縁を呈するものが多い。皿の内面は沈線文や貼付突帯文、刺突文などで、脚台部分は、沈線文や透かし、刺突文、赤色や白色の顔料などで装飾されているものが多い。ほとんどが「市来式土器」～「丸尾式土器」の時期のものであると思われる。176は内外面とも圧痕が見られる。177は皿の口縁部～胴部で外面にスズ状の付着物がある。178は口縁部が肥厚し、口唇部には指圧ナデが施され、口縁部外面に圧痕が見られる。179は波頂部に刺突文を有するコブ状突起を貼り付けている。180はコブ状突起が上部2又に分かれ、さらにその左端部に小さな突起が付く。181・182は波頂部に上部が平坦な突起を貼り付け、182は突起の中央に穿孔を有する。183は上面が平坦なコブ状突起を有する脚台付浅鉢のほぼ完形で脚部に貼付突帯文を施す。184は皿部に突起を、脚部に方形の透孔を有する。185はコブ状突起で平坦面に短沈線文を11条施す。平坦面中央には、小さな浅い刺突が見られる。186はコブ状突起で、白色と赤色の顔料を塗布している。また、突起の平坦面には中央に大きな穿孔があり、その周辺には小さな刺突文を16箇所施している。187は突起と考えられ、棒状の粘土を内面から外面にU字型に貼り付けている。188はコブ状突起の外面に把手が付き、白色顔料が見られる。189はコブ状突起で、突起の平坦面中央に穿孔を有する。190は皿の口縁部内面に横位の短沈線文を巡らせている。191は口唇部に大きめの穿孔を、その両脇に幅広の沈線文を施し、白色の顔料が付着している。192は両端に刺突を有する沈線文を内面に施し、部分的に「5」字状または「S」字状に見える。193はコブ状突起部分で、突起上面に4条の短沈線文、突起の根元部分に大きな穿孔を、両側に短沈線文を施す。194は皿の内面に平行沈線文と曲沈線文を施す。195は比較的小さいコブ状突起で、突起の口唇部や口縁部に工具による刺突文を施す。皿の部分には白色の顔料が見られる。196は口唇部と口縁端部に沈線文を施し、内面は約2cmの粘土帯を縦面に貼り付け、蛇行した沈線文を施す。その両側には、口唇部から縦方向に1条の短沈線文を施す。さらに、内面の胴部付近には横位2条の沈線文を施す。197は口唇部から口縁部にかけて、粘土紐を規則的に薄く貼り付けている。198は外面に幾何学的な幅広の沈線文を施し、内外面とも薄い赤色顔料が塗布されている。199は口縁部内面に不規則な列点状の刺突文を多数施す。200は口縁部外面に斜位の貝殻緑刺突文を巡らせ、波頂部の内面には、横位の貝殻緑刺突文を2条施す。201は、口唇部から口縁部内面にかけて3条の沈線文とその間に斜位の貝殻刺突文を施す。波頂部内面にコブ状の突起を有する。202は口唇部に波状の貼付文を施す。203は波頂部の口唇部から口縁部外面に2段のコブ状突起を有し、内面には沈線文を施す。204は口唇部に「渦」状の貼付文を施す。205は、口縁端部に短沈線文を連続させ、全体に白色の顔料が付着する。206は、皿部から脚部で、全体に白色の顔料が付着する。207は口唇部に刻目が、波頂部には刻みを有する粘土紐を貼り付け、とぐろを巻いた蛇のような文様が見られる。また、脚上端の突帯文上にも刻目を斜位に施す。208は脚部で、斜位の沈線文を連続させ、その上下に横位の沈線文を施す。209は波

頂部に連続刺突文のあるコブ状突起を貼り付け、そのうち右側面に穿孔が1箇所見られる。210はわずかに白色の顔料が付着する。211は外面に沈線文、内面に指圧痕が見られる。211～232は脚部である。212・213は内面にスス状の付着物が見られ、いずれも外面に横位の貼付突帯文を施す。215は外面に格子目状の沈線文を施す。216は、外面に縦位の沈線文を施す。217は外面に波状の曲線文を施し、脚裾に連続する刻目を施す。218は脚裾に貝殻腹縁による連続刺突文を巡らせ、外面には斜位の凹線文を施し、大きい透孔を有する。219は脚裾に刻目を、外面には沈線文を施す。220は脚裾に刻目を、外面に沈線文を施し、白色の顔料が付着する。221は外面に沈線や刺突文を施す。222は脚裾に突帯を巡らし、その下に沈線文を、また外面にも沈線文を巡らす。223はスス状の付着物が見られ、脚裾に連続刺突文を、外面に横位や縦位の沈線文を施す。224は赤色の顔料が付着している。225はスス状の付着物が見られ、幅広の沈線文を施す。226は脚裾に斜位2条の連続刺突文を巡らし、4箇所と考えられる透かしが見られる。透孔間の脚部には沈線文を施すコブ状突起を有する。227は、外面に横位に幅広の凹線文を2条施す。228は外面に黒斑が見られ、沈線文を縦・横位に施す。段は削り出しによるものと思われる透孔を有する。229は、脚部の完形で貼付突帯文や沈線文を巡らす。230は脚裾に縦位の刻目を連続させ、その上に突帯や沈線文を施す。白色の顔料が付着している。231は外面に突帯や穿孔を有し、白色の顔料が付着する。232は外面に横位3条の沈線文を施し、大きい穿孔を有する。全体的に赤色の顔料が付着する。

「磨消縄文土器」(第47・48図233～264)

32点図化した。以下型式別に記述する。

(鐘崎式土器)

242～247はいわゆる「鐘崎式土器」の鉢形土器である。243は口唇部に工具による連続刺突文を部分的に施し、口縁端部が立ち上がる。また、口縁部外面に横位の細い沈線文を1条施す。244は口唇部に2条の浅い沈線文、口縁部外面には3条の沈線文とその上部2本の間に縄文を施す。245は口唇部に1条の沈線文を、口縁部に幅広の縄文帯を施し、その下に2条の太い沈線文を施す。246は口唇部に1条の沈線文を施す。247は口唇部から口縁端部に穿孔のあるコブ状の突起を2つ、口唇部は部分的に構目条の短沈線文を、胴部には横位の細い沈線文を施す。

(北久根式土器)

233～241・253～259はいわゆる「北久根山式土器」の鉢である。233は1条の沈線文が頸部を、2条の沈線文が胴部を巡り、その間に縄文を充填した斜位の沈線文を施す。口縁端部は風化が著しいが縄文を施している。234・235は口縁端部に縄文を施す。236は口縁端部に縄文帯、その直下に浅い沈線文を施す。237は口縁端部に斜位の縄文帯を施す。238は口縁部に2条の平行な沈線文を施し、その間に縄文が見られる。239は口唇部に縄文帯を施し、口縁端部が肥厚してやや外反する。240は口唇部及び口縁端部に貝殻腹縁縄文を施し、内面にも曲沈線文間と同擬似縄文が見られる。241は口唇部に沈線文と連続刺突文、口縁部外面に3条沈線文を施す。上2本の沈線文間に縄文が見られ、左端部に橋状把手もしくは突起の剥離痕が見られる。口唇部文様は鐘崎式であるが、口縁部形態が他の同型式の土器と異なる。253～259は鉢の肩部や胴部である。253は上端部に深い刺突を施す斜位の沈線文を3条、その下に横位の沈線文を2条と部分的に貝殻腹縁縄文を施す。254は短沈線文を繋いで鉤状の文様を施す。255は3条単位沈線文と、その間に縄文帯を施す。256は3条単位沈線文で楕円形に近い曲線文様を、その間は幅の狭い縄文帯を施す。257は全面斜位の縄文を施す。258は細い3条単位の沈線文を施し、その間に縄文が見られる。縄文帯がやや狭い。259は横位の沈線文を2条、その間に幅

広の縄文帯を、その下に縦位の沈線文を3条施す。

248～252・260～264は、その他の磨消縄文・精製磨研土器である。248は胴部に曲沈線文と一部縄文を施す。内面口縁端部にも浅い沈線文が見られる。249は渦文を施す。250は口縁部外面に沈線文を施すが、縄文帯は比較的狭い。251は口縁部外面に渦状と思われる突帯文を施す。252は口縁部外面に細い沈線文を2条、その間に不明瞭ながら貝殻擬似縄文と思われる文様を施す。260は横位の幅広い沈線文を7条施す。261は渦文を施し、その間に貝殻擬似縄文を施す。262は鉢である。263・264は平底の精製磨研土器深鉢の底部である。

「その他の土器」(第49図265～280)

ここでは上記の類に当てはまらないものを一括して説明する。16点図化した。265は胴部で、縦位の貝殻腹縁刺突文を施し、その下に工具による横位の沈線文を3条、その下に工具による斜位の沈線文を施す。266は波状口縁を呈し、口唇部の一部に規則的な刺突文を、口縁部外面に斜位の沈線文を、波頂部の内面には縦位の沈線文を2条施す。267は工具による沈線文の間に竹管状工具の端部で円い刺突文を施す磨消縄文を模した土器と思われる。268は沈線文を斜位に、刺突文を沈線の一部に施す。269は深鉢の突起物と思われ、縦位3条の沈線文を施す。270・271は沈線文と刺突文で文様を施し、271は「指宿式土器」である。272は波状口縁を呈す磨研土器である。273は横位や斜位の沈線文が見られる「指宿式土器」と思われる。274は口縁部外面に円弧状の沈線文や刺突文を施す。275は沈線のある把手状の貼付文を施し、その両脇には穿孔を施す。口縁部は貝殻腹縁による刻みや「V」字状の沈線文を施す。276は、口縁部外面の文様帯が黒変しており、横位の沈線文を施し、「指宿式土器」と考えられる。277は口唇部に3個の押圧文がある小さなコブ状の突起を貼り付け、口唇部には沈線文を施す。278は無文の深鉢で、279は、無文の鉢である。280は、口唇部と口縁部外面から頸部にかけて貝殻腹縁刺突文を巡らす。

(3) 縄文時代後期後半の土器(第50～51図281～290)

「三万田式土器」

D15・F21・F23・G10・G12・G21～G23Gr付近のIV層・Va層から出土し、10点を図化した。10点とも精製土器である。281～283は丸みを帯びた肩部から、外反する口縁部となり、内面屈曲部に稜をもつものである。284は長い口縁部が内傾する土器である。285は深鉢でやや外反しながら直口する口縁部となる。286は口縁部外面に4条の平行な沈線文を施す浅鉢である。287は胴部に4条の凹線文を施し、内面頸部が屈曲し稜を有する鉢形土器と思われる。288は浅鉢と考えられる。289は底部で上げ底を呈する。290は、脚台付浅鉢の脚台で中央に大きい透孔を有する。

(4) 縄文時代晩期の土器(第51～59図291～396)

遺物はF・G10～11・21～23Gr付近のIV層・Va層から集中して出土し、106点を図化した。

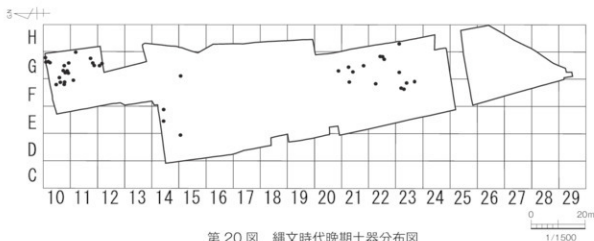
「粗製土器」・「半粗半精製土器」(第51～57図291～353)

291～301・305は無文の口縁帯を有する土器である。291は黒斑を有する。295は板状の工具で条痕が施され、内面にスズ状の付着物が見られる。297も同じく板ナデ状の条痕がみられる。299は粗いヘラミガキが施され、スズ状の付着物が見られる。301の外側は貝殻条痕文が見られるが、内面はヘラミガキであり、299とともに半粗半精製土器に入れた方がよいかも知れない。305はヒレ状突起を施す。302～304・306・307・309は無刻目突帯文土器である。302～304・306のいずれも貝殻条痕文が見られる。306は全体的にスズ状の付着物が見られる。309は外面口縁端部をわずかにつまみ出し、口縁部には鋸歯状の沈線文と無刻目突帯文が見られる。308・311・312は刻目突帯文土器である。311・312は同一

個体で、上下の刻目突帯間は斜位のミガキを施す。310は孔列文土器で、口唇部に斜位の連続刻みを施す。313～315は無文の深鉢である。316・318～323は平底の深鉢の底部である。317は丁寧な調整の浅鉢の底部と思われる。晩期の底部に特徴的な端部が外へ張り出すものが見られる。324・325は上げ底の鉢か浅鉢の底部である。326・327は無文土器の鉢ないし深鉢で粗い条痕を施す。328・329・331は鉢で、329は口縁帯を有する土器である。330は口唇部に退化したようなリボン状突起を施し、その中間付近の口縁端部から斜めに延びる突起を有する。332・333は無刻目突帯文を2条施す。いずれも外面にミガキが見られる。334は削り出し状の口縁帯と胴部に無刻目突帯を有し、内外面ともに粗い条痕文が施される。335・336は鉢の底部で、外面に組織痕を有する。337は外面が横方向のヘラナデもしくはミガキで、339の外面は板ナデ状の条痕、その下にケズリが見られる。340は口縁端部に貼付突起の剥離痕跡と思われるものが見られ、341の外面は光沢のあるケズリ痕が見られる。342は席目状の組織痕を有する。343は外面に板ナデ状の条痕が見られる。344・345も同様に粗い条痕が見られる。346の外面は、胴部の組織痕と口縁部の間に段が生じている。348は内面に未貫通の焼成後の穿孔が1箇所見られる。349～353は組織痕を有している。

精製土器（第57～59図354～396）

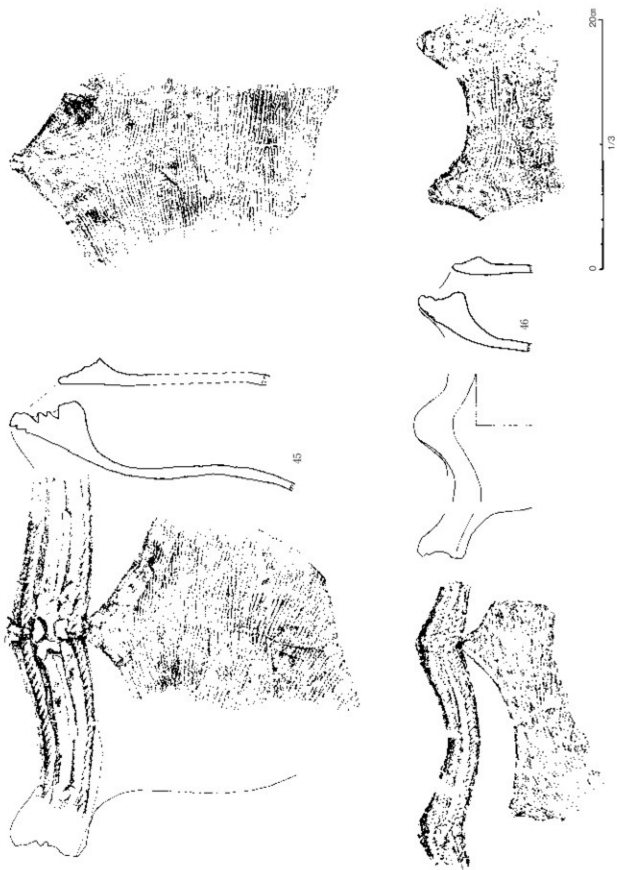
精製土器のほとんどは晩期前半頃のものと思われる。364～396は晩期後半頃のものと思われる。376は横位の沈線文と格子目状の沈線文を施す。377は胴部から口縁部にかけて強く内傾し、口唇部にケズリを施す。378は胴部に孔列を施す。381は全体に丸みを帯び、口縁部の内外面に浅い沈線文を施す。382は口唇部にコブ状突起を施す。383は胴部でやや内湾し、口縁部にむけてやや外反する。386は頸部にリボン状突起を施す。388は胴部で丸みを帯び、横位の沈線文を施す。389は貼付突帯文を施す。390は壺形の器形を呈し、口縁部から頸部にかけて横位の沈線文を施す。392は胴部に横位の無刻目突帯文を2条施す。393は丸底、394～396は平底土器の底部で、395・396は上げ底状を呈する。



第20図 縄文時代晩期土器分布図

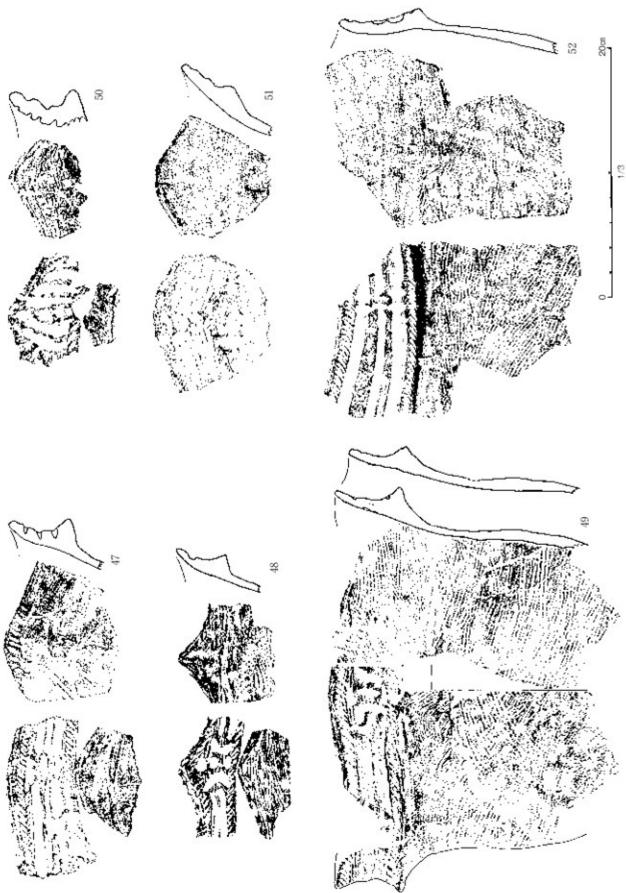


第 21 図 縄文土器実測図②

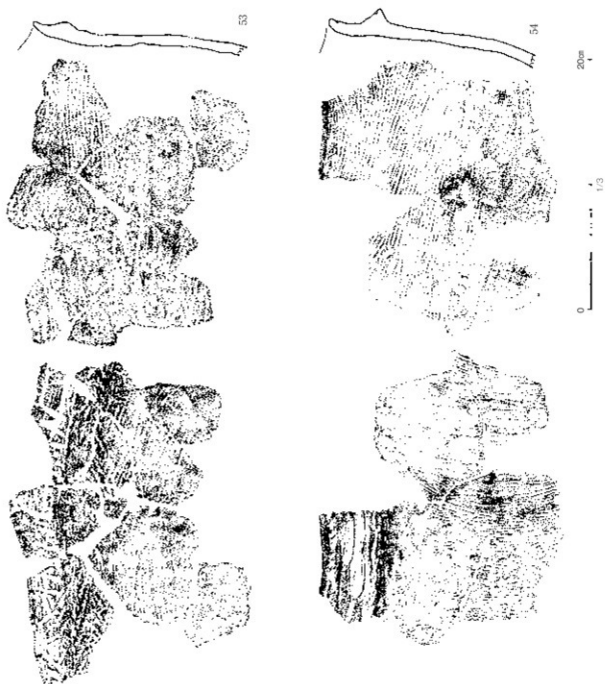


第 22 图 縄文土器実測図③

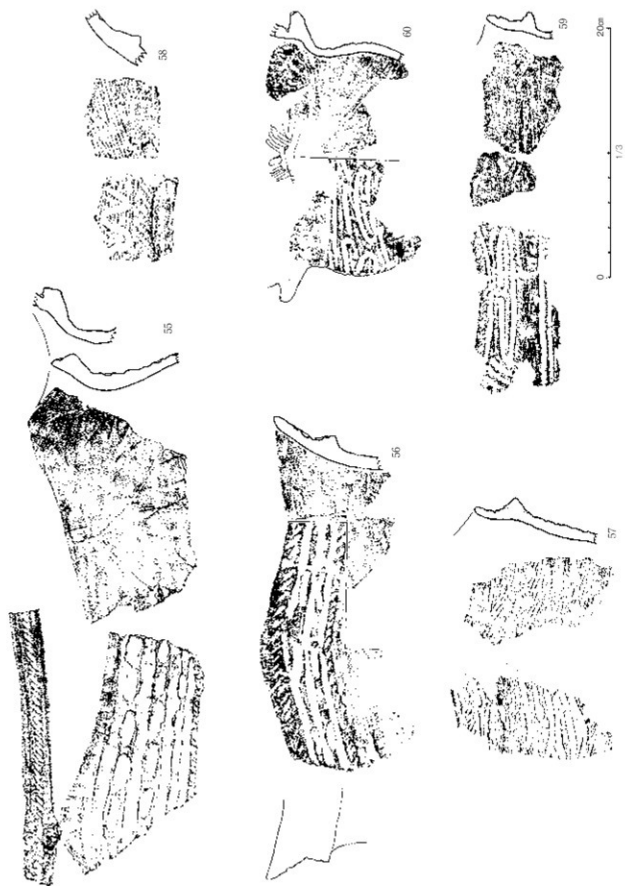




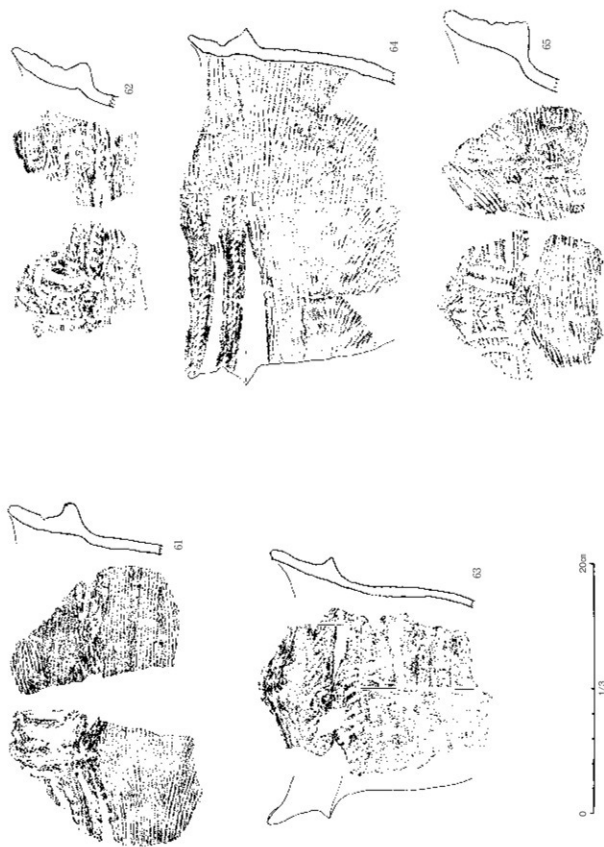
第 23 図 縄文土器実測図④



第 24 図 縄文土器実測図⑤



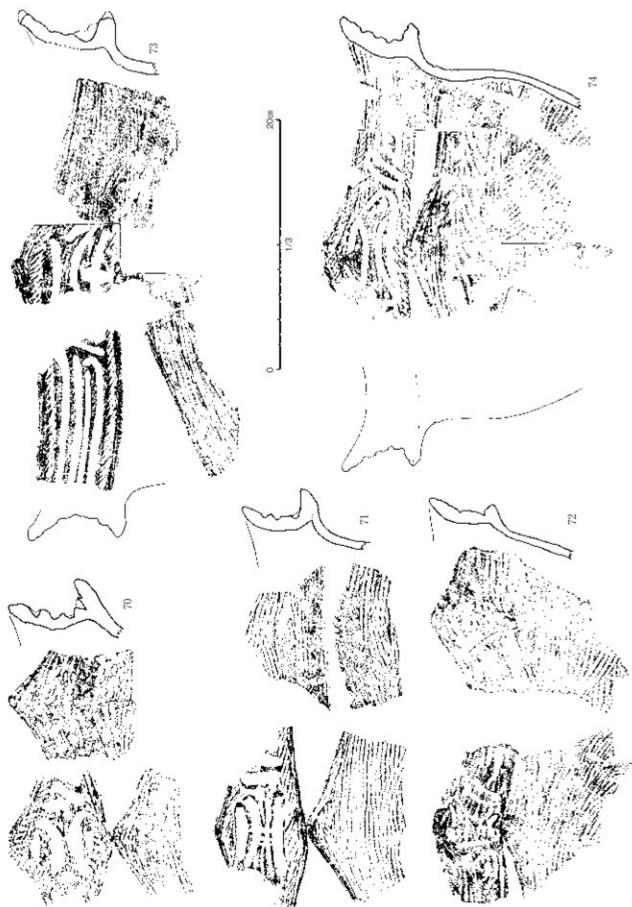
第 25 図 縄文土器実測図⑥



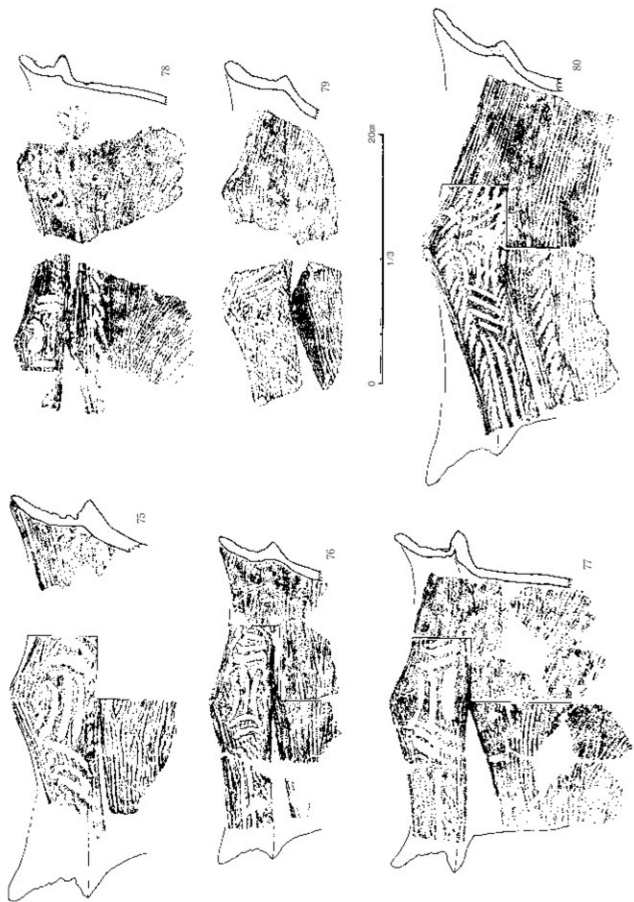
第 26 図 縄文土器実測図⑦



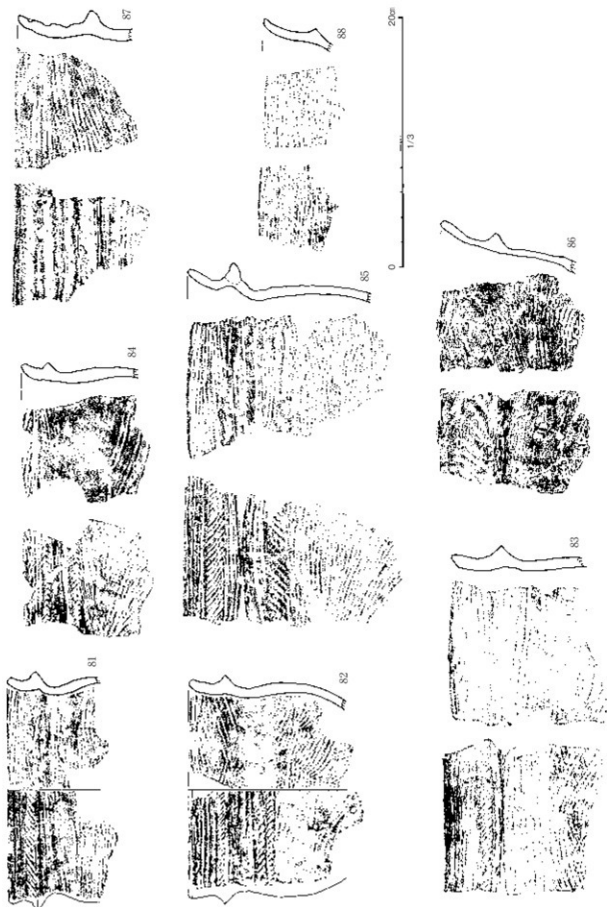
第 27 図 縄文土器実測図⑧



第 28 図 縄文土器実測図⑨

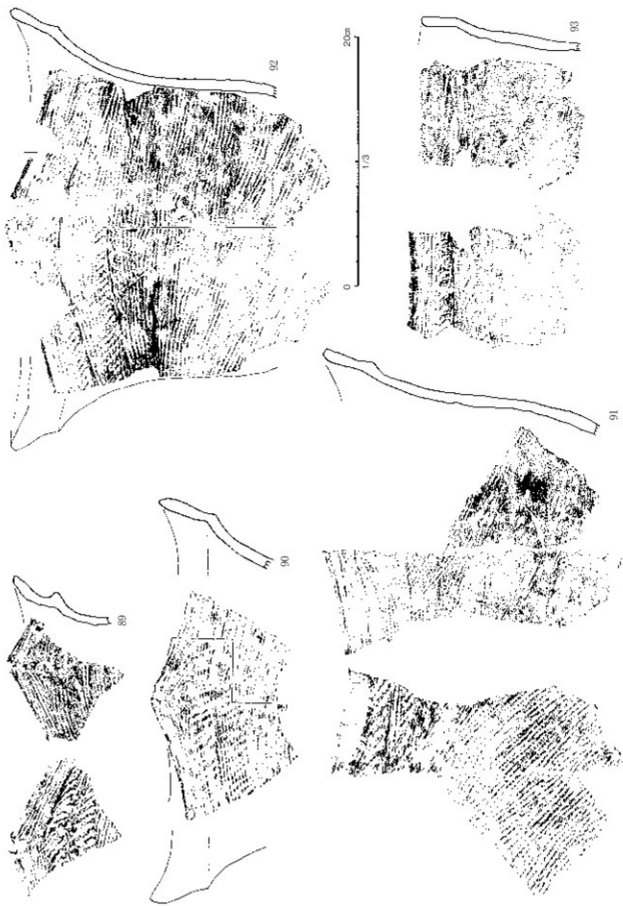


第 29 図 縄文土器実測図⑩

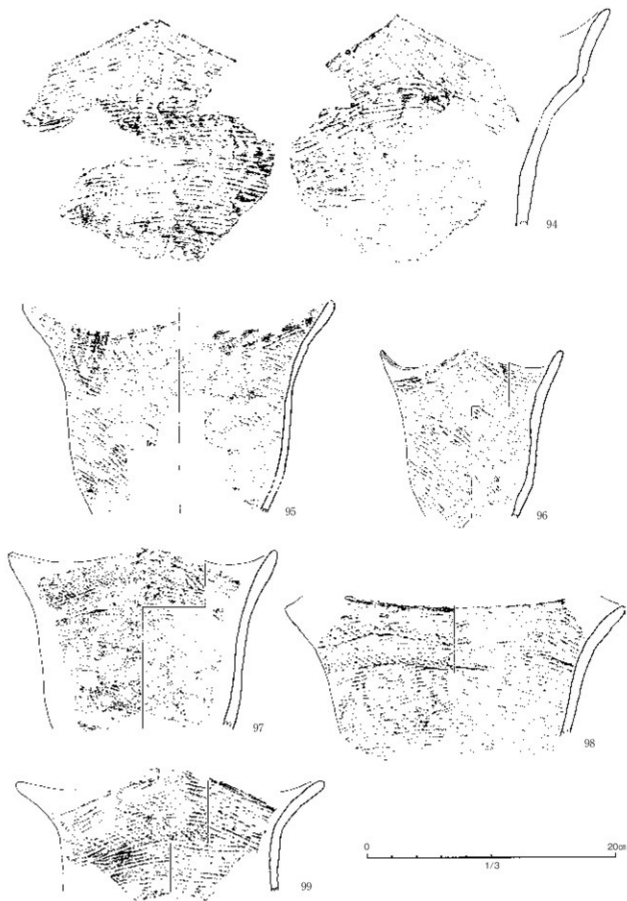


第 30 図 縄文土器実測図①

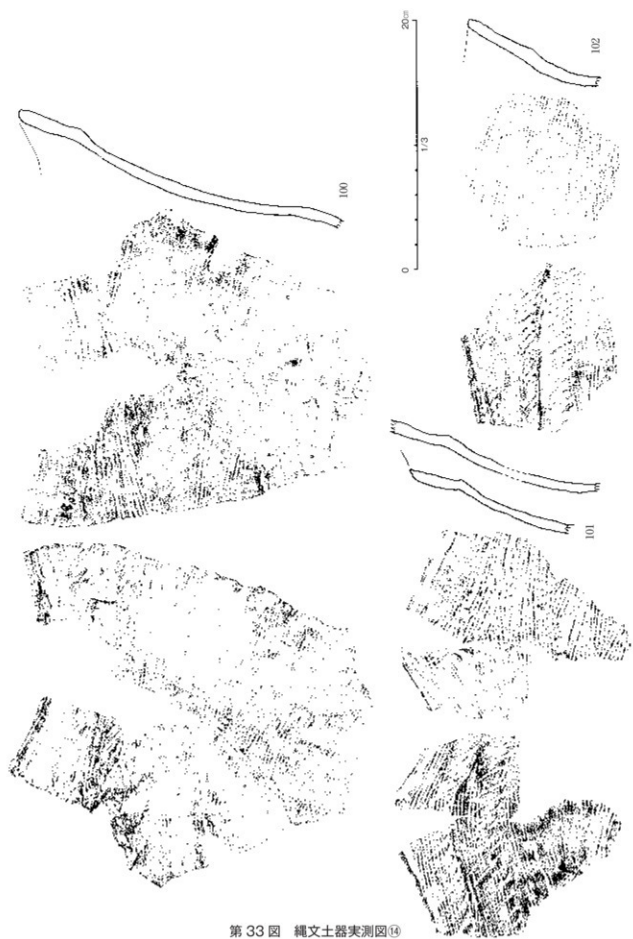




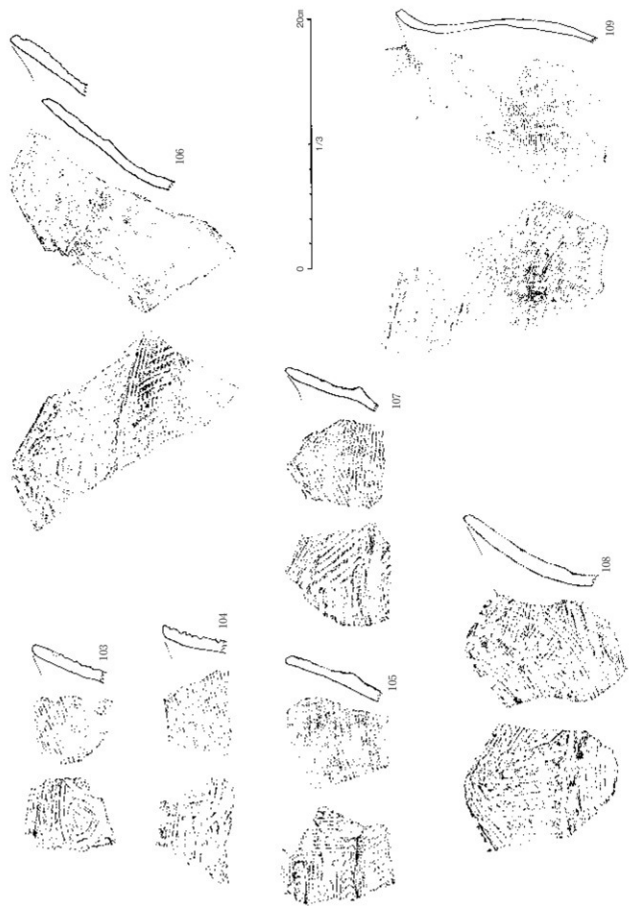
第 31 図 縄文土器実測図⑫



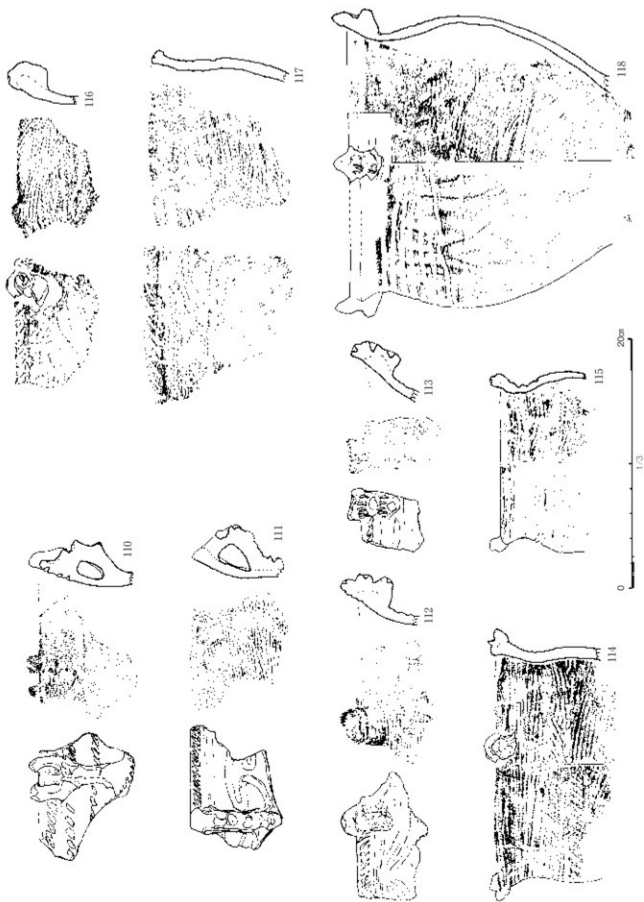
第 32 図 縄文土器実測図⑬



第 33 図 縄文土器実測図④



第 34 図 縄文土器実測図⑬



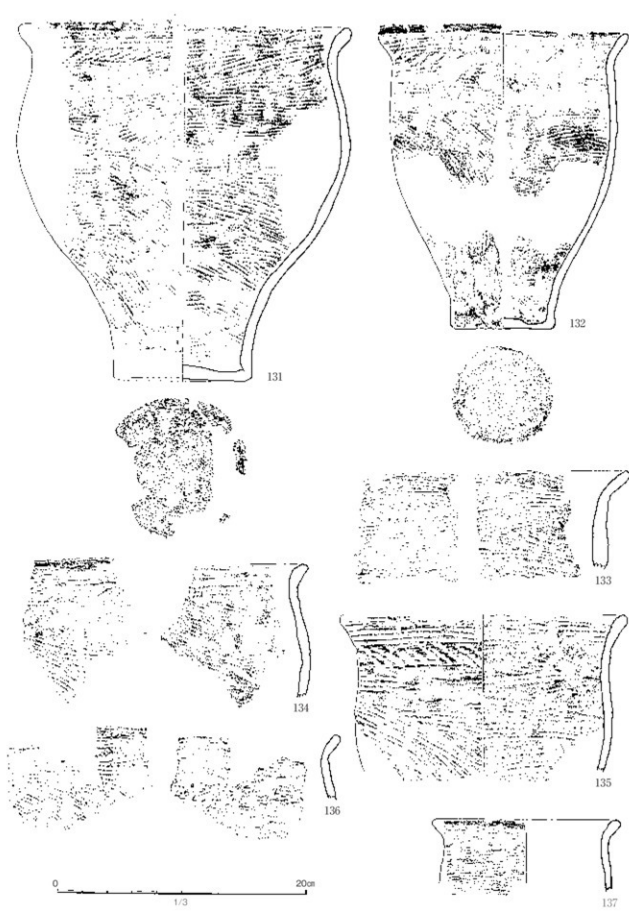
第 35 図 縄文土器実測図⑩



第 36 図 縄文土器実測図①

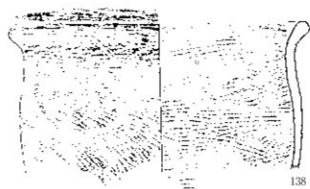


第 37 図 縄文土器実測図⑩



第 38 図 縄文土器実測図⑨





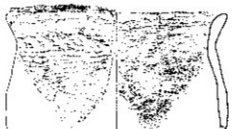
138



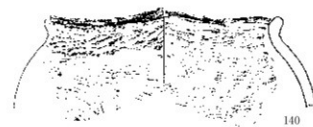
142



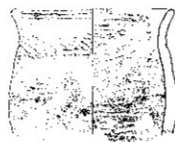
139



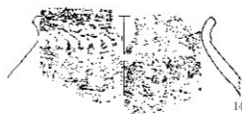
143



140



144



141



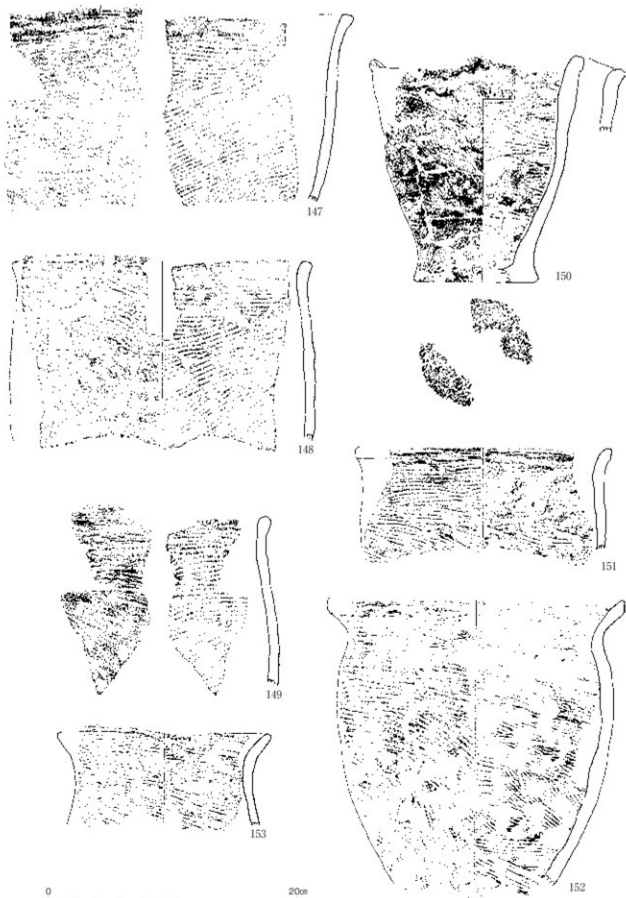
145



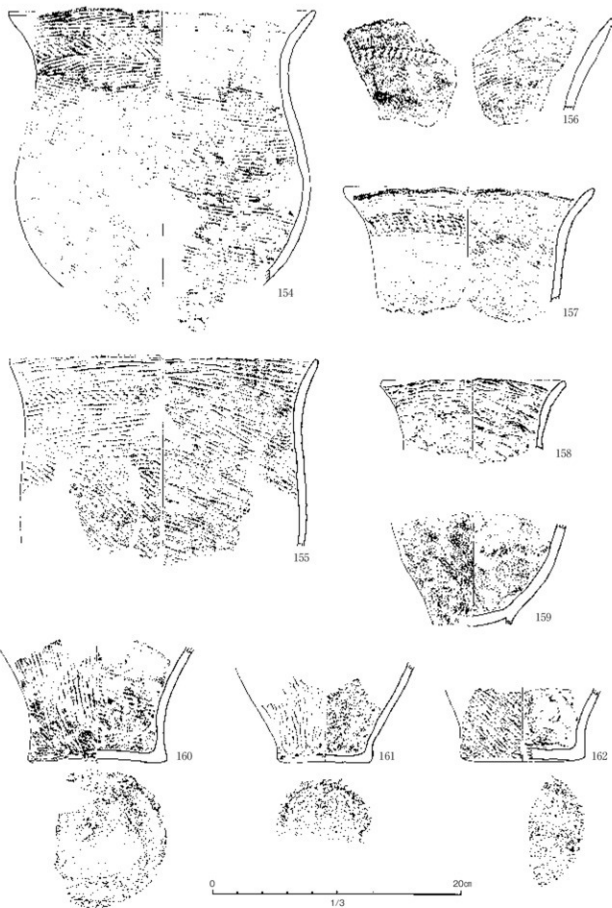
146



第 39 図 縄文土器実測図②



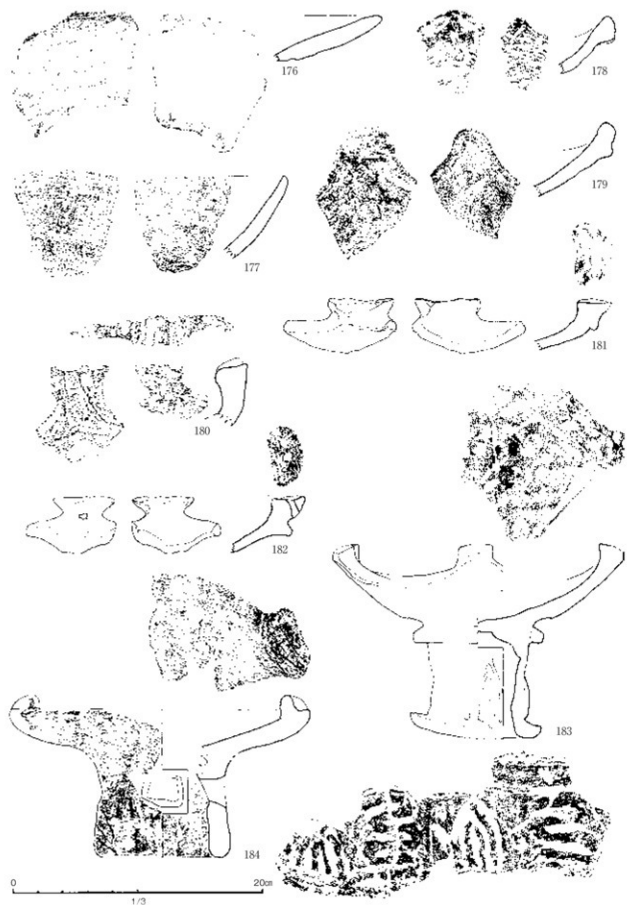
第 40 図 縄文土器実測図②



第 41 図 縄文土器実測図②



第 42 図 縄文土器実測図②



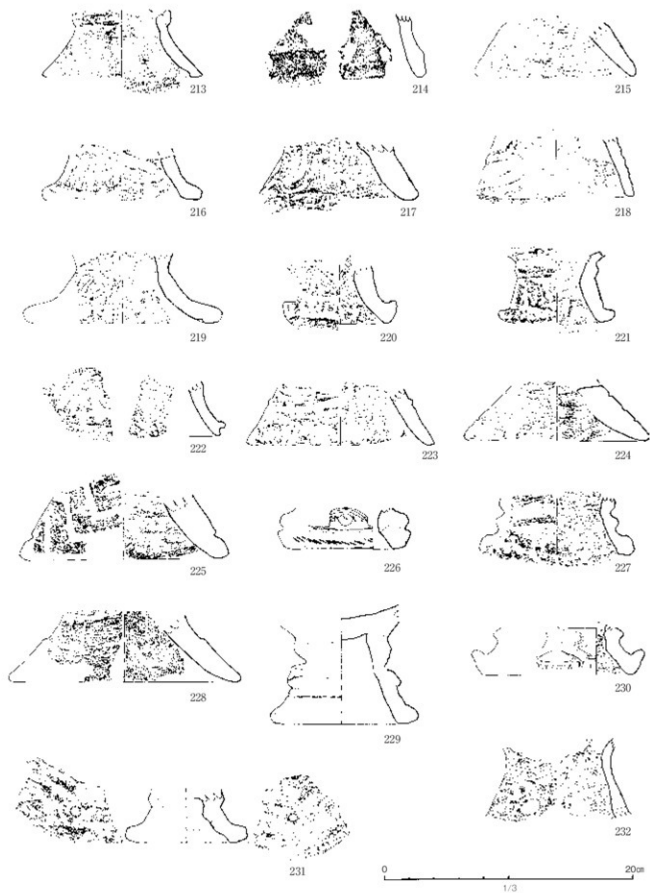
第 43 図 縄文土器実測図巻



第 44 図 縄文土器実測図②

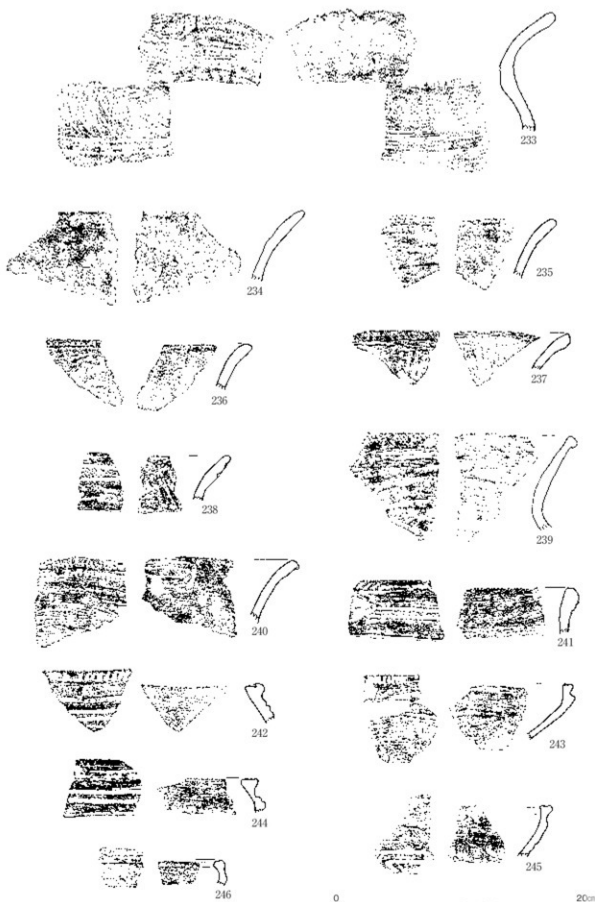


第 45 図 縄文土器実測図⑥

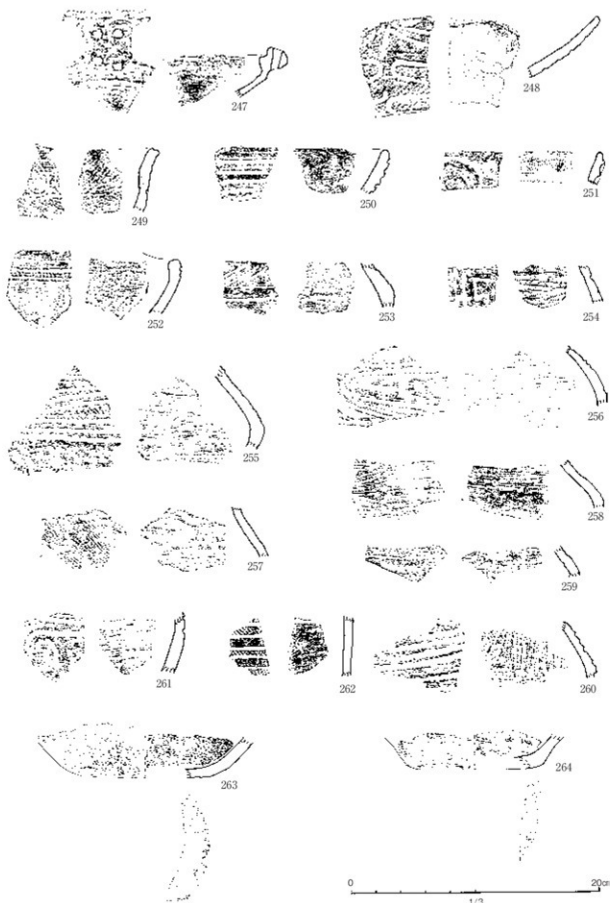


第 46 図 縄文土器実測図⑦





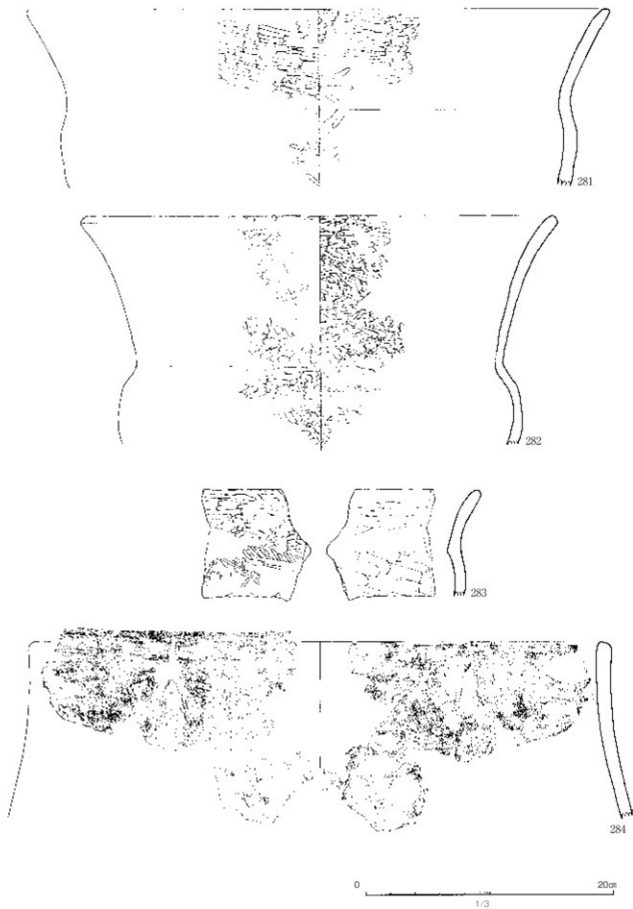
第 47 図 縄文土器実測図巻



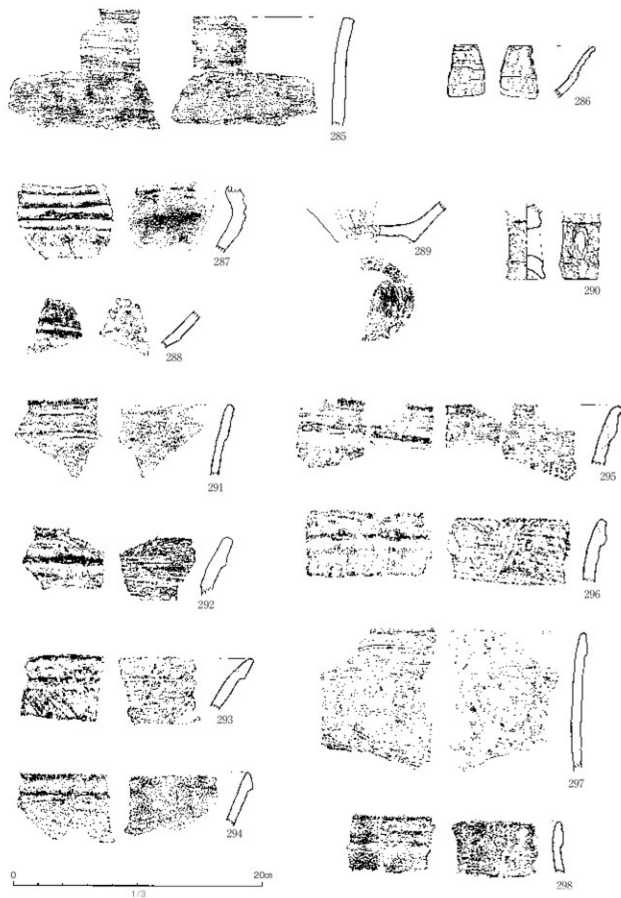
第 48 図 縄文土器実測図②



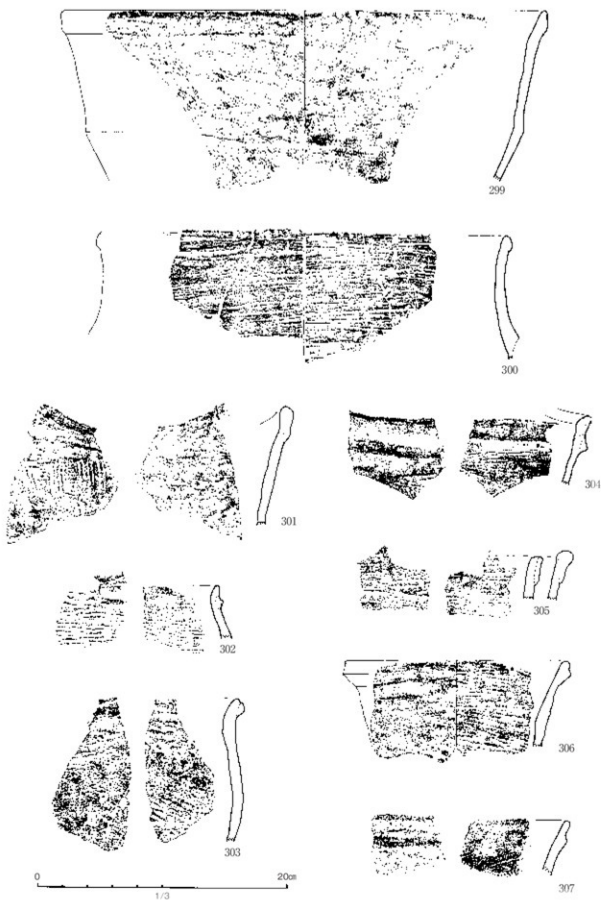
第 49 図 縄文土器実測図⑨



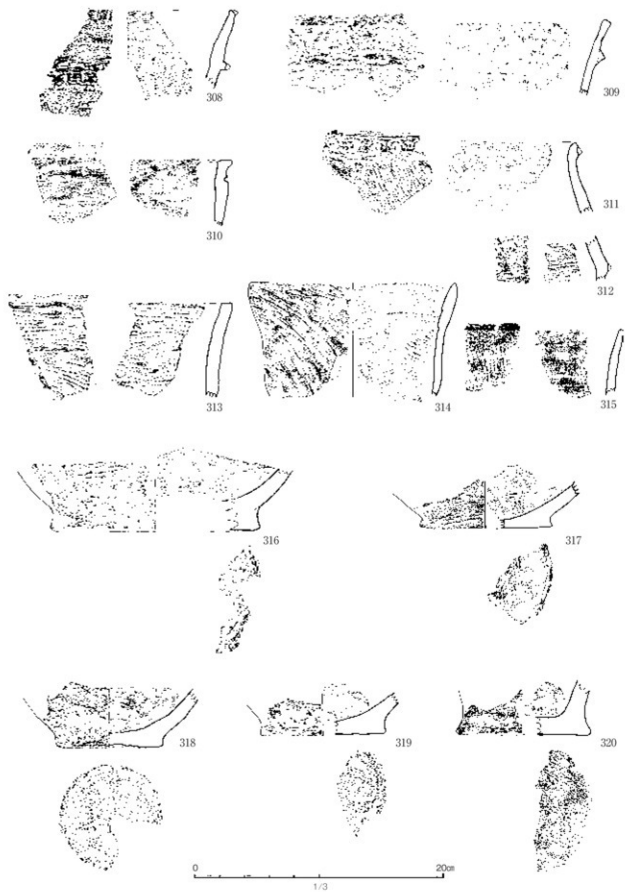
第50図 縄文土器実測図⑪



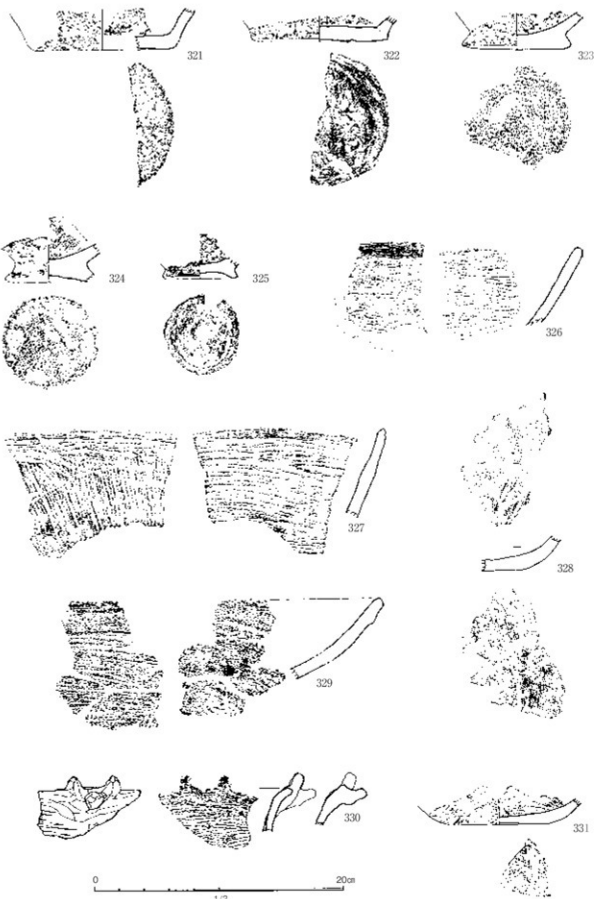
第 51 図 縄文土器実測図②



第 52 図 縄文土器実測図③

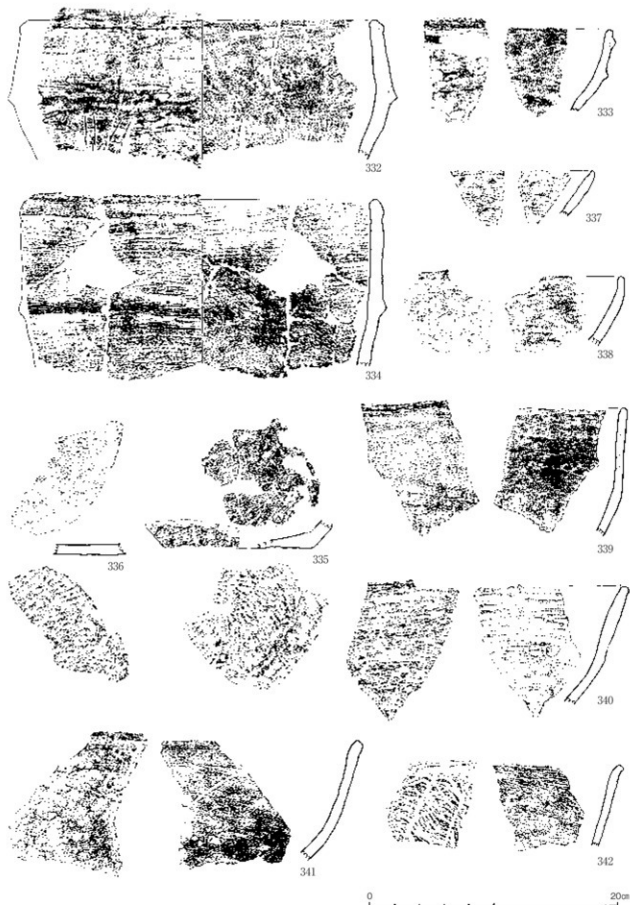


第 53 図 縄文土器実測図④



第 54 図 縄文土器実測図⑨





第 55 図 縄文土器実測図等



343



344



345



347



346



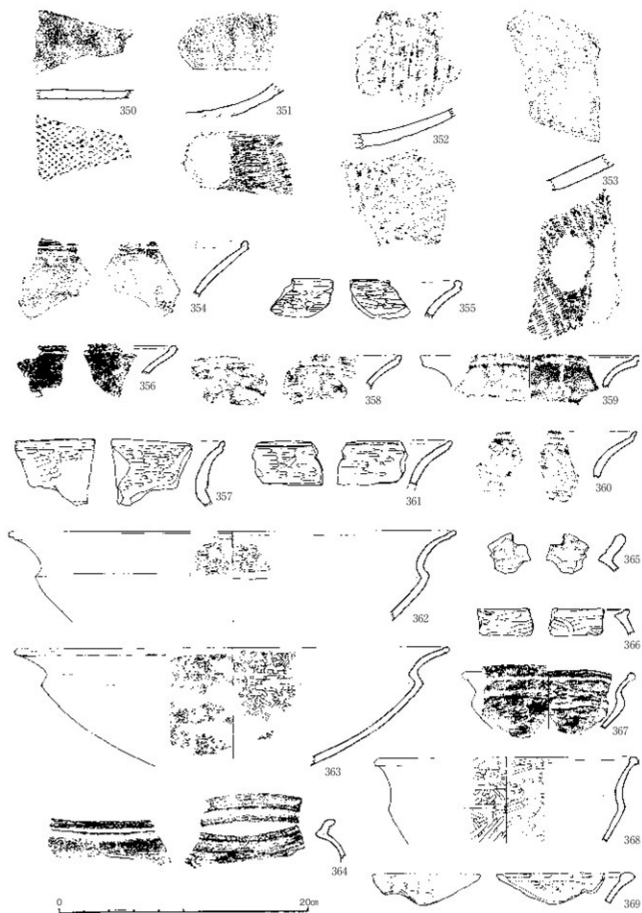
348



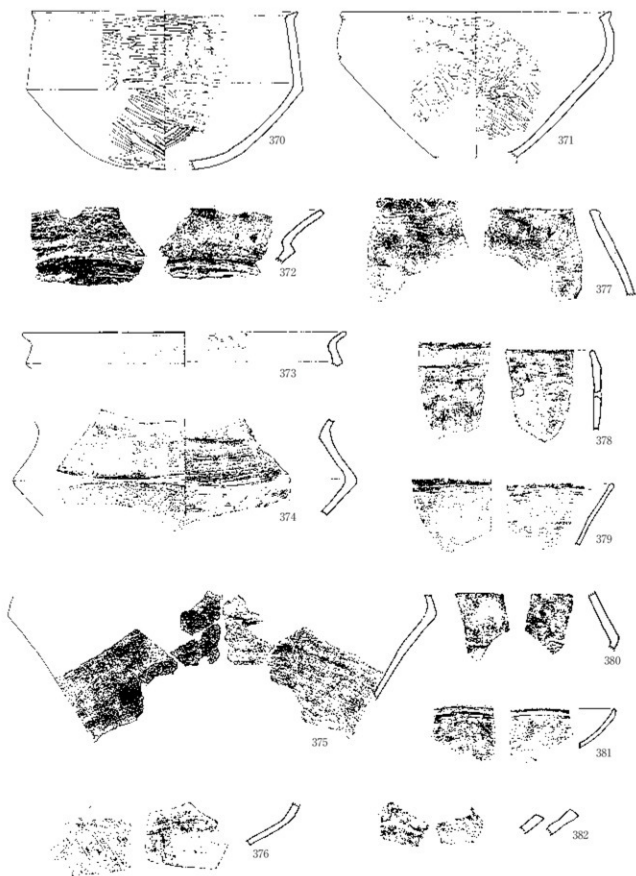
349



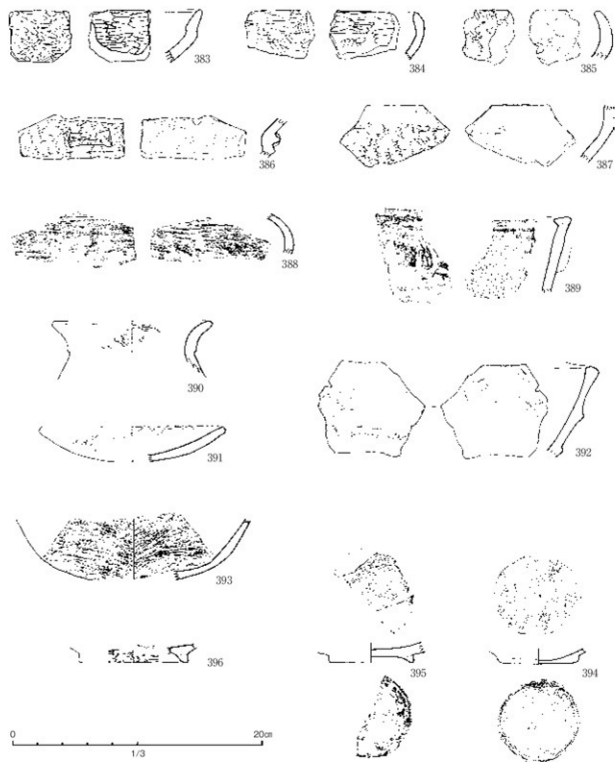
第 56 図 縄文土器実測図⑦



第 57 図 縄文土器実測図⑧



第 58 図 縄文土器実測図⑨



第 59 図 縄文土器実測図④

第5表 土器観察表(縄文時代後期)

観測番号	天幕番号	観測期	遺址	出土層位 G1-G7	器型調査・文書		色調		胎土の特徴	型式・その他	
					外観	内面	外観	内面			
35	337	3B	13層遺	F13	Va	目録未記, 透視観察	ナテ, 目録未記	黒褐色2YR4-2	黒褐色2YR3-1	2mm以下の赤褐色を施すわずかに, 微細な灰白色粒, 少量の黒色粒を中量含む	A.5級の赤褐色土器, 灰白色粒
36	337	3B	13層遺	G10	Va	ナテ, 沈積, 透視観察	ナテ, 観察	暗褐色10YR4-6	黒褐色10YR2-2	2mm以下の赤褐色, 透視観察, 灰白色粒, 内面粒を少量, 微細な赤褐色, 赤褐色粒を少量含む	A.5級の赤褐色土器
37	338	3B	13層遺	G15	Vb	ナテ, 目録未記, 透視観察	ナテ, 目録未記	暗褐色2YR5-6	暗褐色2YR3-6	微細な灰白色粒, 黒褐色粒を少量含む	A.5級の赤褐色土器
38	271	3B	13層遺	K34	Vb	ナテ, 目録未記, 透視観察	ナテ, 目録未記, 観察	2.5mm以下の赤褐色	黒褐色10YR3-1	2.5mm以下の赤褐色を中量, 微細な透視観察をわずかに含む	A.5級の赤褐色土器
39	331	3B	13層遺	H2	高土	ナテ, 沈積, 目録未記, 観察	目録未記	暗褐色10YR4-1	暗褐色10YR4-3	微細な赤褐色を含む	A.5級の赤褐色土器
40	349	3B	13層遺	D-R1	T1	沈積, 観察	ナテ, 目録未記	暗褐色2YR5-6 暗褐色2YR4-1	2.5mm以下の赤褐色を中量, 微細な透視観察を少量含む	A.5級の赤褐色土器	
41	277	3B	13層遺	G10	Va	ナテ, 観察	ナテ	暗褐色2YR5-6 2.5mm以下の赤褐色	暗褐色2YR3-2	2.5mm以下の赤褐色を中量, 微細な透視観察を少量含む	A.5級の赤褐色土器, 灰白色粒, 赤褐色粒を少量含む
42	335	3B	13層遺	G11	Va	ナテ, 沈積, 観察	ナテ, 観察	2.5mm以下の赤褐色	黒褐色10YR2-2	2.5mm以下の赤褐色を中量, 微細な透視観察を少量含む	A.5級の赤褐色土器
43	328	3B	13層遺	G10	Va	ナテ, 目録未記, 観察, 透視	ナテ, 観察, 目録未記	暗褐色10YR3-1	暗褐色10YR3-6	微細な赤褐色を含む	A.5級の赤褐色土器
44	257	3B	13層遺	F12	Va	ナテ, ナテ, 沈積, 観察	観察, 目録未記	暗褐色10YR3-1-3-2	暗褐色2YR2-2 暗褐色10YR4-6	2mm以下の赤褐色を中量, 2mm以下の灰白色透明粒と赤褐色をわずかに含む	A.5級の赤褐色土器
45	268	3B	13層遺	H11	Va	ナテ, 沈積, 目録未記, 観察, 透視	ナテ, 目録未記, 観察	暗褐色10YR3-1 暗褐色10YR2-3 赤褐色10YR4-6	暗褐色10YR3-3	2mm以下の赤褐色, 灰白色粒, 赤褐色粒を少量, 2mm以下の赤褐色をわずかに含む	黒褐色10YR3-6
46	233	3B	13層遺	G11	Va	ナテ, 沈積, 目録未記, 観察	ナテ, 目録未記, 観察	赤褐色10YR4-6	赤褐色10YR4-6 赤褐色10YR2-2	2mm以下の灰白色粒を少量, 微細な透視観察を中量含む	A.5級の赤褐色土器 黒褐色10YR3-6
47	257	3B	13層遺	K34	Vb	ナテ, 沈積, 目録未記, 観察	ナテ, 目録未記, 観察	暗褐色2YR3-4	暗褐色10YR2-2	2mm以下の赤褐色, 灰白色粒, 赤褐色粒を少量含む	A.5級の赤褐色土器
48	251	3B	13層遺	K34	高土	ナテ, 沈積, 目録未記, 観察	ナテ, 目録未記	暗褐色2YR3-1 暗褐色10YR3-6	暗褐色10YR3-2	1mm以下の赤褐色透明粒をわずかに含む	A.5級の赤褐色土器
49	258	3B	13層遺	G10	Va	ナテ, 目録未記, 観察, 透視	目録未記, 観察	暗褐色10YR4-4-6 2.5mm以下の赤褐色	2.5mm以下の赤褐色 10YR3-3-3-4	3mm以下の灰白色粒, 内面粒をわずかに含む	黒褐色10YR3-6
50	255	3B	13層遺	F11	B	ナテ, 観察, 透視	ナテ, 観察	赤褐色10YR4-9 2.5mm以下の赤褐色	2.5mm以下の赤褐色	2mm以下の赤褐色, 赤褐色粒, 赤褐色透明粒を少量, 微細な赤褐色, 赤褐色粒を少量含む	A.5級の赤褐色土器
51	339	3B	13層遺	K31	B	ナテ, 沈積, 観察	ナテ	2.5mm以下の赤褐色	暗褐色10YR3-8	2mm以下の赤褐色, 赤褐色粒, 赤褐色透明粒を少量, 2mm以下の赤褐色を少量含む	A.5級の赤褐色土器
52	239	3B	13層遺	F12	Va	ナテ, 沈積, 透視, 観察	ナテ, 目録未記	暗褐色2YR3-1 暗褐色2YR4-2	2.5mm以下の赤褐色	2mm以下の赤褐色を中量, 赤褐色透明粒を少量, 透視観察をわずかに含む	A.5級の赤褐色土器
53	236	3B	13層遺	K34	Vb	ナテ, 沈積, 目録未記, 観察	目録未記	暗褐色2YR3-4 2.5mm以下の赤褐色	暗褐色10YR3-8-9-5	2mm以下の赤褐色を中量, 透視観察, 灰白色透明粒を少量含む	A.5級の赤褐色土器
54	260	3B	13層遺	H10	Va	ナテ, 観察	ナテ	暗褐色10YR4-6	2.5mm以下の赤褐色	2mm以下の赤褐色を中量, 透視観察, 灰白色透明粒を少量含む	黒褐色10YR3-6
55	233	3B	13層遺	G10	Va	ナテ, 観察	ナテ	2.5mm以下の赤褐色	暗褐色10YR3-4 暗褐色10YR3-3	2mm以下の赤褐色を中量, 透視観察, 赤褐色透明粒を少量含む	A.5級の赤褐色土器
56	361	3B	13層遺	G10	Va	ナテ, 沈積, 観察	ナテ	暗褐色10YR3-6 2.5mm以下の赤褐色	暗褐色10YR3-6 暗褐色10YR3-6 2.5mm以下の赤褐色	2mm以下の赤褐色を中量, 微細な透視観察を少量含む	A.5級の赤褐色土器
57	334	3B	13層遺	G20	Va	ナテ, ナテ, 沈積, 観察	目録未記	暗褐色10YR4-1 2.5mm以下の赤褐色	暗褐色10YR3-4 2.5mm以下の赤褐色	2mm以下の赤褐色を中量, 透視観察, 赤褐色透明粒を少量含む	A.5級の赤褐色土器
58	326	3B	13層遺	K34	Vb	ナテ, 沈積, 観察	ナテ, 目録未記	暗褐色10YR3-1	2.5mm以下の赤褐色	1mm以下の赤褐色を少量含む	A.5級の赤褐色土器
59	234	3B	13層遺	G10	Va	ナテ, 沈積, 目録未記, 観察	ナテ, 目録未記, 観察	2.5mm以下の赤褐色	黒褐色10YR3-6	2mm以下の赤褐色を中量, 透視観察を少量含む	A.5級の赤褐色土器
60	268	3B	13層遺	G10	Va	ナテ, 観察, 透視	ナテ, 観察	暗褐色10YR3-4	2.5mm以下の赤褐色	1mm以下の赤褐色を中量, 2mm以下の赤褐色をわずかに含む	黒褐色10YR3-6
61	242	3B	13層遺	G11	Va	ナテ, 沈積, 目録未記, 観察	ナテ, 目録未記	暗褐色10YR3-6 暗褐色10YR3-3	暗褐色10YR3-3	1mm以下の灰白色粒, 透視観察を少量, 微細な赤褐色透明粒を少量含む	黒褐色10YR3-6
62	238	3B	13層遺	H10	Va	ナテ, 沈積, 目録未記, 観察	ナテ, 目録未記	暗褐色10YR3-1	暗褐色10YR3-3	2mm以下の赤褐色, 1mm以下の赤褐色, 透視観察, 灰白色透明粒を少量含む	A.5級の赤褐色土器
63	287	3B	13層遺	G12	Va	ナテ, 目録未記, 観察	ナテ, 目録未記	暗褐色10YR3-1	暗褐色10YR2-2	黒褐色透視観察を中量, 2mm以下の赤褐色を少量含む	A.5級の赤褐色土器, 黒褐色10YR3-6
64	362	3B	13層遺	G13	Va	ナテ, 沈積, 目録未記, 観察	目録未記	暗褐色2YR2-1 暗褐色10YR3-3 2.5mm以下の赤褐色	暗褐色2YR2-1 暗褐色10YR3-3 2.5mm以下の赤褐色	1mm以下の赤褐色透明粒を中量, 2mm以下の赤褐色を少量含む	A.5級の赤褐色土器, 黒褐色10YR3-6
65	241	3B	13層遺	G10	Va	ナテ, 沈積, 目録未記, 観察	ナテ, 目録未記	暗褐色2YR3-6 暗褐色2YR3-1	暗褐色2YR3-4	2mm以下の赤褐色透明粒を中量, 灰白色粒, 赤褐色粒をわずかに含む	A.5級の赤褐色土器
66	265	3B	13層遺	H10	Va	ナテ, 沈積, 目録未記, 観察	ナテ, 目録未記	暗褐色2YR3-6 暗褐色2YR3-1	暗褐色2YR3-6 暗褐色2YR3-1	2mm以下の赤褐色透明粒を少量, 2mm以下の赤褐色を少量含む	A.5級の赤褐色土器
67	268	3B	13層遺	K34	Vb	ナテ, 沈積, 目録未記, 観察	ナテ, 目録未記	暗褐色2YR3-6 暗褐色2YR3-1	暗褐色2YR3-6 暗褐色2YR3-1	2mm以下の赤褐色透明粒を少量, 2mm以下の赤褐色を少量含む	A.5級の赤褐色土器
68	247	3B	13層遺	F14	Va	ナテ, 沈積, 目録未記, 観察	ナテ, 目録未記	暗褐色2YR3-6 暗褐色2YR3-1	暗褐色2YR3-6 暗褐色2YR3-1	2mm以下の赤褐色を中量, 2mm以下の赤褐色を少量含む	A.5級の赤褐色土器
69	246	3B	13層遺	D15	Va	ナテ, 沈積, 目録未記, 観察	目録未記	暗褐色2YR3-6 2.5mm以下の赤褐色	暗褐色2YR3-6	4-5mm以下の赤褐色を少量含む, 1mm以下の赤褐色を含む	A.5級の赤褐色土器, 灰白色粒
70	254	3B	13層遺	G14	Va	ナテ, 沈積, 透視, 観察	ナテ, 目録未記	暗褐色2YR3-6 暗褐色10YR4-1	暗褐色2YR3-6	2mm以下の赤褐色を少量, 2mm以下の赤褐色透明粒, 灰白色粒を少量, 2mm以下の赤褐色粒を少量含む	黒褐色10YR3-6
71	269	3B	13層遺	K34	Vb	ナテ, 沈積, 目録未記, 観察	ナテ, 目録未記, 観察	暗褐色10YR3-1	暗褐色10YR3-3	2mm以下の赤褐色, 透視観察をわずかに含む	A.5級の赤褐色土器
72	253	3B	13層遺	G11	Va	ナテ, 目録未記, 観察	目録未記	暗褐色2YR3-1 暗褐色2YR4-2	暗褐色2YR3-1 暗褐色2YR3-1	2mm以下の赤褐色を中量, 2mm以下の赤褐色を少量含む	A.5級の赤褐色土器
73	249	3B	13層遺	G10	Va	ナテ, 沈積, 透視, 観察	ナテ, 目録未記	2.5mm以下の赤褐色	2.5mm以下の赤褐色	2mm以下の赤褐色を中量, 石を少量含む	A.5級の赤褐色土器, 黒褐色10YR3-6
74	243	3B	13層遺	G10	Va	ナテ, 沈積, 透視, 観察	ナテ, 目録未記	暗褐色2YR3-6 暗褐色10YR3-1	暗褐色10YR4-6 暗褐色10YR3-3	2mm以下の赤褐色, 赤褐色粒, 赤褐色透明粒を少量含む	黒褐色10YR3-6
75	250	3B	13層遺	F12	B	ナテ, 沈積, 目録未記, 観察	目録未記	赤褐色10YR4-6	暗褐色10YR3-6	2mm以下の赤褐色透明粒を少量, 微細な透視観察を少量含む	A.5級の赤褐色土器
76	252	3B	13層遺	K33	B	ナテ, 沈積, 目録未記, 観察	ナテ, 目録未記	暗褐色10YR3-3 2.5mm以下の赤褐色	2.5mm以下の赤褐色	2mm以下の赤褐色を中量, 透視観察, 赤褐色透明粒を少量含む	A.5級の赤褐色土器
77	259	3B	13層遺	F12	B	ナテ, 沈積, 目録未記, 観察	目録未記	暗褐色10YR4-1 暗褐色10YR4-2	暗褐色10YR3-6 暗褐色10YR3-6	2mm以下の赤褐色透明粒, 灰白色粒, 赤褐色透明粒を少量含む	黒褐色10YR3-6







規格 基準 番号	品名	単位	形状	色澤	顔料調整・支那		色澤		塗上の状態	型式・その他
					内面	外面	内面	外面		
164 381	液状珪酸 -灰泥	1015	V6	ナテ、目隠系面	ナテ	明赤顔料S35-6	橙顔料36-6	2mm以下の透明光沢、微細な無色光沢、内層目をわずかに含む	黒色か、白色付着物、 風化著しい、 黄変顔料10k	
165 386	液状珪酸 -灰泥	1019	Va	ナテ、目隠系面	ナテ	明赤顔料S35-3 橙顔料34-3	橙顔料34-3	2~3mm以下の白濁、半透明性をわずかに含む	風化著しい、 黄変顔料6mm	
166 372	液状珪酸 -灰泥	115	Va	ナテ	ナテ	11.6i-赤顔料S35-4	11.6i-橙顔料33-6	4mm以下の無色光沢、灰白色光沢、透明光沢を多く含むに含む	半透明顔料10kmm	
167 382	液状珪酸 -灰泥	F10	Va	ナテ、目隠系面	ナテ、目隠系面	橙顔料33-6	11.6i-橙顔料33-6	3mm以下の0.1i-無色光沢を多く含む、2mm以下の透明、無色光沢を多く含む、微細な透明光沢を多く含む	黒色、白色付着物、 黄変顔料7mm	
168 389	液状珪酸 -灰泥	F13	Va	ナテ、目隠系面	ナテ	無色顔料S34-2 無色顔料S34-1	赤赤顔料S34-8 11.6i-赤赤顔料S34-3	1mm以下の白濁、灰色、微細な透明光沢をわずかに含む	黄変顔料6mm	
169 375	液状珪酸 -灰泥	G10	Va	ナテ、目隠系面	ナテ、目隠系面	11.6i-赤赤顔料S35-4	明赤赤顔料S35-6	2mm以下の0.0i-無色光沢、淡黄色を少量、透明光沢を多く含む	白色付着物、 黄変顔料1mm	
170 378	液状珪酸 -灰泥	F14	Va	ナテ、目隠系面	ナテ	無色顔料S34-1	赤赤顔料S34-8	2mm以下の半透明性をわずかに、微細な無色光沢、灰色光沢、透明光沢を少量含む	半透明顔料9mm	
171 379	液状珪酸 -灰泥	H14	Va	ナテ、目隠系面	ナテ、目隠系面	無色顔料S34-2 無色顔料S34-6	無色顔料S35-3 無色顔料S34-6	3mm以下の0.0i-無色光沢、微細な透明光沢を多く含む	黄変顔料6mm	
172 380	液状珪酸 -灰泥	H14	G6	ナテ、目隠系面	ナテ	無色顔料S34-9	明赤赤顔料S35-6	3mm以下の灰白色光沢、白色半透明性を微細に、微細な透明光沢を多く含む	白色付着物、 黄変顔料1mm	
173 376	液状珪酸 -灰泥	G10	Va	ナテ	ナテ	11.6i-橙顔料33-6	明赤赤顔料S35-6	3mm以下の0.0i-無色光沢、灰色、0.1i-無色光沢、透明光沢を少量含む	白色付着物、 黄変顔料5mm	
174 373	液状珪酸 -灰泥	H14	Va	ナテ	ナテ	透明顔料S38-4	透明顔料S38-3	微細な透明光沢を中量、3mm以下の灰白色光沢を多く含む	黄変顔料6mm	
175 384	液状珪酸 -灰泥	F11	B	ナテ	ナテ	11.6i-橙顔料33-6	無色顔料S34-2 無色顔料S34-1	2mm以下の0.0i-無色光沢、灰色、無色透明光沢を多く含む	スス状の灰色付着物、 黄変顔料5mm	
176 396	付着 珪酸	F10	Va	ナテ	ナテ	明赤赤顔料S35-6	明赤赤顔料S35-6	無色透明光沢、灰色光沢、灰白色光沢、無色光沢を多量に含む	スス	
177 307	付着 珪酸	F10	Va	ナテ	1.5ナテ	明赤赤顔料S35-6	11.6i-赤赤顔料S35-3	1.5mm以下の0.0i-無色光沢、灰色光沢、無色透明光沢を多量に含む	スス状の灰色付着物	
178 401	付着 珪酸	G23	Va	ナテ	顔料ナテ	無色顔料S35-2 無色顔料S35-6	橙顔料36-6	微細な無色光沢、無色透明光沢をわずかに、砂粒を中量含む		
179 404	付着 珪酸	G10	Va	ナテ、コア状突起	ナテ、コア状突起	明赤赤顔料S35-6	11.6i-赤赤顔料S35-4	無色透明光沢をわずかに含む		
180 400	付着 珪酸	G13	Va	ナテ、層付突起	ナテ	橙顔料33-6	橙顔料33-6	3mm以下の半透明性を、灰色、灰白色光沢を含む		
181 398	付着 珪酸	G11	Va	ナテ、層付突起	ナテ	明赤赤顔料S35-6	11.6i-黄赤顔料S35-3	2mm以下の0.0i-無色光沢、透明光沢をわずかに、透明光沢、灰色光沢を少量含む	黒色	
182 380	付着 珪酸	F12	B	ナテ、層付突起、穿孔	ナテ	橙顔料36-6 橙顔料S35-6	11.6i-黄赤顔料S35-3	2mm以下の0.1i-無色光沢、灰色光沢をわずかに、無色透明光沢を少量含む、透明光沢を中量含む	黒色	
183 428	付着 珪酸 -層付突起	G10	Va	ナテ、層付突起、層付突起、 突起、層付突起	ナテ	11.6i-赤赤顔料S35-3 明赤赤顔料S35-6	11.6i-赤赤顔料S35-3	3~8mm以下の白色、灰色、無色付着物を多く含む、微細な透明光沢と白色光沢を少量、2mm以下の0.0i-無色光沢、灰色光沢を多量に含む		
184 422	付着 珪酸 -層付突起	G11	Va	ナテ、層付突起	ナテ	赤赤顔料S34-8	明赤赤顔料S35-6	3~8mm以下の白色、灰色、無色付着物を多く含む、微細な透明光沢、白色光沢を少量、2mm以下の0.0i-無色光沢、灰色光沢を多量に含む	層付に黒化	
185 402	付着 珪酸 -層付突起	G10	Va	ナテ、突起、短突起	突起	橙顔料36-6 11.6i-黄赤顔料S35-3	11.6i-黄赤顔料S35-3	3mm以下の0.0i-無色光沢、灰白色光沢、無色光沢をわずかに含む		
186 430	付着 珪酸 -層付突起	H14	Va	ナテ、突起、穿孔	ナテ	11.6i-黄赤顔料S35-3	11.6i-黄赤顔料S35-3	3mm以下の0.0i-無色光沢、灰色、微細な透明光沢をわずかに含む		
187 407	付着 珪酸 -層付突起	H14	G6	ナテ、層付突起	ナテ、層付突起	橙顔料36-6	橙顔料36-6	無色無色光沢、透明光沢、内層目をわずかに含む		
188 403	付着 珪酸 -層付突起	F10	Va	ナテ、突起	ナテ	明赤赤顔料S35-6	11.6i-黄赤顔料S35-3	無色無色光沢、灰白色光沢、無色光沢、明赤赤顔料を少量含む	白色顔料	
189 408	付着 珪酸 -層付突起	G23	Va	ナテ、穿孔	ナテ	明赤赤顔料S35-6	明赤赤顔料S35-6	3mm以下の0.0i-無色光沢を多量、1mm以下の灰白色光沢、灰色光沢、微細な透明光沢を含む		
190 427	付着 珪酸 -層付突起	G20	Va	ナテ	ナテ、短突起	明赤赤顔料S35-2 無色顔料S34-1	明赤赤顔料S35-6	3mm以下の0.0i-無色透明光沢を多量に含む	半透明顔料	
191 415	付着 珪酸 -層付突起	F14	Va	ナテ、突起、穿孔	ナテ	11.6i-赤赤顔料S35-4	11.6i-橙顔料33-6	無色無色透明光沢をわずかに、砂粒を少量含む	白色顔料	
192 417	付着 珪酸 -層付突起	G23	Va	ナテ	ナテ、沈降、剥離	11.6i-橙赤顔料S34-4	11.6i-橙赤顔料S34-4	無色無色透明光沢を中量、透明光沢を少量、1mm以下の半透明性をわずかに含む	風化著しい	
193 414	付着 珪酸 -層付突起	G15	G6	ナテ、突起、短突起、穿孔	ナテ	橙顔料33-6	明赤赤顔料S35-6	砂粒を少量、1mm以下の0.0i-無色透明光沢をわずかに含む	白色顔料	
194 416	付着 珪酸 -層付突起	F14	Va	ナテ	ナテ、1.5ナテ、沈降、 剥離	11.6i-赤赤顔料S35-4	11.6i-橙赤顔料33-6	無色無色透明光沢、半透明性を少量含む		
195 421	付着 珪酸 -層付突起	G10	Va	ナテ、突起、目隠系面、 突起、層付突起	ナテ、突起	赤赤顔料S34-8 11.6i-赤赤顔料S35-4	明赤赤顔料S35-6	2mm以下の0.0i-無色光沢、白濁、微細な無色光沢、灰色光沢、透明光沢を少量含む	白色顔料	
196 413	付着 珪酸 -層付突起	G20	Va	ナテ	ナテ、突起、短突起	明赤赤顔料S35-6	無色顔料S34-1	2mm以下の0.0i-無色光沢、灰色光沢を少量、3mm以下の0.0i-無色光沢、透明光沢をわずかに含む		
197 406	付着 珪酸 -層付突起	F14	Va	ナテ	目隠系面、短突起	11.6i-赤赤顔料S35-4	11.6i-赤赤顔料S35-4	2mm以下の0.0i-無色光沢を少量、灰白色光沢、内層目をわずかに含む	顔料ナテ	
198 405	付着 珪酸 -層付突起	G24	G6	ナテ	ナテ	11.6i-赤赤顔料S35-4	11.6i-赤赤顔料S35-4	3mm以下の0.0i-無色透明光沢を中量含む	半透明顔料	
199 426	付着 珪酸 -層付突起	F21	B	ナテ	ナテ、突起	橙顔料36-6	橙顔料36-6	3mm以下の0.0i-無色光沢、淡黄色光沢、1mm以下の灰白色光沢、微細な透明光沢を含む		
200 400	付着 珪酸 -層付突起	G10	Va	ナテ、目隠系面	ナテ、目隠系面	無色顔料S34-1	11.6i-黄赤顔料S35-3	灰色、白濁、半透明性を多量に含む		
201 419	付着 珪酸 -層付突起	H14	G6	ナテ、突起、目隠系面、 突起、短突起	ナテ、突起、突起、 突起、短突起	無色顔料S35-6	無色顔料S34-6	3mm以下の0.0i-無色光沢を少量、微細な透明光沢と灰色光沢をわずかに含む		
202 411	付着 珪酸 -層付突起	F14	Va	ナテ、突起、短突起	ナテ	11.6i-黄赤顔料S35-4	11.6i-黄赤顔料S35-3	2mm以下の0.0i-無色光沢をわずかに、微細な無色光沢、無色透明光沢を多量に含む		
203 420	付着 珪酸 -層付突起	G13	B	ナテ、突起、突起、 コア状突起	ナテ、突起	明赤赤顔料S35-6	明赤赤顔料S35-6	3mm以下の0.0i-無色光沢をわずかに、微細な無色光沢、無色透明光沢を多量に含む		
204 412	付着 珪酸 -層付突起	F14	Va	ナテ、突起、突起、 短突起、層付突起	ナテ、突起、突起、 短突起、層付突起	透明顔料S38-3	無色顔料S34-1	無色透明光沢を多量、1mm以下の灰白色光沢、内層目を多く含む	灰色、白色-半透明顔料、 風化著しい	
205 429	付着 珪酸 -層付突起	F14	Va	ナテ、目隠系面、短突起	ナテ	橙顔料36-6	11.6i-赤赤顔料S35-4	無色透明光沢を中量、2mm以下の0.0i-無色光沢、無色光沢、灰色光沢、内層目をわずかに含む	白色顔料	
206 430	付着 珪酸 -層付突起	F10	Va	ナテ、目隠系面、 短突起	ナテ、目隠系面、 短突起	ナテ、目隠系面	11.6i-赤赤顔料S35-6	2mm以下の0.0i-無色光沢、灰白色光沢、透明光沢、無色光沢をわずかに含む	白色顔料	



国産 基準 番号	品名	産地	出土地点 品名 産地	原産地・産地		色調		加工の種類	型式・その他	
				内産	外産	内産	外産			
250	250	米	白米類	G11	Va	1.0g/L, 沈降, 糊化	1.0g/L	沈降値10Y85-3 糊化10Y84-1	1000以下の黄色, 光沢良好, 白濁傾向をわずかに含む	スエダの黄色白米類
251	305	米	白米類	G22	Va	ナシ, 実質	ナシ	実質10Y85-2	1000以下の黄色, 光沢良好, 白濁傾向をわずかに含む	スエダの黄色白米類
252	361	米	白米類	G23	Va	1.0g/L, 沈降, 糊化	1.0g/L	実質10Y85-2	1000以下の黄色, 光沢良好, 白濁傾向をわずかに含む	スエダの黄色白米類
253	302	米	雑穀	F12	Va	1.0g/L, 沈降, 糊化, 実質	ナシ, 1.0g/L	糊化10Y85-1	1000以下の黄色, 光沢良好, 白濁傾向をわずかに含む	スエダの黄色白米類
254	306	米	雑穀	A3	Va	1.0g/L, 沈降	1.0g/L	糊化10Y84-1	1000以下の黄色, 光沢良好, 白濁傾向をわずかに含む	スエダの黄色白米類
255	347	米	雑穀	S16	Ma	1.0g/L, 沈降, 糊化	1.0g/L	糊化10Y85-6	1000以下の黄色, 光沢良好, 白濁傾向をわずかに含む	スエダの黄色白米類
256	349	米	雑穀	G12	B	1.0g/L, 沈降, 糊化	1.0g/L	実質10Y84-1	1000以下の黄色, 光沢良好, 白濁傾向をわずかに含む	スエダの黄色白米類
257	303	米	雑穀	2.3	Na	糊化, 沈降	1.0g/L	糊化10Y85-1	1000以下の黄色, 光沢良好, 白濁傾向をわずかに含む	スエダの黄色白米類
258	307	米	雑穀	B40	Va	1.0g/L, 沈降, 糊化	1.0g/L	糊化10Y84-1	1000以下の黄色, 光沢良好, 白濁傾向をわずかに含む	スエダの黄色白米類
259	348	米	雑穀	F14	Va	沈降, 糊化	1.0g/L	糊化10Y84-1	1000以下の黄色, 光沢良好, 白濁傾向をわずかに含む	スエダの黄色白米類
260	350	米	雑穀	F14	Va	沈降, 糊化	1.0g/L	1.0g/L-糊化10Y85-3	1000以下の黄色, 光沢良好, 白濁傾向をわずかに含む	スエダの黄色白米類
261	351	米	雑穀	F14	Va	1.0g/L, 沈降, 糊化	1.0g/L	実質10Y85-2	1000以下の黄色, 光沢良好, 白濁傾向をわずかに含む	スエダの黄色白米類
262	371	米	G11	Va	糊化	ナシ	沈降10Y84	1000以下の黄色, 光沢良好, 白濁傾向をわずかに含む	スエダの黄色白米類	
263	343	米	雑穀	E14	Va	ナシ, 1.0g/L	1.0g/L	1.0g/L-糊化10Y85-4	1000以下の黄色, 光沢良好, 白濁傾向をわずかに含む	スエダの黄色白米類
264	342	米	雑穀	S16	Ma	ナシ, 1.0g/L	1.0g/L	1.0g/L-糊化10Y87-3	1000以下の黄色, 光沢良好, 白濁傾向をわずかに含む	スエダの黄色白米類
265	305	米	雑穀	G11	Va	ナシ, 沈降, 糊化, 実質	ナシ, 1.0g/L	1.0g/L-糊化10Y85-4	1000以下の黄色, 光沢良好, 白濁傾向をわずかに含む	スエダの黄色白米類
266	302	米	白米類	G11	Va	ナシ, 沈降, 糊化	ナシ, 沈降	糊化10Y85-6	1000以下の黄色, 光沢良好, 白濁傾向をわずかに含む	スエダの黄色白米類
267	304	米	雑穀	G10	Va	ナシ, 沈降, 糊化	ナシ	実質10Y84-2	1000以下の黄色, 光沢良好, 白濁傾向をわずかに含む	スエダの黄色白米類
268	300	米	雑穀	G11	Va	ナシ, 沈降, 糊化, 実質	1.0g/L	1.0g/L-糊化10Y85-4	1000以下の黄色, 光沢良好, 白濁傾向をわずかに含む	スエダの黄色白米類
269	339	米	雑穀	J14	Va	ナシ, 沈降	ナシ	糊化10Y85-6	1000以下の黄色, 光沢良好, 白濁傾向をわずかに含む	スエダの黄色白米類
270	323	米	雑穀	F11	B	沈降, 糊化	ナシ	糊化10Y85-6	1000以下の黄色, 光沢良好, 白濁傾向をわずかに含む	スエダの黄色白米類
271	341	米	雑穀	G11	Va	ナシ, 沈降, 糊化, 実質	ナシ, 1.0g/L	1.0g/L-糊化10Y85-3	1000以下の黄色, 光沢良好, 白濁傾向をわずかに含む	スエダの黄色白米類
272	300	米	白米類	F14	Va	1.0g/L, 沈降, 糊化	ナシ, 1.0g/L	糊化10Y85-6	1000以下の黄色, 光沢良好, 白濁傾向をわずかに含む	スエダの黄色白米類
273	320	米	白米類	G11	Va	ナシ, 沈降	ナシ, 1.0g/L	糊化10Y85-1	1000以下の黄色, 光沢良好, 白濁傾向をわずかに含む	スエダの黄色白米類
274	325	米	白米類	G10	B	ナシ, 沈降, 糊化, 実質	ナシ, 1.0g/L	糊化10Y85-2	1000以下の黄色, 光沢良好, 白濁傾向をわずかに含む	スエダの黄色白米類
275	306	米	白米類	G11	Va	ナシ, 沈降, 糊化, 実質	ナシ, 1.0g/L	糊化10Y85-6	1000以下の黄色, 光沢良好, 白濁傾向をわずかに含む	スエダの黄色白米類
276	327	米	白米類	E13	B	ナシ	ナシ	糊化10Y85-1	1000以下の黄色, 光沢良好, 白濁傾向をわずかに含む	スエダの黄色白米類
277	418	米	白米類	G10	Va	ナシ, 沈降, フォスファチン, 糊化	ナシ	1.0g/L-糊化10Y85-4	1000以下の黄色, 光沢良好, 白濁傾向をわずかに含む	スエダの黄色白米類
278	200	米	白米類	S23	Na	ナシ	ナシ	糊化10Y85-6	1000以下の黄色, 光沢良好, 白濁傾向をわずかに含む	スエダの黄色白米類
279	139	米	白米類	G10	Va	ナシ, 沈降, 糊化, 実質	1.0g/L	1.0g/L-糊化10Y85-3	1000以下の黄色, 光沢良好, 白濁傾向をわずかに含む	スエダの黄色白米類
280	211	米	白米類	G11	Va	ナシ, 沈降, 糊化, 実質	ナシ	糊化10Y85-2	1000以下の黄色, 光沢良好, 白濁傾向をわずかに含む	スエダの黄色白米類
281	327	米	白米類	G22	Va	1.0g/L	1.0g/L	糊化10Y85-4	1000以下の黄色, 光沢良好, 白濁傾向をわずかに含む	スエダの黄色白米類
282	328	米	白米類	G22	Va	1.0g/L	1.0g/L	1.0g/L-糊化10Y85-3	1000以下の黄色, 光沢良好, 白濁傾向をわずかに含む	スエダの黄色白米類
283	328	米	白米類	F21	Va	1.0g/L	1.0g/L	糊化10Y85-3	1000以下の黄色, 光沢良好, 白濁傾向をわずかに含む	スエダの黄色白米類
284	455	米	白米類	G21	Va	1.0g/L	1.0g/L	糊化10Y85-2	1000以下の黄色, 光沢良好, 白濁傾向をわずかに含む	スエダの黄色白米類
285	396	米	白米類	G10	B	ナシ, 1.0g/L	1.0g/L	糊化10Y85-6	1000以下の黄色, 光沢良好, 白濁傾向をわずかに含む	スエダの黄色白米類
286	117	米	白米類	F23	Va	1.0g/L, 沈降	1.0g/L	1.0g/L-糊化10Y85-4	1000以下の黄色, 光沢良好, 白濁傾向をわずかに含む	スエダの黄色白米類
287	130	米	雑穀	G12	Va	1.0g/L, 沈降	1.0g/L	1.0g/L-糊化10Y85-3	1000以下の黄色, 光沢良好, 白濁傾向をわずかに含む	スエダの黄色白米類
288	349	米	雑穀	S15	Va	ナシ	1.0g/L	1.0g/L-糊化10Y85-3	1000以下の黄色, 光沢良好, 白濁傾向をわずかに含む	スエダの黄色白米類
289	304	米	雑穀	G23	Va	ナシ, 1.0g/L	ナシ	1.0g/L-糊化10Y85-4	1000以下の黄色, 光沢良好, 白濁傾向をわずかに含む	スエダの黄色白米類
290	378	米	雑穀	F23	Va	ナシ, 1.0g/L	1.0g/L	糊化10Y84-2	1000以下の黄色, 光沢良好, 白濁傾向をわずかに含む	スエダの黄色白米類

第6表 土器観察表(縄文時代晩期)

発掘 番号	発掘 時期	器種	器名	出土地点	観察所・文書		色澤		胎土の構成	形式・その他	
					外面	内面	外面	内面			
290	94	漆器	1層底	G12	Y/A	ナラ	ナラ	浅黄2137-3 黄緑2137-4	黒緑2137-1	290a以下の中層部を多量に含有。黄緑色は胎土中量。黄緑と透明光沢を多量含有	灰黒
292	94	漆器	1層底	C34	ナラ	ナラ	ナラ	淡い黄緑2137-6 黄緑2137-5	黄緑2137-3	290a以下の中層部をわずかに。290a以下の胎土組成を多量含有。胎土中に、角質状のゴキリに、黄緑と透明光沢を多量に含有	灰黒
290	93	漆器	1層底	G11	B	ナラ・炭酸鉄系	ナラ	浅黄2137-4	黄緑2137-3	290a以下の中層部を多量に含有。黄緑と透明光沢を多量含有	灰黒
294	94	漆器	1層底	G12	Y/A	ナラ	ナラ	黄緑2137-4	黄緑2137-3	290a以下の中層部を多量に含有。黄緑と透明光沢を多量含有	灰黒
292	96	漆器	1層底	G18	Y/A	赤鉄	赤鉄	黄緑2137-2 黄緑2137-1	黄緑2137-3	290a以下の中層部を多量に含有	灰黒
296	82	漆器	1層底	G18	B	ナラ・炭酸鉄系	赤鉄	淡い黄緑2137-4 黄緑2137-3	黄緑2137-6	290a以下の中層部を多量に含有。290a以下の胎土組成を多量含有	黄緑灰黒
297	45A	漆器	1層・ 2層底	G29	Y/A	貝殻系赤鉄系	貝殻系赤鉄系	黄緑2137-4	淡い黄緑2137-4	290a以下の中層部を多量に含有。290a以下の胎土組成を多量含有	灰黒
298	135	漆器	1層底	F11	B	ナラ	ナラ	淡い黄緑2137-1 黄緑2137-2	黄緑2137-4	290a以下の中層部を多量に含有。黄緑と透明光沢を多量含有	黄緑灰黒
299	80	漆器	1層・ 2層底	G11	Y/A	ナラ・ミナコ	ナラ・ミナコ	黄緑2137-4 黄緑2137-3	黄緑2137-2	290a以下の胎土組成を多量に含有。黄緑と透明光沢を多量含有	灰黒
300	196	漆器	1層底	F14	ナラ	ナラ	ナラ	黄緑2137-3	淡い黄緑2137-2	290a以下の胎土組成を多量に含有。黄緑と透明光沢を多量含有	灰黒
301	80	漆器	1層底	G11	Y/A	ナラ・炭酸鉄系	ミナコ	黄緑2137-3 淡い黄緑2137-4	黄緑2137-2	290a以下の胎土組成を多量に含有。黄緑と透明光沢を多量含有	灰黒
302	91	漆器	1層底	G11	Y/A	ナラ・炭酸鉄系・黄緑付赤鉄	貝殻系赤鉄	黄緑2137-4 黄緑2137-3	黄緑2137-2	290a以下の胎土組成を多量に含有。黄緑と透明光沢を多量含有	灰黒
302	92	漆器	1層・ 2層底	G18	Y/A	ナラ・炭酸鉄系・黄緑付赤鉄	ナラ・炭酸鉄系	黄緑2137-3 淡い黄緑2137-4	淡い黄緑2137-2	290a以下の胎土組成を多量に含有	灰黒
304	87	漆器	1層底	F11	Y/A	ナラ・黄緑付赤鉄	ナラ・炭酸鉄系	黄緑2137-6 黄緑2137-5	黄緑2137-6	胎土組成を多量に含有	灰黒
303	85	漆器	1層底	F14	Y/A	ナラ・ミナコ	ナラ・ミナコ	淡い黄緑2137-4 黄緑2137-3	黄緑2137-2	290a以下の胎土組成を多量に含有。黄緑と透明光沢を多量含有	灰黒
304	93	漆器	1層・ 2層底	F14	Y/A	ナラ・黄緑付赤鉄	ナラ・炭酸鉄系	黄緑2137-3 淡い黄緑2137-4	淡い黄緑2137-2	290a以下の胎土組成を多量に含有。黄緑と透明光沢を多量含有	灰黒
307	89	漆器	1層底	C34	ナラ	ナラ・黄緑付赤鉄	ナラ	黄緑2137-3	黄緑2137-1	290a以下の胎土組成を多量に含有。黄緑と透明光沢を多量含有	灰黒
308	202	漆器	1層底	B-34	赤鉄	ナラ・黄緑付赤鉄	ナラ	黄緑2137-3	淡い黄緑2137-2	290a以下の胎土組成を多量に含有。黄緑と透明光沢を多量含有	灰黒
309	324	漆器	1層底	B-14	Y/A	ナラ・ミナコ・炭酸鉄系・黄緑付赤鉄	ナラ・ミナコ	黄緑2137-3 淡い黄緑2137-4	黄緑2137-2	290a以下の胎土組成を多量に含有	灰黒
308	97	漆器	1層・ 2層底	G18	B	ナラ・ミナコ・炭酸鉄系・黄緑付赤鉄	ミナコ	淡い黄緑2137-4 黄緑2137-3	黄緑2137-2	290a以下の胎土組成を多量に含有	灰黒
311	203	漆器	1層底	B-34	赤鉄	ナラ・ミナコ・炭酸鉄系	ナラ	黄緑2137-3	黄緑2137-2	290a以下の胎土組成を多量に含有。黄緑と透明光沢を多量含有	灰黒
312	203	漆器	2層底	G13	Y/A	ミナコ・ナラ・炭酸鉄系	ナラ	黄緑2137-3 淡い黄緑2137-4	黄緑2137-2	290a以下の胎土組成を多量に含有。黄緑と透明光沢を多量含有	灰黒
313	196	漆器	1層底	G12	Y/A	ナラ・炭酸鉄系	ナラ	淡い黄緑2137-4 黄緑2137-3	黄緑2137-2	290a以下の胎土組成を多量に含有。黄緑と透明光沢を多量含有	灰黒
314	45A	漆器	1層・ 2層底	G23	Y/A	ナラ・炭酸鉄系	ナラ・炭酸鉄系	黄緑2137-3 黄緑2137-2	黄緑2137-2	290a以下の胎土組成を多量に含有。黄緑と透明光沢を多量含有	灰黒
315	119	漆器	1層底	G11	Y/A	ナラ	ナラ	淡い黄緑2137-4 黄緑2137-3	淡い黄緑2137-2	290a以下の胎土組成を多量に含有。黄緑と透明光沢を多量含有	灰黒
316	106	漆器	底面	A-16	黄鉄	ナラ・炭酸鉄系	ナラ	淡い黄緑2137-4 黄緑2137-3	黄緑2137-2	290a以下の胎土組成を多量に含有。黄緑と透明光沢を多量含有	黄緑灰黒
317	122	漆器	底面	G28	Y/A	ナラ	ナラ	淡い黄緑2137-4 黄緑2137-3	黄緑2137-2	290a以下の胎土組成を多量に含有。黄緑と透明光沢を多量含有	黄緑灰黒
318	205	漆器	底面	G12	Y/A	ナラ	ナラ	黄緑2137-6	黄緑2137-2	290a以下の胎土組成を多量に含有。黄緑と透明光沢を多量含有	灰黒
319	384	漆器	底面	G23	Y/A	ナラ	ナラ	黄緑2137-3 淡い黄緑2137-4	黄緑2137-2	290a以下の胎土組成を多量に含有。黄緑と透明光沢を多量含有	黄緑灰黒
320	363	漆器	底面	F12	Y/A	ナラ	ナラ	黄緑2137-3 淡い黄緑2137-4	黄緑2137-2	290a以下の胎土組成を多量に含有。黄緑と透明光沢を多量含有	黄緑灰黒
321	103	漆器	底面	G23	Y/A	ナラ・炭酸鉄系	ナラ	淡い黄緑2137-4 黄緑2137-3	黄緑2137-2	290a以下の胎土組成を多量に含有。黄緑と透明光沢を多量含有	黄緑灰黒
322	206	漆器	底面	F22	Y/A	ミナコ	ナラ	淡い黄緑2137-4 黄緑2137-3	黄緑2137-2	290a以下の胎土組成を多量に含有。黄緑と透明光沢を多量含有	灰黒
323	204	漆器	底面	G11	B	ナラ・炭酸鉄系	ナラ	淡い黄緑2137-4 黄緑2137-3	黄緑2137-2	290a以下の胎土組成を多量に含有。黄緑と透明光沢を多量含有	灰黒
324	102	漆器	底面	B-44	赤鉄	ナラ・炭酸鉄系	ナラ	黄緑2137-3 黄緑2137-2	黄緑2137-2	290a以下の胎土組成を多量に含有。黄緑と透明光沢を多量含有	灰黒
325	198	漆器	底面	G18	Y/A	ナラ	赤鉄	淡い黄緑2137-4 黄緑2137-3	黄緑2137-2	290a以下の胎土組成を多量に含有。黄緑と透明光沢を多量含有	灰黒
326	109	漆器	底面	G18	Y/A	ナラ・炭酸鉄系	貝殻系赤鉄	淡い黄緑2137-4 黄緑2137-3	黄緑2137-2	290a以下の胎土組成を多量に含有。黄緑と透明光沢を多量含有	灰黒
327	98	漆器	底面	C18	Y/A	ナラ・赤鉄	黄鉄	黄緑2137-3	黄緑2137-2	290a以下の胎土組成を多量に含有。黄緑と透明光沢を多量含有	灰黒
328	123	漆器	底面	G28	Y/A	ナラ	ナラ	淡い黄緑2137-4 黄緑2137-3	黄緑2137-2	290a以下の胎土組成を多量に含有。黄緑と透明光沢を多量含有	灰黒
329	137	漆器	底面	G18	Y/A	ナラ・赤鉄	ミナコ	淡い黄緑2137-4 黄緑2137-3	黄緑2137-2	290a以下の胎土組成を多量に含有。黄緑と透明光沢を多量含有	灰黒
330	199	漆器	1層底	G18	Y/A	ナラ・炭酸鉄系・黄緑付赤鉄	ナラ・炭酸鉄系	黄緑2137-3 黄緑2137-2	黄緑2137-2	290a以下の胎土組成を多量に含有。黄緑と透明光沢を多量含有	灰黒
331	121	漆器	底面	G28	Y/A	ナラ	ナラ	淡い黄緑2137-4 黄緑2137-3	黄緑2137-2	290a以下の胎土組成を多量に含有。黄緑と透明光沢を多量含有	灰黒
332	193	漆器	1層・ 2層底	B-16	赤鉄	ミナコ	黄鉄	黄緑2137-3 黄緑2137-2	黄緑2137-2	290a以下の胎土組成を多量に含有。黄緑と透明光沢を多量含有	灰黒
333	194	漆器	1層・ 2層底	B-16	赤鉄	ミナコ・黄緑付赤鉄	ミナコ	淡い黄緑2137-4 黄緑2137-3	黄緑2137-2	290a以下の胎土組成を多量に含有。黄緑と透明光沢を多量含有	灰黒
334	192	漆器	1層・ 2層底	G18	Y/A	ナラ・炭酸鉄系・黄緑付赤鉄	貝殻系赤鉄	淡い黄緑2137-4 黄緑2137-3	黄緑2137-2	290a以下の胎土組成を多量に含有。黄緑と透明光沢を多量含有	灰黒
335	134	漆器	底面	F19	Y/A	ナラ・炭酸鉄系	ナラ	淡い黄緑2137-4 黄緑2137-3	黄緑2137-2	290a以下の胎土組成を多量に含有。黄緑と透明光沢を多量含有	灰黒
336	125	漆器	底面	G18	Y/A	黄鉄	黄鉄	淡い黄緑2137-4 黄緑2137-3	黄緑2137-2	290a以下の胎土組成を多量に含有。黄緑と透明光沢を多量含有	灰黒
337	112	漆器	1層底	B-34	Y/A	ナラ・ミナコ・炭酸鉄系	ナラ	淡い黄緑2137-4 黄緑2137-3	黄緑2137-2	290a以下の胎土組成を多量に含有。黄緑と透明光沢を多量含有	灰黒
338	113	漆器	底面	B-18	Y/A	ナラ	ミナコ	淡い黄緑2137-4 黄緑2137-3	黄緑2137-2	290a以下の胎土組成を多量に含有。黄緑と透明光沢を多量含有	灰黒
339	136	漆器	1層・ 2層底	G11	B	ミナコ・赤鉄	黄鉄	淡い黄緑2137-4 黄緑2137-3	黄緑2137-2	290a以下の胎土組成を多量に含有。黄緑と透明光沢を多量含有	灰黒
340	115	漆器	1層・ 2層底	G18	Y/A	ナラ・ミナコ・炭酸鉄系・黄緑付赤鉄	ミナコ	淡い黄緑2137-4 黄緑2137-3	黄緑2137-2	290a以下の胎土組成を多量に含有。黄緑と透明光沢を多量含有	灰黒
341	102	漆器	1層・ 2層底	B-16	赤鉄	ナラ・ミナコ・ナラ	ナラ・ミナコ	黄緑2137-3 黄緑2137-2	黄緑2137-2	290a以下の胎土組成を多量に含有。黄緑と透明光沢を多量含有	灰黒
342	129	漆器	1層・ 2層底	G18	Y/A	ナラ・炭酸鉄系	ミナコ	黄緑2137-3 黄緑2137-2	黄緑2137-2	290a以下の胎土組成を多量に含有。黄緑と透明光沢を多量含有	灰黒
343	108	漆器	1層・ 2層底	G11	Y/A	赤鉄	ミナコ	淡い黄緑2137-4 黄緑2137-3	黄緑2137-2	290a以下の胎土組成を多量に含有。黄緑と透明光沢を多量含有	灰黒



#### 4 縄文時代後期～晩期の石器

縄文時代後期～晩期に属すると考えられる石器は50点を図化した。出土地点は、ほとんどがA区北側やB区北側のIV層やVa層で、たくさんの縄文土器と伴に出土した。わずかに第1次調査区の南側でも確認できた。以下、器種別に記述する。

##### I 打製石鏃 (第61図397～399)

3点を図化した。出土した層位は397, 398がVa層, 399がIV層である。形状は、397, 399が二等辺三角形、398が正三角形に近い。397は左端部が、398・399は先端部がそれぞれわずかに欠損している。基部の形態はいずれも浅い凹基である。石材は397, 398がチャート製で、399が安山岩である。397はF12Grから出土し、側縁部がそれぞれ鋸歯状を呈する。

##### II 石錐 (第61図400)

1点出土し、図化した。チャート製で、出土層位はIV層である。表裏両面に細かな剥離を加えて下端を錐状に鋭く尖らせている。

##### III 二次加工剥片 (第61図401～404)

4点を図化した。石材は401, 402が砂岩製で、403は流紋岩製、404は玉髓である。401は、D15GrのVb層から出土し、若干の赤化が確認でき、裏面に主要剥離面を大きく残す。右側縁と左側縁に二次加工が施されており、下端に刃部を設けている。402は、F11GrのIV層から出土し、下端に剥離痕が確認できる。403, 404は、左側縁に剥離が確認でき、下端を刃部としている。

##### IV 磔器 (第62図405～408)

4点を図化した。405, 406, 408は砂岩製で、407は安山岩製である。4点とも素材となる自然磔の一部に打撃を加え、簡単な加工を施したものである。405は5号溝状遺構から出土した。側縁下部全体に剥離面が確認できる。406は、円板状の比較的小型の磔器で側縁部に剥離が確認できる。407の平面形は方形を呈しており、上下両側縁に剥離面及び敲打痕が確認できる。408の平面形は隅丸方形を呈し、側端部に剥離面及び敲打痕が確認できる。

##### V 磨石 (第62・63図409～419)

10点を図化した。409～411, 414～419は砂岩製で、412は安山岩製、413は花崗岩製である。いずれも扁平な円磔を利用し、表裏両面が磨面となる。側縁部には部分的に形を整える時にできたと考えられる敲打痕が認められ、磨石・敲石両用のものとして使われたと思われる。

##### VI 打製石斧 (第63図420～429)

10点を図化した。石材は420だけが頁岩製で、421～429はすべてホルンフェルス製(砂質岩の熱変成岩)である。420は6号溝状遺構から出土し、平面形が楕円形を呈している。421はH10GrのVa層から出土し、平面形が三味線の撥に似た撥形を呈している。422はG10GrのVa層から出土し、刃部が欠損している。423はE14GrのVa層から出土し、平面形が長方形をした短冊形を呈しているが、上部が欠損している。424はE14GrのVa層から出土し、平面形が楕円形を呈しているが、上部が欠損している。425は6号溝状遺構から出土し、幅の狭い短冊形であるが上部が欠損している。426はF11GrのVa層から出土した。上部が欠損しているが、撥形であると思われる。427はG11GrのVa層から出土し、平面形は上下両端が張り出し、中央部がくびれた分銅形であるが、刃部が欠損している。428はG10GrのVa層から出土し、平面形は方形もしくは菱形に近い。429はG10GrのVa層から出土し、上部が欠損している。

Ⅶ 敲石（第63・64図430・434・436・438～440）

6点を図化した。430・434・438・439がホルンフェルス製、436・440が砂岩製である。430・434・436は磨製石斧を敲石に転用したものであると考えられる。

Ⅷ 磨製石斧（第63・64図431～433・435・437・441）

6点を図化した。砂岩製が2点（431・435）で、ホルンフェルス（砂質岩の熱変成岩）製が4点（432・433・437・441）である。431はG14GrのVa層から出土し、上部が欠損している。432・433はF12GrのVa層から出土し、平面形は長方形をした短冊形である。432の上部は折損後に形を整えたものであると思われる。435はF11GrのVa層から出土した。磨製石斧から敲石に転用され、その後に対部を再生し、打製石斧に再利用されたものであると思われる。437はG11GrのIV層から出土し、右半分が斜めに欠損している。441はF13GrのIV層から出土し、上半分が欠損している。

Ⅸ 石皿（第64図442・443）

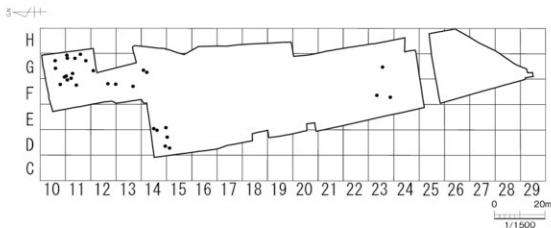
2点を図化した。2点とも砂岩製である。442はD14GrのVb層から出土した。大部分が欠損しているため平面形状は不明であるが、側縁部と中央凹み部分に磨面を確認できる。443はG10GrのVa層から出土した。大部分が欠損しているため平面形状は不明であるが、中央部に凹みをもつ。

X 石錘（第64図445）

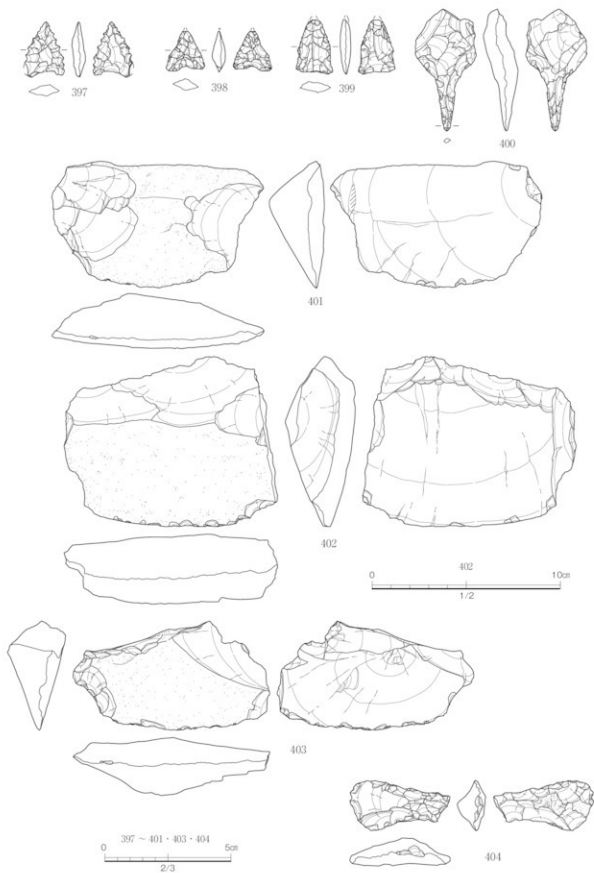
1点を図化した。A区の攪乱土の中から出土した。円板形の礫の左右を打ち欠いたものと考えられるが、左半分が欠損しているため詳細は不明である。

XI 軽石製品（第64図446）

1点を図化した。G14GrのVa層から出土した。軽石の中央部分に凹みを巡らせ、錘として使用したと推測される。

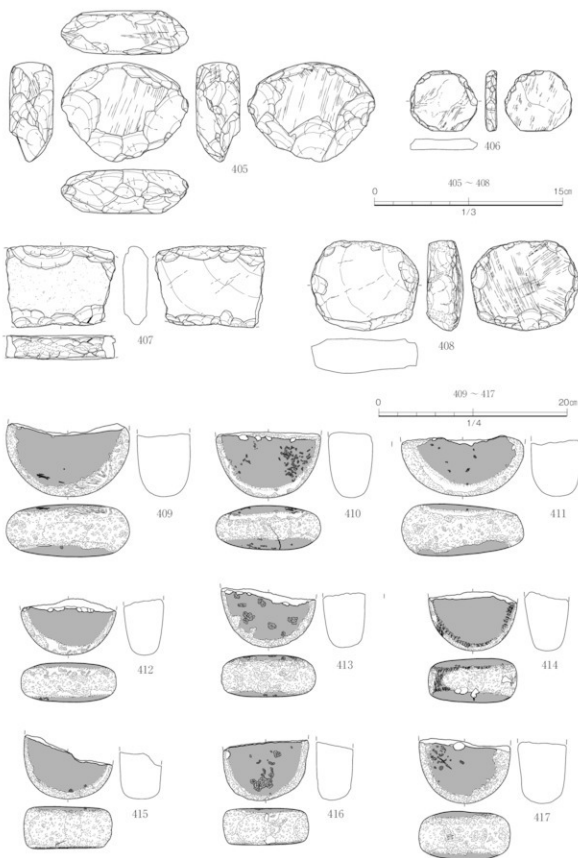


第60図 縄文時代後期～晩期石器分布図（S=1/1500）

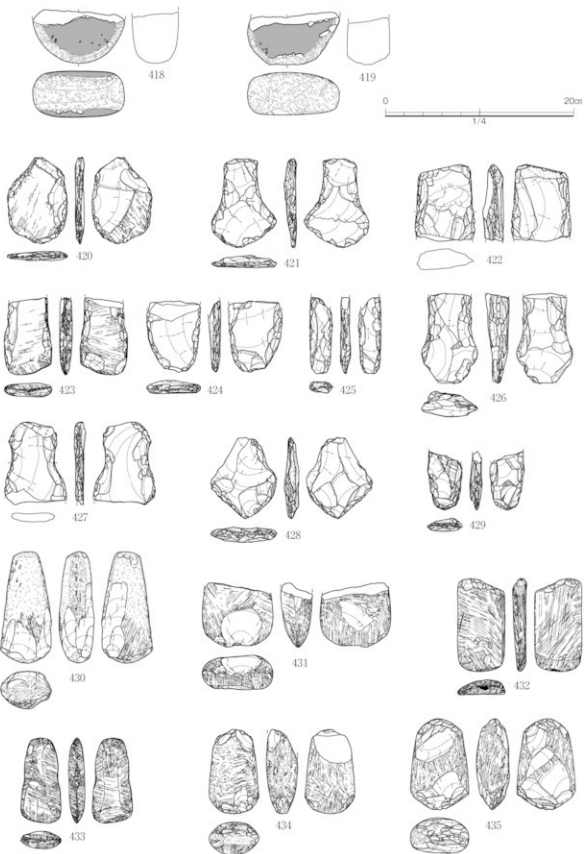


第61図 縄文時代後期～晩期石器実測図①

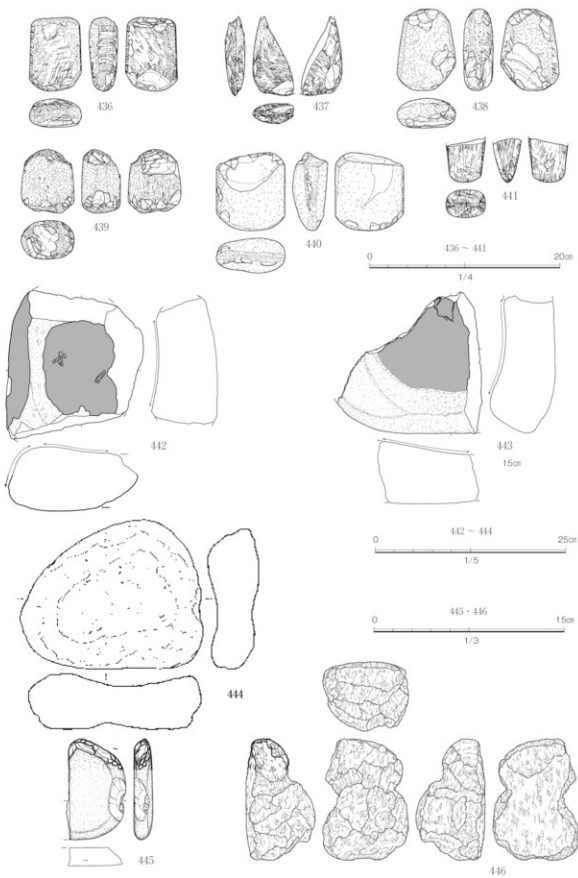




第 62 図 縄文時代後期～晩期石器実測図②



第63図 縄文時代後期～晩期石器実測図③



第64図 縄文時代後期～晩期石器実測図④

第7表 石器計測表(縄文時代後期～晩期)

掲載 番号	器種	石材	出土地点		長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	その他
			遺構・Gr	層位					
397	石鏃	チャート	F12	Va	21.6	15.7	5.3	1.4	
398	石鏃	チャート	F23	Va	15.6	15.2	5.0	0.9	
399	石鏃	安山岩	D14	IV	21.3	14.5	4.3	1.2	
400	石鏃	チャート	F20	IV	48.0	24.1	13.4	8.9	
401	二次加工剥片	砂岩	D15	Vb	66.7	108.5	29.0	195.1	
402	二次加工剥片	砂岩	F11	IV	67.3	84.2	27.5	157.5	
403	二次加工剥片	流紋岩	F15	Va	43.0	77.4	22.7	54.7	
404	二次加工剥片	玉髄	G11	Va	19.6	39.4	11.0	5.9	
405	礫器	砂岩	SE5		78.2	100.8	34.7	347.0	
406	礫器	砂岩	E14	Vb	71.2	85.3	28.8	261.0	
407	礫器	安山岩	G23	Va	64.4	86.3	19.3	202.0	
408	礫器	砂岩	H19	Va	47.8	53.0	9.5	34.0	
409	磨石	砂岩	F10	Va	77.6	130.0	55.8	802.0	
410	磨石	砂岩	F23	Va	69.7	110.8	47.0	538.0	
411	磨石	砂岩	F13	Va	64.5	129.0	55.0	634.0	
412	磨石	安山岩	D15	Va	59.8	100.6	42.0	359.0	
413	磨石	花崗岩	F24	VI	63.0	99.8	44.0	399.5	
414	磨石	砂岩	B-5-6区	造成	62.6	93.8	47.0	365.0	
415	磨石	砂岩	G11	Va	67.7	93.7	45.0	357.0	
416	磨石	砂岩	G11	IV	64.0	90.3	39.0	363.0	
417	磨石	砂岩	G11	Va	69.0	96.6	51.7	494.0	
418	磨石	砂岩	F13	Va	57.0	97.0	49.3	364.0	
419	磨石	砂岩	G12	Va	55.7	96.9	45.0	352.0	
420	打製石斧	頁岩	SE6		91.3	63.3	9.7	66.1	
421	打製石斧	ホルンフェルス	H10	Va	93.6	68.3	13.3	72.8	
422	打製石斧	ホルンフェルス	G10	Va	81.2	63.0	22.0	151.8	
423	打製石斧	ホルンフェルス	E14	Va	69.3	57.2	12.9	66.1	
424	打製石斧	ホルンフェルス	E14	Va	74.8	24.1	11.0	26.7	
425	打製石斧	ホルンフェルス	SE6		88.0	59.2	25.2	141.9	
426	打製石斧	ホルンフェルス	F11	Va	75.5	50.0	13.0	79.8	
427	打製石斧	ホルンフェルス	G11	Va	80.8	65.6	12.0	67.3	
428	打製石斧	ホルンフェルス	G10	Va	79.6	69.5	15.0	73.5	
429	打製石斧	ホルンフェルス	G10	Va	57.2	36.6	12.9	29.1	
430	敲石	ホルンフェルス	2次		108.7	53.9	37.0	296.0	
431	磨製石斧	砂岩	G14	Va	63.0	74.3	33.3	210.8	
432	磨製石斧	ホルンフェルス	F12	Va	90.7	49.8	15.0	100.5	
433	磨製石斧	ホルンフェルス	2次		83.5	42.5	16.9	87.6	
434	敲石	ホルンフェルス	D15	Va	82.7	52.6	32.8	188.5	
435	磨製石斧	砂岩	F11	Va	89.0	61.3	34.8	263.5	
436	敲石	砂岩	G11	Va	78.0	55.0	30.2	229.0	
437	磨製石斧	ホルンフェルス	G11	IV	83.7	43.0	20.7	74.4	
438	敲石	ホルンフェルス	B-5-6区	造成	86.0	61.4	31.4	259.0	
439	敲石	ホルンフェルス	F13	Va	67.2	56.0	40.7	236.0	
440	敲石	砂岩	G11	Va	82.2	72.0	36.9	335.0	
441	磨製石斧	ホルンフェルス	F13	IV	46.3	41.5	29.1	69.5	
442	石皿	砂岩	D14	Vb	196.0	182.5	87.0	3200.0	
443	石皿	砂岩	G10	Va	187.0	191.5	86.0	3765.0	
444	軽石製品	軽石	SC5		24.0	18.3	5.7	543.0	
445	石鏃	砂岩	A区	攪乱	79.8	47.0	15.0	86.0	
446	軽石製品	軽石	SC1	Va	95.8	67.8	54.5	61.4	

## 第6節 古代～中世の遺構と遺物

### 1 遺構と遺構内出土遺物

古代～中世の遺構は、A区北側で掘立柱建物跡1棟、土坑1基を、B区北側で溝状遺構5条を、C区東側で溝状遺構を4条検出した。

#### (1) 溝状遺構 (SE1～SE9)

##### 1号溝状遺構 (SE1 第65～67図)

C区南側のG28～G29Grにかけて検出した浅い溝状遺構である。C区は北西側から南東側に向けて緩やかに傾斜しており、調査区外の南東側は深い谷地形となっている。SE1はその谷がある南東側に向かって調査区外へと延びる。調査区壁までの溝の長さは3.3mで、最大幅は約2mである。検出面からの深さは最深部で約34cmを測る。断面は浅いU字形を呈している。埋土はⅡ層と同じ文明軽石を含む浅黄橙土である。出土遺物はないが、埋土に文明軽石を含むことから中世の遺構であると考えられる。

##### 2号溝状遺構 (SE2 第65～67図)

C区南側のG28Grで検出し、SE1に平行するように並んだ浅い溝状遺構である。SE2もSE1同様に谷がある南東側に向かって調査区外へと延びる。調査区壁までの溝の長さは5.7mで、最大幅は1.6m程である。検出面からの深さは最深部で約26cmを測る。断面はU字形を呈している。埋土はⅡ層と同じ文明軽石を含む浅黄橙土である。出土遺物はないが、埋土に文明軽石を含むことから中世の遺構であると考えられる。

##### 3号溝状遺構 (SE3 第65～67図)

C区南側のG28Grで検出し、SE1・SE2に平行するように並んだ溝状遺構である。SE3も同様に谷がある南東側に向かって調査区外へと延びる。調査区壁までの溝の長さは5.2mで、最大幅は約1.1mである。検出面からの深さは最深部で約20cmを測る。断面は浅い皿状を呈している。埋土はⅡ層と同じ文明軽石を含む浅黄橙土である。出土遺物はないが、埋土に文明軽石を含むことから中世の遺構であると考えられる。

##### 4号溝状遺構 (SE4 第65～67図)

C区北東側のH25Gr～H26Grで検出した溝状遺構である。SE4は北東方向の調査区外へと延びる。調査区壁面までの溝の長さは5.9mで、最大幅は約1.0mである。検出面からの深さは最深部で約22cmを測る。断面は浅いU字形を呈している。埋土はⅡ層と同じ文明軽石を含む浅黄橙土である。出土遺物はないが、埋土に文明軽石を含むことから中世の遺構であると考えられる。

##### 5号溝状遺構 (SE5 第65・68・69図 遺物：第72図447～454)

F10～F13Gにかけて検出した溝状遺構である。幅78cm～2.30mであるが、長さについては調査区内の約39mを検出した。溝は南から北に向けて低くなっている。遺構の検出面からの深さは最深部で約13cmと極めて浅い。埋土からは土師器や白磁、青磁、磁石などの遺物が出土し、7点を図化した。447は土師器の坏である。448・449は土師器の皿である。448は外面の底部から胴部に向かって粘土のたるみが見られる。450は須恵器の壺と推測される。451は白磁碗で、太宰府陶磁器分類（以下「太宰府編年」）のⅣ類、452はⅨ-1b類と推測される。453は青磁碗で、幅の広い片切調の鎗連弁文を施す。上田（秀夫）編年のB類に相当し、13世紀から14世紀の遺物と推測される。454は砂岩製の磁石で方形を呈しているが、上下とも欠損している。長さ436mm、幅28.7mm、厚さ14.1mm、重さ33.6gである。

##### 6号溝状遺構 (SE6 第65・68・69図 遺物：第72・73図455～498)

E10GrからH18Grまでほぼ直線にまっすぐ延びる大規模な溝である。幅75cm～2.40mであるが、長

さについては調査区幅分の約85mを検出した。遺構の検出面からの深さは最深部で1.2mを超える。F13Gr～F14Grでは遺構の埋土の中位から赤変した焼土の硬化面を検出し、鉄滓や輪の羽口が出土した。その他の遺物としては土師器が多量、須恵器や黒色土器が少量出土した。これらのうち44点を図化した。455～462は口縁部が「L」字状に外反した土師器の甕である。ほとんどの内面や外面に黒斑やスス状の黒い付着物が見られる。463～472は土師器の埴である。463は全体的に風化している。464は外面にスス状の黒色の付着物が確認できる。467は底部の完形で、中央に穿孔があり紡錘車として転用されたと推測される。468は底部の完形である。473・474は高台付埴の底部で、両方とも内外面にスス状の薄い黒色付着物が確認できる。475～484は土師器の埴である。478・479・484はSE6の埋土の焼土硬化面から出土した。479・482・483は底面の一部に板目圧痕が見られる。483は底部の完形で、一部外面に黒斑が見られる。485～488は土師器の皿である。487は底面の一部に板目圧痕が見られる。489・493は土師器の鍋である。口縁部はゆるい「く」字形を呈する。492は焼土硬化面から出土した輪の羽口で、一部にスス状の付着物が見られる。鉄滓も共伴して多数出土した。490・491・497は土師器の内黒土器である。494～496は黒色土器の埴である。498は須恵器の壺と推測され、焼土硬化面から出土した。

#### 7号溝状遺構 (SE7 第65・68・69図)

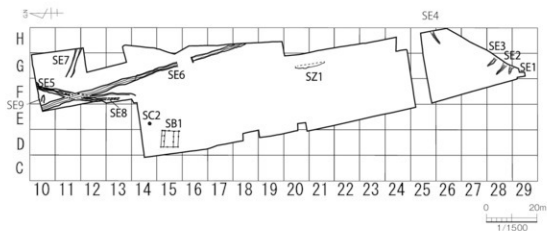
主にB-1区のG17Grで検出した東西に延びる溝状遺構である。SE7は調査区の東壁からかり調査区外へと延びる。検出した壁面までの溝の長さは約10mで最大幅は約1.5mである。検出面からの深さは5cm程度と極めて浅い。出土遺物はないが、埋土に文明軽石を含むことから、中世の遺構であると考えられる。

#### 8号溝状遺構 (SE8 第65・68・69図 遺物：第74図499～502)

F11Gr～F13Grにかけて検出した溝状の遺構である。SE8はSE5と切り合い関係にあるため、遺構の形状が不明な部分があるがSE5よりも新しい時期の遺構である。検出した溝の長さは19.5mで、幅は1.5m前後、深さは最深部で約30cmである。遺物は4点を図化した。499～501は土師器で、499は埴の底部である。500・501は皿で、500は内面には意図しない筋状の痕跡が見られる。502は白磁碗である。

#### 9号溝状遺構 (SE9 第65・68・69図)

F10Grで検出した溝状の遺構であり、SE6と切り合い関係にある。SE6よりも新しい時期の遺構である。検出した溝の長さは調査区壁面までで約3.3mで、幅は最大で1.1m程度、深さは最深部で約60cmである。遺物は出土しなかった。



第65図 古代～中世遺構分布図 (S=1/1500)

(2) 掘立柱建物跡 (SB1 第65・70図)

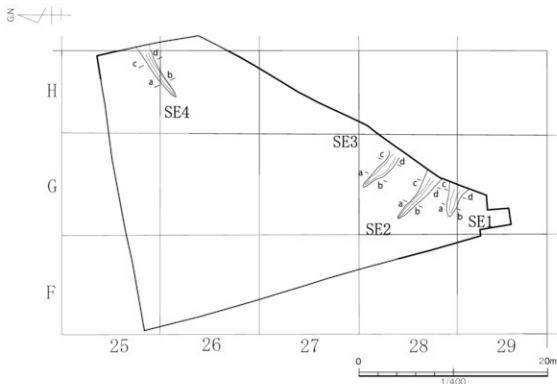
A区北側のD15Grに位置する掘立柱建物跡である。3間×2間の身舎の両側に底を備えた長棟構造である。棟方位はE-4°-Sの東西棟である。規模は、北側柱、南側柱の両方とも桁行6.3mで、柱間隔は東からすべて2.1mで等間隔に並ぶ。東側柱の梁行3.7m、西側柱の梁行3.8mを測る。柱穴の掘形は東側柱列ですべて径26cm円形、西側柱列で26cm～32cmのほぼ円形を呈している。柱穴の検出面からの深さは、22cm～54cmとばらつきが大きい。すべての柱穴跡において根固め等の建築技法は認められず、Ⅲ層と推測される黒色土を埋土とする。

(3) 2号土坑 (SC2 第65・70図)

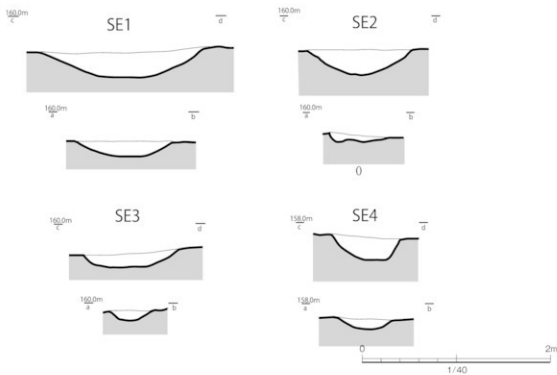
2号土坑は中世の遺構である掘立柱建物跡 (SB1) の北東側であるE14Grに位置している。Ⅳ層上面で検出し、平面形状は長軸約88cm、短軸約85cmのほぼ円形プランを呈し、深さは最深部で約25cmを図る。埋土は黒色土及び黒褐色土で構成されている。遺物は、土師器片が7点出土したが、小片のため図化は行わなかった。

(4) 不明遺構 (SZ1 第71図)

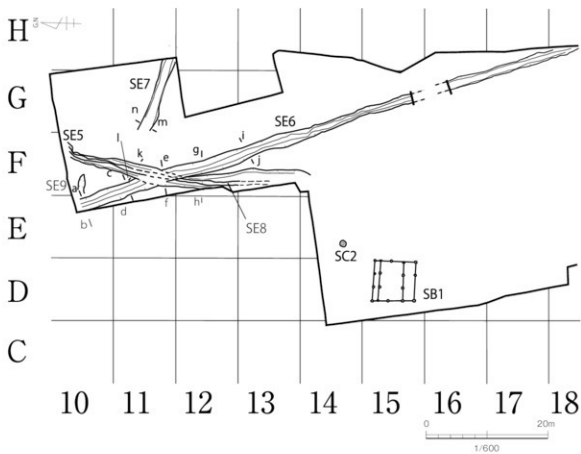
G20Gr～G21Grにかけて検出した溝状(竅穴状)の遺構である。検出した遺構の長さは11.7mで、幅は調査区壁面まで最大1.54m、深さは最大で約25cm前後である。遺物は1点を図化した。503は土師器片の底部である。ここでは、SZ1を不明遺構として扱ったが、5号溝状遺構の伸びる向きや遺物内容からSZ1はSE5の一部である可能性が考えられる。



第66図 SE1～SE4平面図 (1/400)

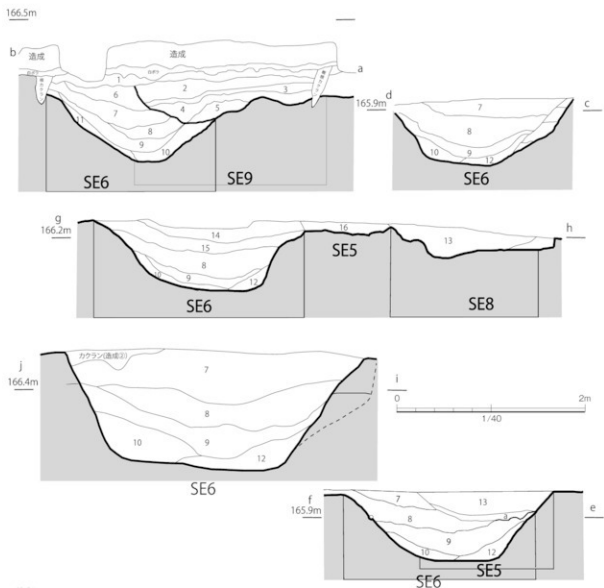


第 67 図 SE1 ~ SE4 断面図



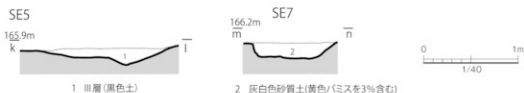
第 68 図 SE5 ~ SE9 平面図



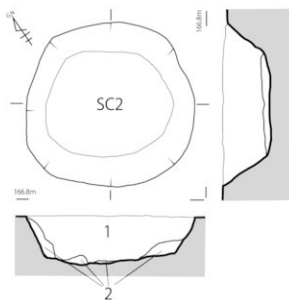
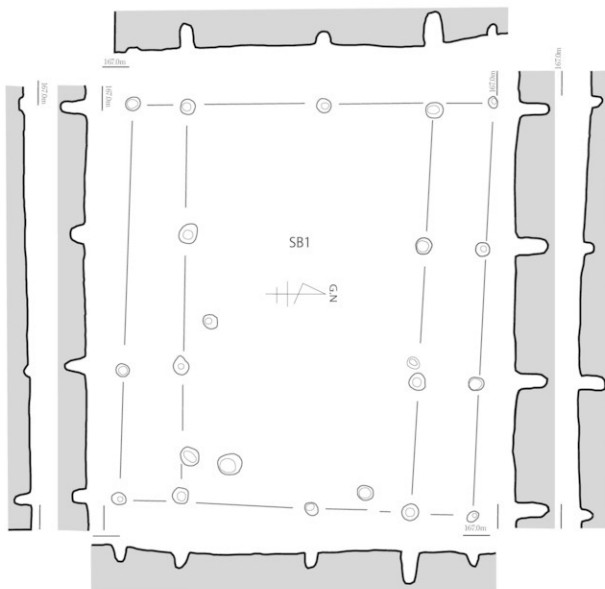


注記

- |                     |  |
|---------------------|--|
| 1. 黒色土 (10YR 2/1)   | 1 mm以下の明黄橙色軽石粒を少量含む                    |
| 2. 黒褐色土 (10YR 3/2)  | 1 mm以下の明黄橙色軽石粒を少量含む                    |
| 3. 黒褐色土 (10YR 3/2)  | 1 mm以下の明黄橙色軽石粒を多く含む。上面が硬化している          |
| 4. 暗褐色土 (10YR 3/3)  | 1 mm以下の明黄橙色軽石粒をわずかに含む。田層ブロックを多く含む      |
| 5. 黒色土 (10YR 2/1)   | 1 ~ 3mm大の黄褐色軽石粒を多く含む                   |
| 6. 黒褐色土 (10YR 3/2)  | 1 ~ 3mm大の黄褐色、明黄褐色軽石粒を多く含む              |
| 7. 黒褐色土 (10YR 3/1)  | 1 ~ 5mm大の軽石粒を少量含む                      |
| 8. 黒褐色土 (10YR 3/1)  | 1 ~ 3mm大の軽石粒を僅かに含む                     |
| 9. 黒色土 (10YR 2/1)   | 1 mm大の軽石粒を僅かに含む                        |
| 10. 黒褐色土 (10YR 2/2) | 1 ~ 3mm大の軽石粒を僅かに含む                     |
| 11. 黒褐色土 (10YR 3/2) | 1 ~ 5mm大の軽石粒を少量含む                      |
| 12. 黒褐色土 (10YR 2/3) | 1 ~ 5mm大の軽石粒を少量含む                      |
| 13. 黒褐色土 (10YR 3/1) | 1 ~ 5mm大の軽石粒を僅かに含む                     |
| 14. 黒褐色土 (10YR 3/1) | 1 ~ 3mm大の軽石粒を、焼土粒、土器片を僅かに含む            |
| 15. 黒褐色土 (10YR 3/2) | 1 ~ 10mm大の焼土粒、1 ~ 5mm大の軽石粒を含み、一部炭化物も含む |
| 16. 黒褐色土 (10YR 3/2) | 1 ~ 5mm大の軽石粒を僅かに含む                     |
| a. 黒褐色土 (10YR 3/1)  | 1 mm以下の軽石粒を多く含む、硬化している、S Eの使用面         |

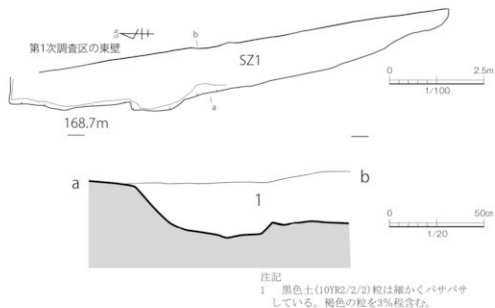


第 69 図 SE5 ~ SE9 断面図



- SB1
- 0 3m  
1/60
- SC2
- 0 1m  
1/20
- 1 黒色土(10YR 1.7/1) 細粒でサラサラしている。粘質しまりとも弱い、 $\Phi 1\text{mm}$ 程度の赤褐色粒や白色粒(軽石か)、御池軽石をわずかに含む。炭化物粒をわずかに含む。微細なガラス粒を多く含む。
  - 2 黒褐色土(7.5YR 2/1.5) 細粒がややサラサラしている。粘質・しまりとも1層よりはやや強い。IV層(黒褐色土10YR2/2)と1層との混土。 $\Phi 1\text{mm}$ 前後の御池軽石をわずかに含む。

第70図 SB1・SC2実測図



第71図 SZ1実測図

## 2 遺物 (第74図 504～532)

その他、遺構以外の古代から中世の遺物は29点を図化した。出土地点は、溝状遺構SE5～SE9の周辺がほとんどで、一部A区北側や第1次調査区であるG19GrやF24Grからも出土している。内訳は土師器16点、須恵器2点、黒色土器2点、白磁3点、青磁3点、染付(青花)1点、陶器1点、宋銭1点である。以下種別ごとに記述するが、遺物の分布図については、遺物の点上げを行ったのが1点だけだったため掲載しない。

### (1) 土師器 (504～519)

504～506は口縁部がL字状に外反する甕である。507～509は碗、510～514・518は杯、515～517は皿、519は盤である。

### (2) 須恵器 (520・521)

520は捏鉢で、521は提瓶の可能性がある。

### (3) 黒色土器 (522・523)

両方とも碗である。

### (4) 白磁 (524～526)

524・525は碗で、524はX I類、525は玉縁口縁を呈し、IV類に相当する。時期は11世紀後半～12世紀前半のものである。526は皿である。

### (5) 青磁 (527・528・531)

3点とも龍泉窯系青磁碗で、527は大宰府編年のI-2類bで、12世紀中期～後期のものである。528はI-5類で内面に櫛目文を施す。

### (6) 染付 (529)

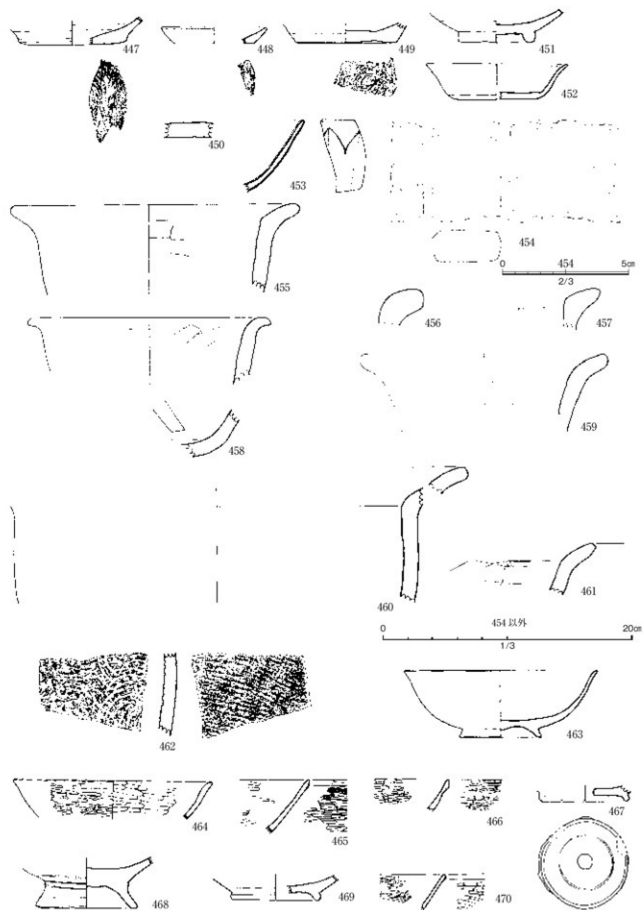
皿で、外面に草花文を施し、16世紀後半のものと考えられる。

### (7) 陶器 (530)

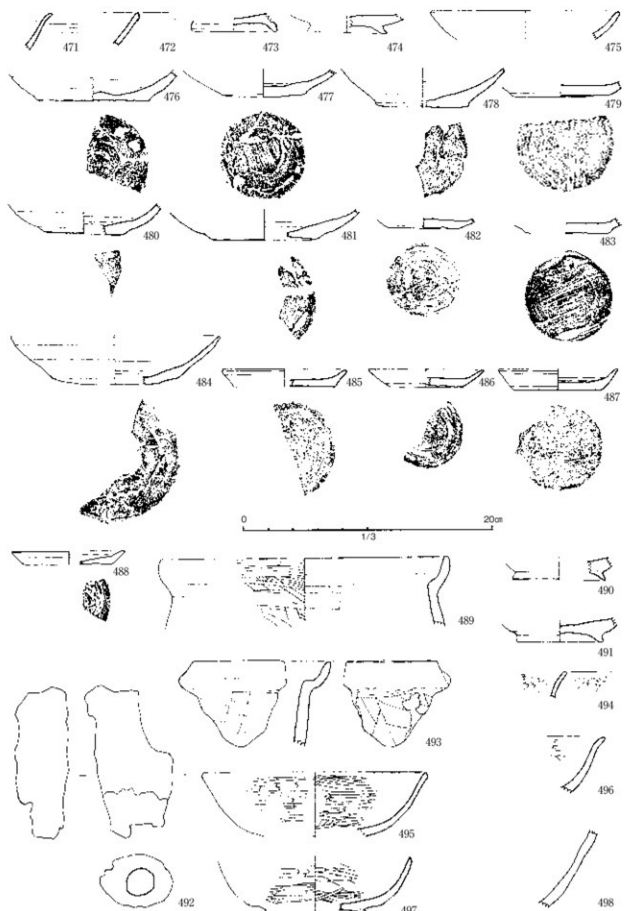
備前焼の壺である。

### (8) 宋銭 (532)

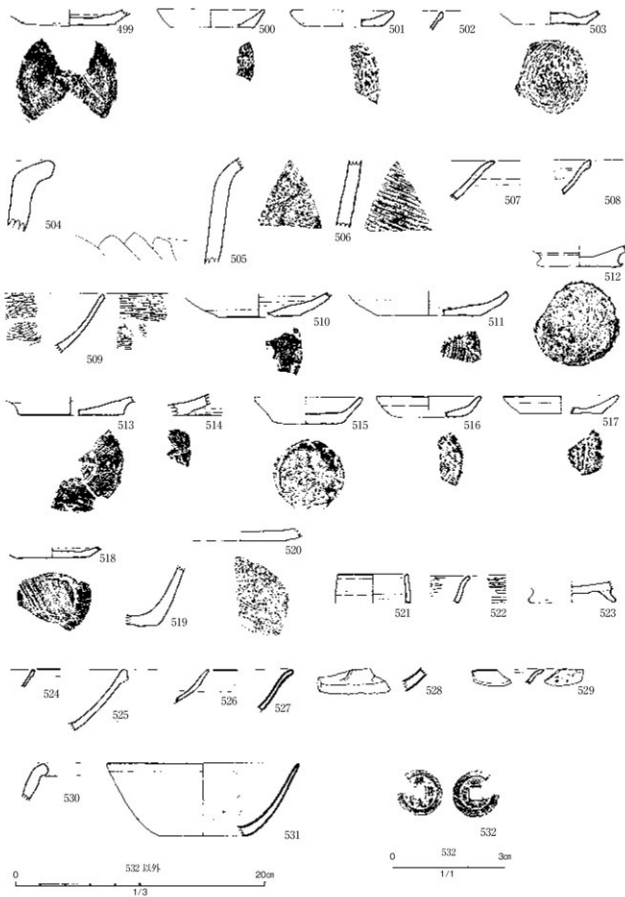
1008年に北宋で鑄造が開始された祥符元寶のほぼ完形である。



第72图 古代~中世遺物実測図①



第 73 图 古代~中世遺物実測図②



第74图 古代~中世遺物実測図③

第8表 遺物観察表(古代～中世)

周知番号	土器番号	種類	器種	部位	出土地点 法量 (cm)				手法・調整・文様等		色調		胎土の特徴	備考	
					区・Gr	層	口径	底径	器高	外面	内面	外面			内面
447	38	土器器	杯	胴一底部	S15		8.6		ナテ	ナテ	にじみ黄褐色 10YR7-3	にじみ黄褐色 7.5YR7-4	2mm以下の黄色光沢と透明光沢をわずかに含む		
448	33	土器器	瓶	胴一底部	S15	8.4	6.2	13	ナテ、ヘラ切	ナテ	にじみ黄褐色 7.5YR7-3	にじみ黄褐色 7.5YR7-3	2mm以下の小石、明褐色を含む		
449	51	土器器	瓶	底部	S15				ナテ、糸切	ナテ	浅黄褐色 10YR8-3	にじみ黄褐色 10YR7-3	2mm以下の赤褐色をわずかに含む	肌化美しい	
450	78	煎茶器	壺小	胴一底部	S15				ナテ小	ナテ小	黄/	黄/	2mm以下の赤褐色をわずかに含む	断面に亀裂	
451	62	白磁	瓶	胴一底部	S15		6.0		ナテ、ヘラ切、板刷	板刷、貫入	灰白5Y7-1 灰白5Y8-1	灰白5Y7-1		胎土黄灰白NS/	
452	68	白磁	瓶	胴一底部	S15				板刷、貫入	板刷、貫入	灰白10Y7-1	灰白10Y7-1		胎土黄灰白NS/	
453	470	青磁	瓶	胴一底部	S15				板刷、貫入、白切開線並文	板刷、貫入	オリーブ灰 5Y6-1	オリーブ灰 5Y6-1		胎土黄灰白NS/	
454		磁石			S15										詳細は、本表に記載
455	182	土器器	甕	胴一底部	S16		22.4		ナテ	ナズリ	にじみ黄褐色 7.5YR7-3	にじみ黄褐色 7.5YR5-4	5mm以下の小石、褐色、無色透明光、光沢を含む		
456	187	土器器	甕	胴一底部	S16		36.4		ナテ	ナテ、ナズリ	灰黄褐色 10YR5-2	灰黄褐色 7.5YR5-2 橙7.5YR6-6	3mm以下の赤褐色、赤褐色、透明光沢、黒色、灰白色をわずかに含む		
457	188	土器器	甕	胴一底部	S16				ナテ	ナズリ	にじみ黄褐色 7.5YR7-3	浅黄褐色 7YR8-4	1mm以下の透明光沢と灰白色をわずかに含む		
458	184	土器器	甕	胴一底部	S16		19.4		ナテ	ナズリ	にじみ黄褐色 7.5YR6-4	橙7.5YR6-4	3mm以下の灰白色、角閃石、透明光沢を少量含む		
459	185	土器器	甕	胴一底部	S16		19.1		ナテ	ナズリ	にじみ黄褐色 7.5YR6-4 明赤褐色 2.5YR5-6	橙2.5YR6-6	5mm以下の細かい褐色結晶、褐色色粒、灰白色粒、透明光沢、黒色光沢を含む	肌質	
460	190	土器器	甕	胴一底部	S16				ナテ、ナズリ	ナズリ	明赤褐色 2.5YR5-6 橙7.5YR6-4	橙2.5YR6-6	5mm以下の灰白色、透明光沢を少量、微細な光沢粒を少量含む	断面に断面 23mm	
461	186	土器器	甕	胴一底部	S16				ナテ	ナズリ	橙7.5YR6-6 にじみ黄褐色 7.5YR5-3	にじみ黄褐色 7.5YR6-4	5mm以下の赤褐色、灰白色粒、透明光沢、明褐色光沢を少量含む	スス状の褐色付着物	
462	79	土器器	甕	底部	S16				ナテ、ナテ	円筒内筒具裏	黄灰2.5Y6-1	黄灰2.5Y6-1	2mm以下の灰白色粒、黒色粒、灰色粒をわずかに含む		
463	21	土器器	瓶	胴一底部	S16		6.5		ナテ	ナテ	灰白 10e7.5YR8-2	灰白 10e7.5YR8-2	1-2mmの橙褐色をわずかに含む 4mmの褐色粒を1つ含む	肌化	
464	33	土器器	陶	胴一底部	S16		15.6		ナテ、ミゴキ	ナテ、ミゴキ	にじみ黄褐色 7.5YR7-3	にじみ黄褐色 7.5YR7-3	1.5mmの褐色粒を1つ、微細な灰白色粒、透明光沢粒をわずかに含む	スス状の褐色付着物	
465	43	土器器	陶	胴一底部	S16				ナテ、ミゴキ	ナテ、ミゴキ	浅黄褐色 7YR8-4	浅黄褐色 7YR8-4	1.5mmの褐色粒を1粒、微細な透明光沢粒を含む		
466	39	土器器	陶	胴一底部	S16				ナテ、ミゴキ	ナテ、ミゴキ	にじみ黄褐色 10YR7-3	にじみ黄褐色 10YR7-3	微細な透明光沢をわずかに含む		
467	25	土器器	陶	底部	S16		6.3		ナテ、ミゴキ	ナテ、ミゴキ	にじみ黄褐色 7.5YR7-4	浅黄褐色 10YR8-3	1mm以下の灰色色粒を少量、褐色色粒を含む		
468	23	土器器	陶	胴一底部	S16		8.1		ナテ	ナテ	浅黄褐色 10YR8-3	浅黄褐色 10YR8-4	2mm以下の赤褐色と透明光沢をわずかに含む		
469	24	土器器	陶	胴一底部	S16		7.0		ナテ	ナテ、ミゴキ	にじみ黄褐色 7.5YR7-4	にじみ黄褐色 7.5YR7-4	微細な透明光沢を少量含む		
470	38	土器器	陶	胴一底部	S16				ナテ、ミゴキ	ナテ、ミゴキ	にじみ黄褐色 10Y7-3	にじみ黄褐色 10Y7-3	微細な透明光沢をわずかに含む		
471	62	土器器	陶	胴一底部	S16	黄土			ナテ	ナテ	にじみ黄褐色 10YR7-3	にじみ黄褐色 10YR7-4	微細な光沢と褐色粒、1mm以下の灰白色粒をわずかに含む		
472	63	土器器	陶	胴一底部	S16				ナテ、ミゴキ	ナテ、ミゴキ	にじみ黄褐色 10YR6-3	にじみ黄褐色 10YR6-4	微細な褐色粒をわずかに含む		
473	36	土器器	高台付陶	底部	S16		6.4		ナテ	ナテ、ミゴキ	橙5YR6-6	橙5YR7-6	1mm以下の灰白色粒を少量含む		
474	27	土器器	高台付陶	底部	S16		6.5		ナテ、ミゴキ	ミゴキ	浅黄2.5Y8-3	黄灰2.5Y6-1	3mm以下の灰白色粒と透明光沢粒を少量含む		
475	39	土器器	杯	胴一底部	S16		15.2		ナテ	にじみ黄褐色 10YR7-4	にじみ黄褐色 10YR7-4	橙7.5YR7-6	1mm以下の灰白色粒、褐色粒、光沢粒を含む		
476	30	土器器	杯	胴一底部	S16		8.8		ナテ	ナテ、ミゴキ	灰黄褐色 10YR6-2	浅黄褐色 10YR8-3	3mm以下の赤褐色粒、1mm以下の角閃石をわずかに含む		
477	34	土器器	杯	胴一底部	S16		6.8		ナテ	ナテ	黄灰2.5Y5-1	にじみ黄褐色 10YR7-2	微細な透明光沢と灰白色粒をわずかに含む		
478	35	土器器	杯	胴一底部	S16		7.3		ナテ	ナテ	浅黄褐色 10YR8-4 浅黄褐色 10YR8-3	浅黄褐色 10YR8-3 浅黄褐色 10YR8-3	1mm以下の褐色粒をわずかに含む		
479	36	土器器	杯	胴一底部	S16		7.6		ナテ、ヘラ切、板刷	ナテ	黄灰2.5Y6-1 浅黄褐色 2.5Y7-2	黄灰2.5Y5-1 黄灰2.5Y4-1	微細な透明光沢を少量含む		
480	42	土器器	杯	胴一底部	S16		6.5		ナテ	ナテ	にじみ黄褐色 10YR7-3	灰黄褐色 10YR6-2	微細な透明光沢、1mm以下の赤褐色と灰白色を微量含む		
481	31	土器器	杯	胴一底部	S16		8.4		ナテ	ナテ	にじみ黄褐色 7.5YR7-3	にじみ黄褐色 7.5YR7-3	3mm以下の赤褐色粒、2mm以下の灰白色粒と光沢粒を含む		
482	30	土器器	杯	胴一底部	S16		5.6		ナテ、ヘラ切、板刷	ナテ	灰黄2.5Y7-2	灰白2.5Y8-2	1mm以下の赤褐色粒をわずかに、褐色粒を少量含む		
483	65	土器器	杯	胴一底部	S16	黄土	6.6		ナテ、ヘラ切、板刷	ナテ	灰白10YR8-2	黒10YR2-1	1mm以下の褐色をわずかに含む	肌質	
484	29	土器器	杯	胴一底部	S16		16.4	109	ナテ	ナテ	浅黄褐色 7.5YR8-6	橙7.5YR7-6	2mm以下の赤褐色色粒と赤褐色を少量、微細な透明光沢と灰白色粒をわずかに含む		
485	47	土器器	瓶	胴一底部	S16		100	8.2	ナテ、ヘラ切	ナテ	橙5YR7-6	橙5YR7-6	1mm以下の赤褐色粒、微細な褐色粒を含む		
486	48	土器器	瓶	胴一底部	S16				ナテ、ヘラ切	ナテ	浅黄褐色 10YR8-3	灰白 10YR8-2	3mm以下の赤褐色粒、褐色粒を含む		
487	49	土器器	瓶	胴一底部	S16		9.4	69	ナテ、ヘラ切、板刷	ナテ	にじみ黄褐色 10YR7-1	浅黄褐色 10YR8-4	2mm以下の赤褐色粒、褐色粒をわずかに含む		
488	36	土器器	瓶	胴一底部	S16		9.0	6.4	ナテ、ヘラ切	ナテ	明黄褐色 10YR7-6	橙5YR7-6	1mm以下の褐色粒、褐色粒、微細な光沢粒をわずかに含む		
489	190	土器器	甕	胴一底部	S16		23.2		ナテ	ナテ、ナズリ	橙5YR6-8	明赤褐色 5YR5-6	3mm以下の黄色粒、白色粒、光沢粒を少量含む		

規格番号	実用番号	種類	器種	部位	治上地点	法 量 t/mm			手法・調整・文替等		色調		粘土の増減	備考	
						区・層	口径	口径	器高	外形	内面	外面			内面
400	06	内面土部	高付付	底面	SE6	軟土	7.3	ナテ	ナテ、ミガキ	浅黄緑2.5YR6/3	9C/N4/1	1mm以下の透明光沢粉、黒色粒をこくわずかに含む			
401	22	内面土部	不明	胴一側面	SE6	軟土	6.9	ナテ	ナテ、ミガキ	灰白2.5YR8/2	黒10YR12/1	2mm以下の小石をわずかに含む			
402	191	土師器	輪の口		SE6			ナテ	ナテ	灰白2.5YR8/2 黒6.10YR5/1	黄赤黄10YR7/3	1mm以下の灰白色粒、黒色粒をわずかに含む			
403	189	土師器	底	11面一側面	SE6			ナテ、ハタリ	ナテ、ナズリ	黒6.5YR4/1	赤黒5YR6/8	2mm以下の赤色粒、白色粒、光沢粉を少量含む			
404	71	地土部	底	11面一側面	SE6	軟土		ナテ、ミガキ	ミガキ	灰白10YR7/1 黒10YR12/1	黒10YR12/1	灰白色を微量に含む			
405	66	黒色土部	底	11面一側面	SE6	硬土	18.0	5.1	ミガキ	黒6.5YR6/1 黒2.5YR2/1		微細な光沢粉を含む			
406	09	黒色土部	底	11面一側面	SE6			ナテ	ナテ、ミガキ	灰白2.5YR8/2 黒5YR12/1	黒6.10YR6/1 黒5YR12/1	微粒子を全体に含む	風化強い		
407	67	内面土部	底	胴一側面	SE6		8.6	ナテ、ミガキ	ナテ、ミガキ	灰白10YR8/1	黒9C/3	微細な透明光沢粉を少量、1mm以下の黒色粒をこくわずかに含む	風化気味		
408	75	須恵器	底	胴部	SE6	硬土		ナテ	ナテ	黒6.10YR6/1	黒6.10YR6/1	3mm以下の黒い粒をわずかに含む			
409	32	土師器	底	底面	SE8		7.6	ナテ、ヘラ切	ナテ、ミガキ	橙2.5YR7/6	にぶい黄緑2.5YR7/3	極小の灰白色粒を微量含む	3.5と同一個体か		
500	54	土師器	底	11面一側面	SE8		8.6	6.2	1.4	ナテ、ヘラ切	ナテ	にぶい黄緑2.5YR7/4	にぶい黄緑2.5YR7/3	1mm以下の白色粒と光沢と黒色の微粒をわずかに含む	
501	37	土師器	底	11面一側面	SE8		7.9	6.5	1.3	ナテ、ヘラ切	ナテ	にぶい黄緑2.5YR6/4	黄緑2.5YR6/6	微細な透明光沢粉を少量、1mm以下の赤黒の粒をわずかに含む	
502	407	白磁	輪	11面側面	SE8				輪縁、貫入	輪縁、貫入	灰白2.5G/8/1	灰色2.5GY8/1	筋土調 W1EN/8		
503	44	土師器	坯	底面	SE2		6.8	ナテ、赤切	ナテ	赤赤橙2.5YR7/3	赤赤橙2.5YR7/4	3mm以下の赤黄赤色粒と透明光沢粉をわずかに含む			
504	181	土師器	蓋	11面側面	G11	Va			ナテ	ナテ	にぶい黄緑10YR7/4	にぶい黄緑2.5YR7/3	3mm以下の橙灰色、灰色粒、無色透明粉を含む	黒炭	
505	183	土師器	蓋	胴一側面	F11	Va			ナテ	ナテ、ナズリ	明赤黄5YR5/6	黒6.5YR4/3	5mm以下の灰白色粒を少量、透明光沢粉を少量含む	スズ状の黒色付着物	
506	77	土師器	蓋	2次	2次	5.6		クマキ	ナテ	黒5Y2/1	9C/SY3/1	2mm以下の黒の光沢粉をわずかに含む、灰白色粒が内面に特に多量、黒色粒、透明光沢粉をわずかに含む			
507	60	土師器	底	11面一側面	G11	Va			ナテ	ナテ	にぶい黄緑10YR7/3	にぶい黄緑10YR7/3	微細な透明光沢粉をわずかに含む	筋土調の黒色付着物、粘土結白粒	
508	64	土師器	底	11面一側面	D14	B5			ナテ、ミガキ	ナテ、ミガキ	にぶい黄緑10YR7/1	黒6.10YR5/1	微細な黒色粒をわずかに含む		
509	61	土師器	底	11面一側面	B5	6次			ナテ、ミガキ	ナテ、ミガキ	灰白10YR7/1 黒10YR12/1	黒6.10YR5/1 黒10YR12/1	微細な光沢粉を多く、黒色光沢粉をわずかに含む		
510	37	土師器	坯	胴一側面	G11	N	6.75		ナテ	ナテ	にぶい黄緑2.5YR6/4	にぶい黄緑2.5YR6/4	微細な透明光沢粉を多量に、灰白色粒をわずかに含む		
511	41	土師器	坯	胴一側面	D16	6次	8.5		ナテ、赤切	ナテ	黒6.10YR5/1	黄赤黄10YR7/3 黒6.10YR6/1	1mm以下の灰白色粒を少量含む		
512	28	土師器	坯	底面	G16	M	6.8		ナテ	ナテ	橙2.5YR7/6	橙2.5YR7/6	微細な輪縁と灰白色粒をわずかに含む		
513	40	土師器	底	底面	B5	6次	8.0		ヘラ切、数回互換	ナテ	橙2.5YR7/6	橙2.5YR7/6	2mmの黒灰色、0.5mm以下の赤黒色粒、黒色粒を含む		
514	45	土師器	底	底面	B5	6次			ナテ	ナテ	橙2.5YR6/6	黄赤黄10YR8/3	2mm以下の灰白色粒、灰色粒、透明光沢粉をわずかに含む		
515	46	土師器	底	11面一側面	G11	N	8.5	5.8	2.2	ナテ	ナテ	灰白10YR8/2	黄赤黄10YR8/3	1mm以下の黒色粒、灰色粒をわずかに、透明光沢粉を少量全体に含む	
516	32	土師器	底	11面一側面	F10	Va	8.4	6.0	1.7	ナテ、ヘラ切	ナテ	浅黄緑10YR8/3	浅黄緑10YR8/3	1mm以下の明褐色の粒をわずかに含む	風化強い
517	50	土師器	底	2次	2次	9.2	6.6	1.3	ナテ、ヘラ切	ナテ	橙2.5YR7/6	黄赤橙2.5YR7/4	1mm以下の黒色と赤色の粒と光沢のある微粒をわずかに含む		
518	461	土師器	坯	底面	G11	N	5.8		ナテ、ヘラ切	ナテ	灰黄緑10YR6/2	灰黄緑10YR6/2	微細な透明光沢粉を少量含む		
519	400	土師器	蓋	胴一側面	G19	N			ナテ	ナテ	にぶい黄緑2.5YR6/4	にぶい黄緑2.5YR6/4	微細な透明光沢粉、黒色のにぶい光沢粉をわずかに含む	スズ状の黒色付着物	
520	76	須恵器	底	底面	B	6次	7.5		ナテ、赤切	ナテ	灰白10YR7/1	灰白10YR7/1	2mm以下の灰色粒を少量、微細な褐色粒をわずかに含む		
521	74	須恵器	底	底面	B	6次	5.6		ナテ	ナテ	明灰黄2.5Y5/2	明灰黄2.5Y5/2	白い粒をわずかに含む		
522	70	黒色土部	底	11面一側面	G13	Va			ミガキ	ミガキ	にぶい黄緑2.5YR7/4 黒10YR12/1	黒10YR12/1	透明粉、微粒をわずかに含む		
523	72	黒色土部	底	胴一側面	B5	6次	6次	7.0	ナテ、ミガキ	ナテ	浅黄緑10YR8/3	黒10YR12/1	2mm以下の明褐色、黒の微粒子をわずかに含む		
524	466	白磁	輪	11面側面	E17	6次			輪縁、貫入	輪縁、貫入	灰白5Y7/1	灰白5Y7/1	筋土調 W1EN/8		
525	463	白磁	輪	11面一側面付着	G21	Va			ナテ、輪縁	ナテ、輪縁	灰白5Y7/2 黒2.5Y8/2	灰白5Y7/2	筋土調 W1EN/8		
526	465	白磁	輪	11面一側面	E15	6次			ナテ、輪縁	輪縁	灰白5Y8/2	灰白5Y8/2	筋土調 W1EN/8		
527	471	青磁	輪	11面一側面	G22	6次			輪縁、貫入	輪縁、貫入	灰白5Y6/1	灰白5Y6/1	筋土調 にぶい黄緑10YR7/2		
528	464	青磁	底	底面付着	B5	6次			輪縁	輪日文、輪縁	灰オリーブ2.5Y5/2	灰オリーブ2.5Y5/2	筋土調 W1EN/7 W1EN/7		
529	472	染付	底	11面側面	G22	Va			輪縁、染付	輪縁、染付	明緑灰10G7/1	明緑灰10G7/1	青色 粘土調 W1EN/8		
530	473	陶器	底	11面側面	2次	6次			ナテ	ナテ	灰黒5YR4/2	黒6.7.5YR4/1	2mm以下の灰白色粒、にぶい白色光沢粉をわずかに含む	輪縁地	
531	409	青磁	輪	11面一側面	2次				輪縁	輪縁	ナオリーブ灰2.8GY6/1	ナオリーブ灰2.8GY6/1	筋土調 W1EN/7		
532		朱磁	付着 山付	底面	F24	Va							赤土 100%年輪 跡		



## 第7節 その他の遺構と遺物

中床丸遺跡では、構築時期の不明な遺構として、堅穴状遺構1基、土坑4基、ビット列4基、陥し穴状遺構1基が検出された。これらは、いずれも掘削された本来の層位が確認できず、遺物も出土していないが、もしくは小片のため詳細な時期比定が困難なものである。

### 1 遺構

#### (1) 堅穴状遺構 (SA1 第75・76図)

G11GrとG12Grにかけて位置し、調査区の東壁Ⅲ層上面で検出された楕円形に近い遺構である。遺物は土器の小片と軽石がそれぞれ2点出土しているが、土器は時期的特徴がないため遺構の時期は不明である。

#### (2) 土坑 (SC3～6 第75・77図)

##### 3号土坑 (SC3)

F11GrとG11Grにかけて位置している。Ⅳ層上面で検出され、平面形状は長軸約82cm、短軸約73cmのほぼ円形プランを呈し、深さは最深部で約14cmを図る。埋土は1層のみでⅢ層の黒色土で構成されている。遺物は、出土しておらず時期不明である。

##### 4号土坑 (SC4)

C区の北東壁際のH25Grに位置している。検出面はⅥ層で、平面形状は長軸約1.08m、短軸は調査区の壁際で確認できた範囲で約68cmのほぼ不整形プランを呈し、深さは最深部で約28cmを図る。埋土は1層のみでⅥ層と推測される黒色土で構成されている。遺物は、出土しておらず時期不明である。

##### 5号土坑 (SC5)

E10Grに位置している。検出面はⅥ層で、平面形状は径約68cmのほぼ円形プランを呈し、深さは最深部で約17cmを図る。遺構の壁面及び床面ともⅥ層である。埋土は1層でⅤb層と推測されるが、わずかに明褐色土(Ⅳ層)や御池軽石のブロック(Ⅵ層)、鬼界アカホヤ火山灰層(Ⅶ層)を含む。床面からやや浮いた位置で土器の小片が出土しているが、特徴がなく時期不明である。

##### 6号土坑 (SC6)

G23Gr・H23Grに位置している。検出面はⅤb層で、平面形状は長軸約1.28m、短軸約97cmの不整形プランを呈し、深さは最深部で約30cmを図る。埋土は1層でⅤa層と推測される。遺物は出土せず時期不明である。

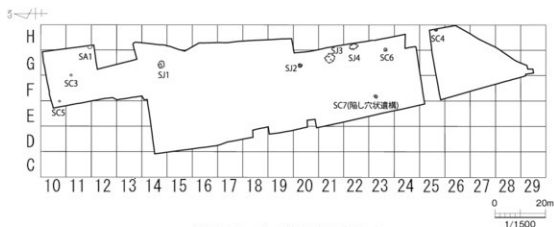
#### (3) 環状ビット列 (SJ1～SJ4 第75・77・78図)

ビット(小柱穴)は、B-6・B-7区のⅦ層上面で集中して見られた。このビット群中に、ある一定の間隔で円形や楕円形に巡るビット列が認められた。ビットは、検出面から鉛直方向に掘削されており、ビット列中心に向けて斜めに掘り込まれたものはない。また、ビットの覆土はⅦ層と推測される黒色土やⅤa層と推測されるバミスを含む黒色土である。ビット列の時期は、ビット内に遺物が出土しなかったため詳細な時期比定は困難であるが、埋土が縄文時代後・晩期の包含層と同じ御池軽石を含む黒色土であることから、この時期の遺構と考えられる。こうした円形や楕円形に巡るビット列を積極的に評価すれば、平地のままに構築された建物跡と考えることも可能である(平地式建物跡)。しかし、円形や楕円形に巡る柱穴列は、堅穴建物跡の床面や建物掘り込み外縁に存在する小柱穴のあり方、建物床面がⅦ層(K-Ah)を床面とする場合もあることなどから、本来は堅穴部の掘り込みが浅い、あるいは壁体が消失・削平された堅穴建物跡に伴うビットであった可能性も否定できない。また、検出面は第Ⅶ層(K-Ah層)上面のため、既に当時の生活面を失っている状況であった。そのため、炉跡や各施設等の有無も不明で

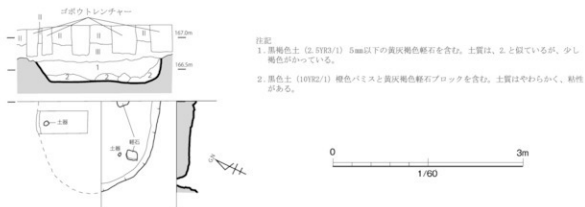
ある。上記の状況から、ピット列が掘り込みなしに平地のまま構築されたものかどうか、すなわち「平地式建物跡」と見極めるのは困難であった。本報告にあたり、未だ検討の余地があるにせよ、ピットが一定の間隔で円形や楕円形に巡る以外に、有機的な関連性や結びつきは認められなかった場合のみ、何らかの建物跡という意味づけにおいて「環状ピット列」として認定した。環状ピット列は4基検出したが、その構成は、単独でG14Grで1基、残りの3基はG・Hの20Gr・21Gr付近ではまっすぐ並ぶように分布する。平面形は円形及び楕円形である。平面積は小さいものから約1.8㎡、5.2㎡、5.3㎡、9.0㎡と多岐に及ぶ。ピット列は、10基前後で構成されていたと考えられる。また、環状ピット列のうち3基には平面中央にピットや土坑を有するものが見られる。平面プランは円形や楕円形、不整形で直径は25cm～50cm、深さ27cm～32cmを測る。

#### (4) 陥し穴状遺構 (SC7 第79図)

第1次調査区のF23Grに位置し、床面に12箇所もの杭痕と思われる小穴が確認された陥し穴状遺構が1基検出された。検出面での平面プランは楕円形を呈している。その規模は、長軸1.5m、短軸1.1mである。XⅠ層上面での検出であったが、埋土の一部にX層が含まれるため、X層中から掘り込まれたと推測される。そのため、検出面から床面までの深さは約1.46mであるが、本来の深さは1.5m以上であったと推測される。非常に硬質のXⅦ層(AT層 凝灰岩質シラス)を掘り抜いているため、計画的に必要な深さを掘削したと推測される。遺構の埋土は、主にX層源の黒褐色土、XⅢ層からXⅣ層源の暗褐色土などで構成されており、全部で11層に分けられる。遺物は出土しなかった。

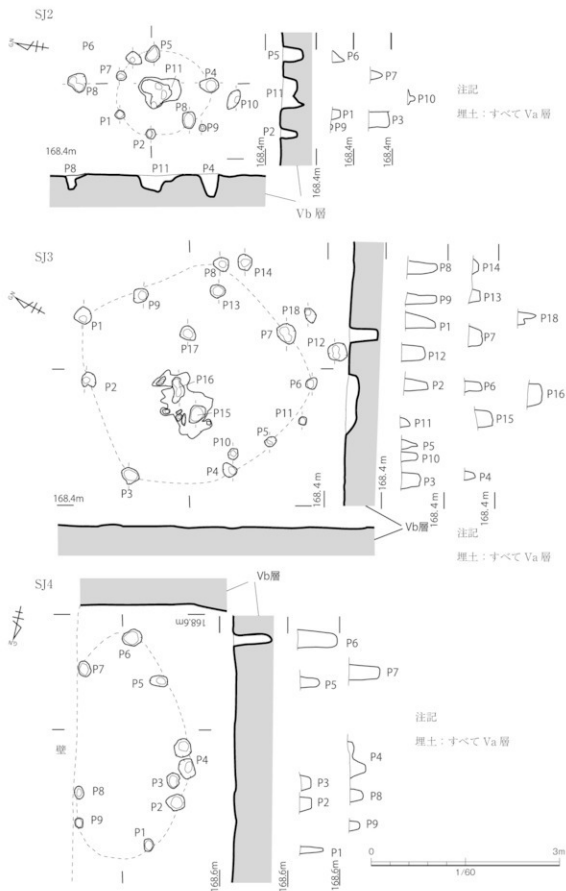


第75図 その他の遺構分布図

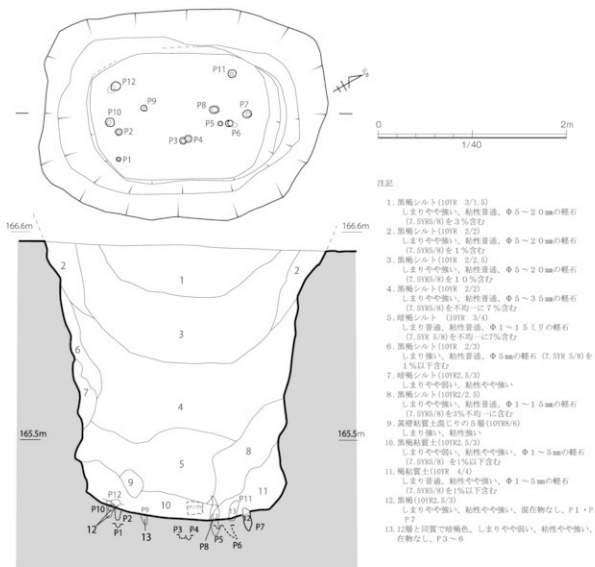


第76図 SA1実測図





第 78 図 SJ2 ~ SJ4 実測図



第79図 陥し穴状遺構 (SC7) 実測図

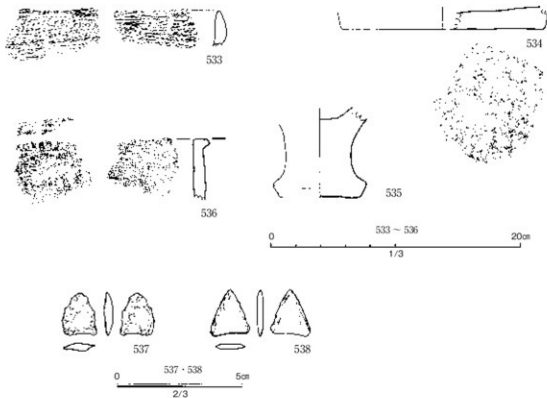
## 2 その他の遺物

### (1) 土器・土師器 (第80図533~536)

その他の時期不明な土器などを4点図化した。533・534は縄文時代早期の深鉢形土器と考えられるが、縄文時代後期以降の包含層であるVa層から出土したため、その他の遺物として扱った。533は胴部で、534は底部である。535は弥生時代の甕だと考えられるが、弥生時代の遺物が他に出土していないため、その他の遺物として扱った。536は土師器の甕で弥生時代の遺物の可能性がある。

### (2) 石器 (第80図537・538)

時期不明な石鎌を2点図化した。537はE17Grの攪乱土(ゴボウトレンチャー)から出土した打製石鎌で、比較的丸みを帯びた形状の平基鎌である。538はD17Grの攪乱土(ゴボウトレンチャー)から出土した磨製石鎌で、両面とも扁平な形状を呈し、研磨痕が見られる。ともに大きさや他の遺物との比較から縄文時代の遺物と思われる。



第 80 図 その他の遺物実測図

第 9 表 遺物観察表(その他)

掲載番号	実測番号	器種	部位	出土地点			色調		粘土の特徴	備考	
				区・Gr	層	外面	内面	外面			内面
533	5	深鉢	口縁部	G10-H19	Va	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色10YR7/3 暗灰10YR4/1	にぶい黄褐色10YR6/4	2mm以下の白色粒、光沢粒をわずかに含む	
534	8	深鉢	底部	G10	Va	ナデ、ヘラ切	ナデ	浅黄2.5Y7/4	浅黄2.5Y7/3	2mm以下の角閃石を少量、微細な透明光沢粒、灰白色粒をわずかに含む	
535	390	甕	底部	D15	B	ナデ、糸切	ナデ	にぶい暗7.5YR5/4 明赤褐5YR5/6	暗灰7.5YR4/1 暗7.5YR4/3	1~2mm以下の灰色粒、褐色粒、白色粒を少量、微細な白色粒、金色粒、透明光沢粒を少量含む	
536	96	甕	口縁部	F23	攪乱	ナデか	ナデか	暗5YR6/6	暗5YR6/6	5mm以下の灰白色粒を中量含む	風化 後手時代か

第 10 表 遺物計測表(その他)

掲載番号	器種	石材	出土地点		長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	その他
			遺構・Gr	層位					
537	石鏃	チャート	E17	攪乱	17.0	13.7	3.8	0.8	
538	石鏃	安山岩	D17	攪乱	18.4	15.8	2.3	0.7	

## 第IV章 自然科学分析の成果

株式会社 古環境研究所

### I. 自然科学分析の概要

遺構や包含層から採取した炭化物や種実等について自然科学分析を行った。分析内容は、放射性炭素年代測定3点 (No.1～No.3)、種実同定1式 (No.4～No.7)、テフラ (火山灰) 分析1点 (No.8)、蛍光X線分析5点 (No.9～No.13) である。以下に、分析ごとに原理、試料の詳細、分析方法、結果および考察を記載する。

### II. 放射性炭素年代測定

#### 1. はじめに

放射性炭素年代測定は、光合成や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素 ( $^{14}\text{C}$ ) の濃度が、放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。樹木や種実などの植物遺体、骨、貝殻、土壌、土器付着炭化物などが測定対象となり、約5万年前までの年代測定が可能である (中村 2003)。

#### 2. 試料と方法 (第11表)

次に、測定試料の詳細と前処理・調整法および測定法を示す。

第11表 放射性炭素年代測定の資料と方法

試料No	試料の詳細	種類	前処理・調整法	測定法
No.1	SI7. 集石遺構	炭化物	超音波洗浄, 酸-アルカリ-酸処理	AMS
No.2	SI8. 集石遺構	炭化物	超音波洗浄, 酸-アルカリ-酸処理	AMS
No.3	SI9. 集石遺構	炭化物	超音波洗浄, 酸-アルカリ-酸処理	AMS

#### 3. 測定結果 (第12表)

加速器質量分析法 (AMS: Accelerator Mass Spectrometry) によって得られた  $^{14}\text{C}$  濃度について同位体分別効果の補正を行い、放射性炭素 ( $^{14}\text{C}$ ) 年代および暦年代 (較正年代) を算出した。次にこれらの結果を示し、第81図に暦年較正結果 (較正曲線) を示す。

第12表 放射性炭素年代測定の結果

試料No	測定No (PED)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	$^{14}\text{C}$ 年代: 年 BP (暦年較正用)	暦年代 (較正年代): cal-	
				1 $\sigma$ (68.2% 確率)	2 $\sigma$ (95.4% 確率)
No.1	29480	-27.53 $\pm$ 0.14	8585 $\pm$ 30 (8583 $\pm$ 30)	BC 7601-7581(68.2%)	BC 7647-7622(3.2%) BC 7614-7549(92.2%)
No.2	29481	-27.65 $\pm$ 0.15	8535 $\pm$ 30 (8535 $\pm$ 30)	BC 7590-7553(68.2%)	BC 7596-7537(95.4%)
No.3	29482	-27.60 $\pm$ 0.14	8585 $\pm$ 30 (8586 $\pm$ 31)	BC 7601-7581(68.2%)	BC 7649-7551(95.4%)

BP: Before Physics (Present), calibrated; BC: 紀元前

#### 1) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定  $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$  比を補正するための炭素安定同位体比 ( $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ )。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (‰) で表す。試料の  $\delta^{13}\text{C}$  値を  $-25$  (‰) に標準化することで同位体分別効果を補正している。

## (2) 放射性炭素 ( $^{14}\text{C}$ ) 年代測定値

試料の  $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$  比から、現在 (AD1950 年基点) から何年前かを計算した値。 $^{14}\text{C}$  の半減期は 5730 年であるが、国際的慣例により Libby の 5568 年を用いている。統計誤差 ( $\pm$ ) は  $1\sigma$  (68.2% 確率) である。 $^{14}\text{C}$  年代値は下 1 桁を丸めて表記するのが慣例であるが、暦年較正曲線が更新された場合のために下 1 桁を丸めない暦年較正用年代値も併記した。

## (3) 暦年代 (Calendar Years)

過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中  $^{14}\text{C}$  濃度の変動および  $^{14}\text{C}$  の半減期の違いを較正することで、放射性炭素 ( $^{14}\text{C}$ ) 年代をより実際の年代値に近づけることができる。暦年代較正には、年代既知の樹木年輪の詳細な  $^{14}\text{C}$  測定値およびサンゴの U/Th (ウラン/トリウム) 年代と  $^{14}\text{C}$  年代の比較により作成された較正曲線を使用した。較正曲線のデータは IntCal 13、較正プログラムは OxCal 4.2 である。

暦年代 (較正年代) は、 $^{14}\text{C}$  年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅で表し、OxCal の確率法により  $1\sigma$  (68.2% 確率) と  $2\sigma$  (95.4% 確率) で示した。較正曲線が不安定な年代では、複数の  $1\sigma$ ・ $2\sigma$  値が表記される場合もある。( ) 内の % 表示は、その範囲内に暦年代が入る確率を示す。グラフ中の縦軸上の曲線は 14 C 年代の確率分布、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

## 4. 所見

加速器質量分析法 (AMS) による放射性炭素年代測定の結果、 $\text{Na} 1$  の炭化物では  $8585 \pm 30$  年 BP ( $2\sigma$  の暦年代で BC 7647 ~ 7622, 7614 ~ 7549 年)、 $\text{Na} 2$  の炭化物では  $8535 \pm 30$  年 BP (BC 7596 ~ 7537)、 $\text{Na} 3$  の炭化物では  $8585 \pm 30$  年 BP (BC 7649 ~ 7551) の年代値が得られた。

## 文献

中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎。日本先史時代の  $^{14}\text{C}$  年代編集委員会編「日本先史時代の 14C 年代」。日本第四紀学会。p.3-20.

中村俊夫 (2003) 放射性炭素年代測定法と暦年代較正。環境考古学マニュアル。同成社。p.301-322.

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51 (1), 337-360.

Paula J Reimer et al. (2013) IntCal 13 and Marine 13 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55, p.1869-1887.

## Ⅲ. 種実同定

### 1. はじめに

植物の種子や果実は比較的強韌なものが多く、堆積物や遺構内などに残存している場合がある。堆積物や遺構埋土などから種実を検出し、その種類や構成を調べることで、過去の植生や植物利用の実態を明らかにすることができる。

### 2. 試料

試料は、縄文時代後期～晩期の土坑や土層から採取された  $\text{Na} 4 \sim \text{Na} 7$  の炭化種実類である。試料の詳細を分析結果表に示す。

### 3. 方法

種実類について肉眼および双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行った。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。



#### 4. 結果

##### (1) 分類群

分析結果を第13表に示す。以下に同定根拠となる形態的特徴を記載し、主要な分類群について写真を示す。

##### [樹木]

イチイガシ *Quercus gilva* Blume 炭化子葉 (半形) ブナ科 (12.09 × 9.13mm, 12.52 × 10.21mm)

炭化していて黒色で、楕円形を呈する。表面はなめらかで、縦方向に一条の凹線が入る。

コナラ属 *Quercus* 炭化子葉 (破片) ブナ科

黒褐色で楕円形を呈し、一端につき部が残る。表面は平滑である。殻斗が欠落していることから、属レベルの同定までであるが、イチイガシの可能性が考えられる。

##### [草本]

オヒシバ *Eleusine indica* Gaertn. イネ科 (1.32 × 0.65mm, 1.30 × 0.72mm)

黒色で楕円形を呈す。表面には波状の模様がある。

イネ科 Gramineae 炭化果実 (1.38 × 1.39mm)

炭化した果実で、楕円形を呈す。

カヤツリグサ科 Cyperaceae (1.11 × 0.52mm)

茶褐色で倒卵形を呈す。断面は三角形である。

アカザ属・ヒユ属 *Chenopodium-Amaranthus* アカザ科・ヒユ科 (1.05 × 0.99mm, 1.05 × 0.97mm)

黒色で光沢がある。円形を呈する。ヘソ部分が欠けているためハイフン ( - ) で結んで示した。

##### (2) 種実群集の特徴

###### 1) No 4 : Va 層・D15

樹木種実のイチイガシ (半形) 2 が認められた。

###### 2) No 5 : Va 層・G14

樹木種実のコナラ属 (破片) 1 が認められた。イチイガシの可能性が考えられる。

###### 3) No 6 : Vb 層・E15

樹木種実のイチイガシ (半形) 1 が認められた。

###### 4) No 7 : SC1 埋土

草本種実のアカザ属・ヒユ属 6、オヒシバ 3、イネ科果実 1、カヤツリグサ科 1 が認められた。

##### 5. 種実同定から推定される植生と環境

種実同定の結果、No 4 (Va 層) と No 6 (Vb 層) では樹木種実のイチイガシが認められ、No 5 (Va 層) でもコナラ属 (イチイガシ?) が認められた。イチイガシは西南日本に分布する照葉樹林を構成する主要高木であり、果実はカシ類の中では渋抜きなしに食べられる唯一の種類である。

No 7 (SC1 埋土) では、草本種実のアカザ属・ヒユ属、オヒシバ、イネ科果実などが認められた。これらは、人里植物ないし畑雑草であり、日当たりの良い乾燥地に生育する。

##### 文献

笠原安夫 (1985) 日本雑草図説。養賢堂。494p.

笠原安夫 (1988) 作物および田畑雑草種類。弥生文化の研究第2巻生業。雄山閣出版。p.131-139.

南木隆彦 (1993) 葉・果実・種子。日本第四紀学会編 第四紀試料分析法。東京大学出版会。p.276-283.

渡辺誠 (1975) 縄文時代の植物食, 雄山閣, 187p.

#### IV. テフラ分析

##### 1. はじめに

火山灰(テフラ)層の岩石学的諸特性(重軽鉱物組成、火山ガラスの形態分類、火山ガラスの屈折率)を明らかにすることにより、指標テフラとの対比を試みた。なお、火山灰の岩石学的諸特性や年代については新編火山灰アトラス(町田・新井, 2003)を参照した。

##### 2. 試料

分析試料は、陥し穴状遺構(SC7)の底部付近から採取された埋土(No8)である。

##### 3. 方法

試料に水を加えて超音波洗浄装置により分散した後、250メッシュ分析篩を用いて水洗し、粒径1/16mm以下の粒子を除去した。乾燥の後、篩別して得られた粒径1/4mm~1/8mmの砂分を重液分離し、重鉱物250粒について偏光顕微鏡下でカウントした。また、軽鉱物250粒について、火山ガラス(バブル型・中間型・軽石型に形態分類)、石英、長石、その他の量比を求めた。火山ガラスと斜方輝石の屈折率は、温度変化型屈折率測定装置(古澤地質社製, MAIOT2000)を用いて測定した。

##### 4. 結果

###### (1) 重軽鉱物組成(第14表、第82図)

重鉱物組成では、斜方輝石が全体の53%と最も多く、不透明鉱物が33%、単斜輝石が12%などとなっている。火山ガラス比では、軽石型火山ガラスが少量検出され、中間型とバブル型もわずかに認められた。

###### (2) 火山ガラスの屈折率測定(第83図)

火山ガラスの屈折率は、 $n_{1.498-1.513}$ の広いレンジを示し、 $n_{1.498-1.500}$ 、 $n_{1.502-1.508}$ 、 $n_{1.512-1.513}$ の3つのレンジが認められた。斜方輝石の屈折率は、 $\gamma_{1.706-1.712}$ のレンジを示し、モードは $\gamma_{1.708-1.710}$ である。

##### 5. 考察

火山灰(テフラ)の岩石学的諸特性(鉱物組成、火山ガラスの形態、火山ガラスと斜方輝石の屈折率)から、指標テフラとの対比を行った。

陥し穴状遺構(SC7)の底部付近から採取された埋土(No8)では、火山ガラスが少量検出されたが、屈折率測定結果では3つのレンジが認められることから、少なくとも3つのテフラが混在している可能性が考えられる。このうち、屈折率が低いテフラは始良 Tn 火山灰(AT, 約29万年前)、高いテフラは桜島薩摩テフラ(SzS: 約12800年前)、中間のテフラはおもに鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah: 約7300年前)に由来すると考えられる。斜方輝石については、屈折率のレンジからK-AhおよびSzSに由来すると考えられる。文献

古澤明(1995)火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別。地質学雑誌, 101, p.123-133.

町田洋・新井房夫(1976)広域に分布する火山灰-始良 Tn 火山灰の発見とその意義。科学, 46, p.339-347.

町田洋・新井房夫(1978)南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ-アカホヤ火山灰。第四紀研究, 17, p.143-163.

町田洋・新井房夫(2003)新編火山灰アトラス-日本列島とその周辺-。東京大学出版会, p.58-63.

## V. 蛍光X線分析

### 1. はじめに

物質にX線を照射すると、その物質を構成している元素に固有のエネルギー（蛍光X線）が放出され、この蛍光X線を分光して波長と強度を測定することで、物質に含まれる元素の種類や量を調べることができる。この方法を用いて、考古学分野では朱やベンガラなどの顔料分析、金属製品の材質分析、リン-カルシウム分析などが行われている。また、指標となる特定の元素の検出パターンと比較から、須恵器の生産地推定や黒曜石の産地推定なども行われている。

### 2. 試料

分析試料は、G22 グリッド Va 層から採取された礫の赤色部 (No 9)、F14 グリッド Va 層から採取された礫の赤色部 (No 10)、Va 層から採取された土器の赤色部 (No 11) と白色部 (No 12)、F14 グリッド Va 層から採取された土器の白色部 (No 13) の計 5 点である。このうち、土器試料の No 11 ~ No 13 については、粘着テープで微量を採取して測定を行った。これらの試料については、定量分析結果の数値は必ずしも正確なものとはいえない。なお、各試料とも比較部分についても測定して比較検討を行った。

### 3. 分析方法

エネルギー分散型蛍光X線分析装置（日本電子株式会社製、JSX3100R II）を用いて、元素の同定およびファンダメンタルパラメータ法（FP法）による定量分析を行った。測定の条件は、測定時間 240 秒、照射径 3.0mm、電圧 30kV、試料室内真空である。なお、定期的に地質標準試料（JGI）を測定して精度の検証を行った。

定量分析は、ナトリウム (Na)、マグネシウム (Mg)、アルミニウム (Al)、ケイ素 (Si)、リン (P)、イオウ (S)、カリウム (K)、カルシウム (Ca)、チタン (Ti)、バナジウム (V)、マンガン (Mn)、鉄 (Fe)、ニッケル (Ni)、亜鉛 (Zn) の 14 元素を対象とした。

### 4. 分析結果

第 15 表に各元素の定量分析結果 (wt%) を示し、第 84 図に主な元素の検出状況を示した。なお、測定結果は慣例により代表的な酸化物名で表記している。

### 5. 考察

#### (1) 礫の赤色部 (No 9、No 10)

赤色顔料としては、一般的に水銀朱（硫化水銀： $\text{HgS}$ ）、ベンガラ（酸化第二鉄： $\text{Fe}_2\text{O}_3$ ）、鉛丹（酸化鉛： $\text{Pb}_3\text{O}_4$ ）が知られている（市毛、1998、本田、1995）。蛍光X線分析では、水銀 (Hg)・イオウ (S)、鉄 (Fe)、鉛 (Pb) の元素の検出状況から赤色顔料の種類を推定することが可能である。

分析の結果、礫の赤色部 (No 9、No 10) では鉄 (Fe) の明瞭なピークが認められ、水銀 (Hg) や鉛 (Pb) は検出されなかった。鉄 ( $\text{Fe}_2\text{O}_3$ ) の含量は、No 9 の赤色部では 16.2% であり、比較部分の 5.3% と比較して 3.1 倍と明らかに高い値である。また、No 10 の赤色部では 21.7% であり、比較部分の 5.8% と比較して 3.7 倍と明らかに高い値である。

以上の結果から、礫の赤色部 (No 9、No 10) が顔料に由来するならばベンガラと考えられる。なお、地下水中などの鉄分が沈着した褐鉄鉱も同様の成分で構成されていることから、ベンガラのより確実な同定のためにはX線回折による結晶構造の解析が必要である。ベンガラの顕微鏡観察では、鉄細菌の生産物に由来するパイプ状粒子（岡田、1997、大久保、2000）が認められることがあるが、今回の試料では確認されなかった。

## (2) 土器の赤色部 (No 11)

分析の結果、土器の赤色部 (No 11) では鉄 (Fe) の明瞭なピークが認められ、水銀 (Hg) や鉛 (Pb) は検出されなかった。鉄 ( $\text{Fe}_2\text{O}_3$ ) の含量は 10.9% であり、比較部分の 6.6% と比較して 1.7 倍と明らかに高い値である。

以上の結果から、土器の赤色部 (No 11) が顔料に由来するならばベンガラと考えられるが、前述のようにベンガラのより確実な同定のためには X 線回折による結晶構造の解析が必要である。なお、顕微鏡観察ではパイプ状粒子は確認されなかった。

## (3) 土器の白色部 (No 12, No 13)

分析の結果、土器の白色部 (No 13) では珪酸 ( $\text{SiO}_2$ ) の含量が 49.5%、アルミニウム ( $\text{Al}_2\text{O}_3$ ) が 40.4%、マグネシウム (MgO) が 3.3%、鉄 ( $\text{Fe}_2\text{O}_3$ ) が 1.4%、カルシウム (CaO) が 1.4% など、No 13 の比較部分では珪酸が 50.0%、アルミニウムが 29.6%、鉄が 12.0%、カルシウムが 1.4%、マグネシウムが 1.3% などであり、白色部の方がアルミニウムの含量が 1.4 倍、マグネシウムの含量が 2.5 倍と明らかに高い値となっている。No 12 の白色部については、試料がかなり微量なため、No 13 のような明瞭な結果は得られなかった。

以上の結果から、土器の白色部 (No 13) は、主成分が珪酸およびアルミニウムであり、マグネシウムなども含まれていると考えられる。このような元素組成で白色系の物質としては、粘土鉱物の陶土 (カオリナイト) などが知られているが、マグネシウムについては土壤中に含まれる成分が結晶化して附着した可能性も考えられる。No 12 の白色部についても、No 13 と同様の可能性が考えられる。

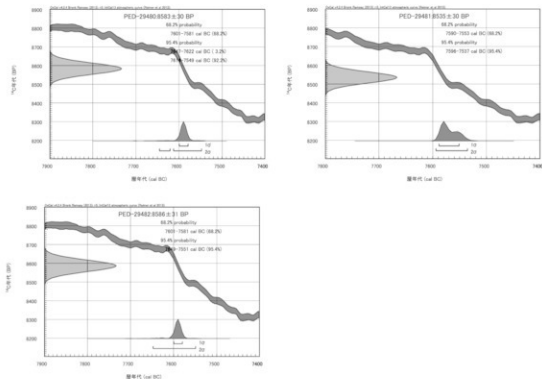
## 文献

市毛 勲 (1998) 新版朱の考古学. 考古学選書. 雄山閣出版

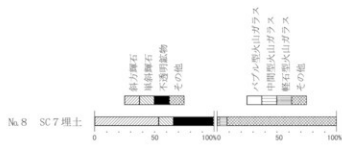
大久保浩二 (2000) 鹿児島県出土の赤色顔料 - 日本最古の赤彩土器をはじめとして. 人類学研究 12, p.163-169.

岡田文男 (1997) パイプ状ベンガラ粒子の復元. 日本文化材科学会研究発表要旨集, 14, p.38-39.

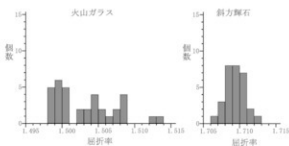
本田光子 (1995) 古墳時代の赤色顔料. 考古学と自然科学, 31-32, p.63-79.



第 81 図 暦年校正結果



第 82 図 重軽鉱物組成



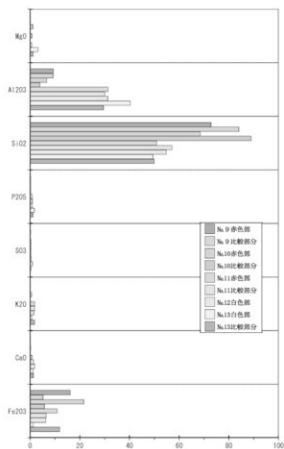
第 83 図 屈折率測定結果

第 13 表 炭化種実同定結果

試料番号	層位	グリッド	遺構名	分類群		部位	個数	備考
				学名	和名			
4	Va層	D15		<i>Quercus gilva</i> Blume	イナイガシ	子葉(半形)	2	同一個体
5	Va層	G14		<i>Quercus</i>	コナラ属	子葉(破片)	1	
6	Vb層	E15		<i>Quercus gilva</i> Blume	イナイガシ	子葉(半形)	1	
7	埋層	E20	SC1埋土	<i>Elaeagnus indica</i> Gaertn.	オヒシバ	種子	3	
				Gramineae	イネ科	果実	1	
				Cyperaceae	カヤツリグサ科	果実(破片)	1	
				<i>Chenopodium-Amaranthus</i>	アカザ属・ヒユ属	種子	6	
				Charred material	炭化物	(破片)	2	

第 14 表 テフラ分析結果

試料		№ 8
遺構		SC 7埋土
重鉱物	斜方輝石	8
	単斜輝石	134
	角閃石	31
	不透明鉱物	83
	その他	2
合計		250
軽鉱物	パブル型火山ガラス	1
	中間型火山ガラス	4
	瓶石型火山ガラス	16
	その他	229
合計		250



第 84 図 蛍光 X 線分析結果 (主な元素 :wt%)

## 第 15 表 蛍光 X 線分析結果

単位：wt (%)

原子No	化学式	No 9		No 10		No 11		No 12	No 13	
		赤色部	比較部分	赤色部	比較部分	赤色部	比較部分	白色部	白色部	比較部分
11	Na <sub>2</sub> O	0.276	0.381	0.000	0.000	0.148	0.000	0.289	0.000	0.450
12	MgO	0.142	0.196	1.188	0.161	0.843	0.000	0.730	3.254	1.285
13	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	9.443	9.297	6.757	4.050	31.427	30.964	31.361	40.375	29.636
14	SiO <sub>2</sub>	72.917	84.077	68.542	89.050	50.995	57.182	54.859	49.518	50.011
15	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	0.231	0.255	0.231	0.264	0.877	0.990	0.951	1.812	1.190
16	SO <sub>2</sub>	0.268	0.196	0.279	0.386	0.284	0.349	0.530	1.011	0.339
19	K <sub>2</sub> O	0.135	0.141	0.704	0.056	1.942	1.898	1.576	0.729	1.886
20	CaO	0.083	0.065	0.244	0.077	0.837	1.536	1.873	1.363	1.429
22	TiO <sub>2</sub>	0.103	0.087	0.065	0.045	1.344	1.174	1.175	0.359	1.323
23	V <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	0.038	0.000	0.079	0.041	0.036	0.025	0.059	0.000	0.055
25	MnO	0.105	0.032	0.173	0.036	0.306	0.119	0.196	0.187	0.332
26	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	16.236	5.265	21.707	5.827	10.908	6.573	6.354	1.349	11.950
28	NiO	0.019	0.005	0.020	0.004	0.016	0.071	0.019	0.022	0.027
30	ZnO	0.005	0.004	0.011	0.003	0.037	0.018	0.027	0.022	0.087

### 中床丸遺跡の種実



1 イチイガシ炭化子実  
(No. 4)  
— 1.0mm



2 イチイガシ炭化子実  
(No. 4)  
— 1.0mm



3 オヒシバ果実  
(No. 7)  
— 0.5mm



4 オヒシバ果実  
(No. 7)  
— 0.5mm



5 イネ科果実  
(No. 7)  
— 0.5mm



6 カヤツリグサ科果実  
(No. 7)  
— 0.1mm



7 アカザ属-ヒユ属種子  
(No. 7)  
— 0.5mm



8 アカザ属-ヒユ属種子  
(No. 7)  
— 0.5mm

## 第V章 総括

中床丸遺跡は、調査の結果、旧石器時代、縄文時代早期・後期・晩期、古代～中世の遺跡であることが確認できた。特に、今回の調査範囲内では、堅穴建物跡等の遺構は検出できなかったが、本遺跡の最盛期は出土遺物量から縄文時代後期～晩期にあったと考えられる。また、縄文時代早期の集石遺構11基、後期～晩期の土器や石器を中心とした遺物量はコンテナ100箱以上にのぼり、都城市域で有数の縄文時代の遺跡となった。以下、それぞれの時代について簡単にまとめてみたい。

### 第1節 旧石器時代

中床丸遺跡では遺構は検出されなかったものの流紋岩製の剥片4点がXIV層から出土した。4点ともすべて通常石器には使用されない縞模様のある流紋岩である。宮崎県内における流紋岩の産地は大分県・宮崎県の県境にまたがる祖母・傾山系で、県北地域との文化の交流が考えられる。

### 第2節 縄文時代

縄文時代は早期・後期・晩期の遺構や遺物が検出された。

早期の遺構は、集石遺構が11基検出された。そのほとんどが遺跡中央を北東から南西方向に延びる尾根状の部分やC区のやや標高の高い平坦な部分で検出された。特に遺跡中央の東側部分に大きな散磔があり、その散磔中や周辺から5基の集石遺構が検出された。集石遺構の検出状況から構築に時期差が考えられたため、2基の集石遺構から出土した炭化物の放射性炭素年代測定を行った。しかし、2基ともほぼ同じ約8500年前前後の遺構であるという結果であった。散磔中から検出した残り3基の集石遺構からは炭化物が出土していないため時期の同定はできないが、縄文時代早期の土器の出土内容から判断すると、縄文時代早期の集石遺構に時期差があった可能性は考えられる。土器の出土量は極めて少ないが、早期前葉の「前平式土器」や中葉の「下剥斧式土器」、「桑ノ丸式土器」などが出土している。石器は打製石鏃がほとんどで、いわゆるトロトロ石器も出土している。このような状況から、当時、この一帯では狩猟などの場として小集団によるキャンプサイトの営みがあったことがうかがえる。

後期～晩期の遺構は、第1次調査で土坑1基を検出するにとどまった。それに反して遺物量は多く、最盛期の後期中葉の土器群は、九州を代表する土器型式として知られる市来式土器や草野式土器、丸尾式土器などと、鐘崎式土器や北久根山式土器などの磨消縄文鉢形土器で構成されている。特に、「市来式土器」や「草野式土器」の時期にピークがあり、宮崎県内でこれ程多量の「草野式土器」が出土した遺跡は珍しいと言える。また、南九州では鐘崎式の鉢形土器は市来式土器の深鉢に伴い、丸尾式土器の深鉢の頃には納管式あるいは辛川Ⅱ式が伴うとされる。中床丸遺跡では、北久根山式段階の鉢は出土しているが、同深鉢については見られない。この北久根山式の鉢とセットをなす深鉢は現状では市来式の深鉢と考えられる。

### 第3節 古代～中世

古代から中世の遺構は、遺跡の北西側で掘立柱建物跡1棟と土坑1基を、遺跡の北東側と南東側で溝状遺構9条検出した。特に、遺跡の北東側で検出した2条の溝状遺構（SE5・SE6）の埋土やその周辺からは土師器の甕や壺、坏、皿に加え、九州では出土量の極めて少ない土師器の鍋などの遺物も出土した。他にも白磁、青磁、陶器、染付なども少量出土した。特に、SE6の埋土の中位には焼土が硬化した部分が見られ、その付近から籾の羽口や鉄滓が出土したことから鍛冶関連施設が存在したと考えられる。

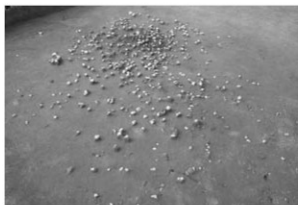
〔参考文献〕

- 文化庁 2010 『発掘調査のてびき－整理・報告書編』
- 熊本市教育委員会 1981 『上南部遺跡』 発掘調査報告書
- 鹿児島県埋蔵文化財センター 2007 『上水流遺跡1』 鹿児島県埋蔵文化財センター報告書第113集
- 田野町教育委員会 1990 『丸野第2遺跡』 田野町文化財調査報告書第11集
- 都城市教育委員会 1991 『大岩田村ノ前遺跡』 都城市文化財報告書第14集
- 都城市教育委員会 1994 『黒土遺跡』 都城市文化財調査報告書第28集
- 都城市教育委員会 2000 『横市地区道跡群』 都城市文化財調査報告書第50集
- 都城市教育委員会 2004 『馬渡遺跡』 都城市文化財調査報告書第62集
- 都城市教育委員会 2006 『坂元A遺跡 坂元B遺跡』 都城市文化財調査報告書第71集
- 都城市教育委員会 2006 『星原遺跡』 都城市文化財調査報告書第72集
- 桑畑光博 1989 『東南部九州におけるある縄文土器の形式組列』
- 堂込秀人 1997 『鹿児島考古』  
『南九州縄文晩期土器の再検討－入佐式と黒川式の細分－』 第31号
- 前迫亮一 1992 『南九州縄文通信 No.6』  
『異系統土器文化の一接点』  
－ 南九州における縄文時代後期中葉の一様相：丸尾式土器の提唱 －
- 藤尾慎一郎 1993 『鹿児島考古』 『南九州の突帯文土器』 第27号
- 国立歴史民俗博物館 1997 国立歴史民俗博物館研究報告第71集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2001 『梅北佐土原遺跡』 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第42集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2001 『王子原遺跡』 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第45集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2006 『下耳切第3遺跡』 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第125集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2008 『筆無遺跡』 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第166集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2008 『諸友遺跡』 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第168集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2011 『梅北針谷遺跡』 宮崎県埋蔵文化財発掘調査報告書第204集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2011 『勝女木遺跡』 宮崎県埋蔵文化財発掘調査報告書第205集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2012 『平峰遺跡』 宮崎県埋蔵文化財発掘調査報告書第211集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2014 『駄小屋遺跡』 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第233集





調査区全景



SI1 上面の散礫 (南東から)



SI1 検出状況 (南から)



SI2 検出状況 (東から)



SI3 検出状況 (南から)



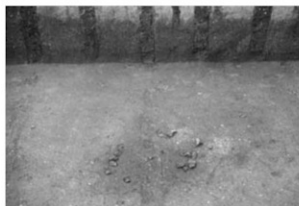
SI4 検出状況 (南から)



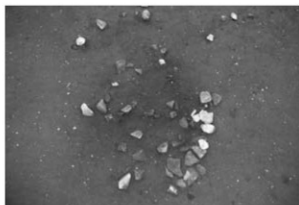
SI5 検出状況 (北から)



SI6 検出状況 (北西から)



SI7 検出状況 (東から)



SI8、SI11 検出状況（南から）



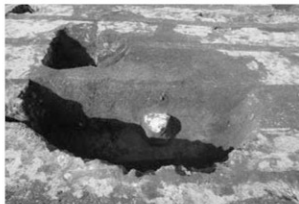
SI9 検出状況（東から）



SI10 検出状況（北から）



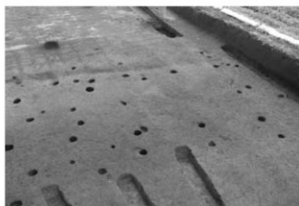
1号焼土跡完掘状況（西から）



SC1 半截状況（南から）



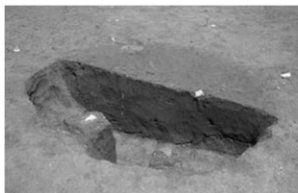
SC1 完掘状況（南から）



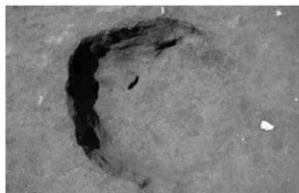
SB1 完掘状況（北から）



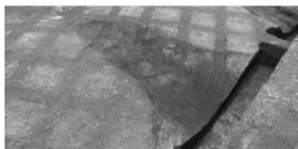
SC2 検出状況（東から）



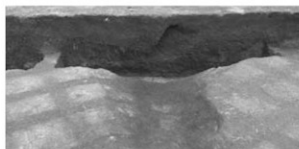
SC2 半截状況 (南から)



SC2 完掘状況 (北から)



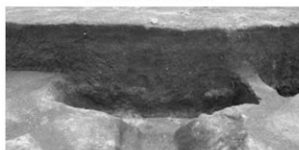
SE1 完掘状況 (南から)



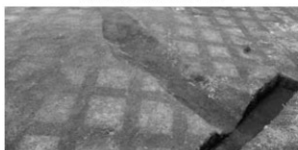
SE1 断面図 (西から)



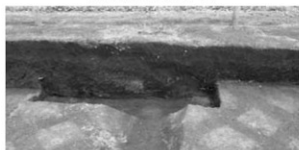
SE2 完掘状況 (南から)



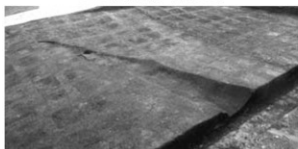
SE2 断面図 (西から)



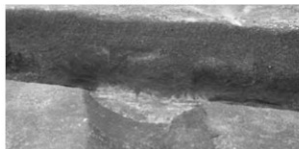
SE3 完掘状況 (南から)



SE3 断面図 (西から)



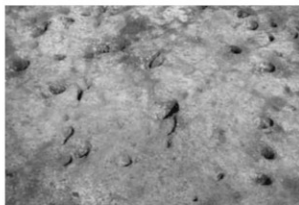
SE4 完掘状況 (東から)



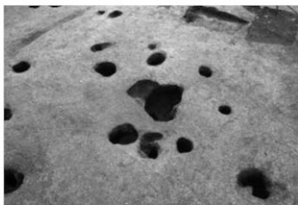
SE4 断面図 (西から)



SE5～8完掘・SE9検出状況（左が北）



SJ1完掘状況（西から）



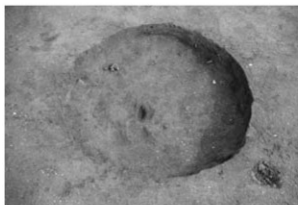
SJ2完掘状況（北から）



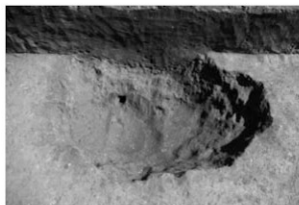
SJ3完掘状況（北から）



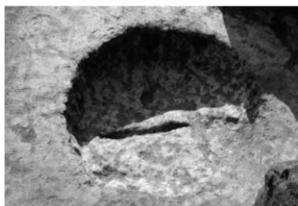
SJ4完掘状況（北から）



SC3 完掘状況 (南から)



SC4 完掘状況 (西から)



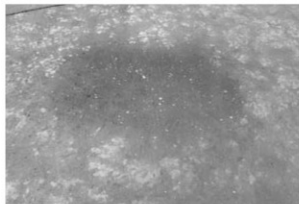
SC5 完掘状況 (北から)



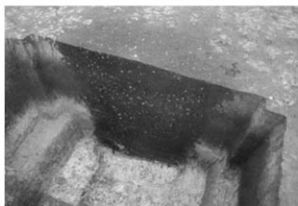
SC6 半掘状況 (北から)



竪穴状遺構完掘状況 (西から)



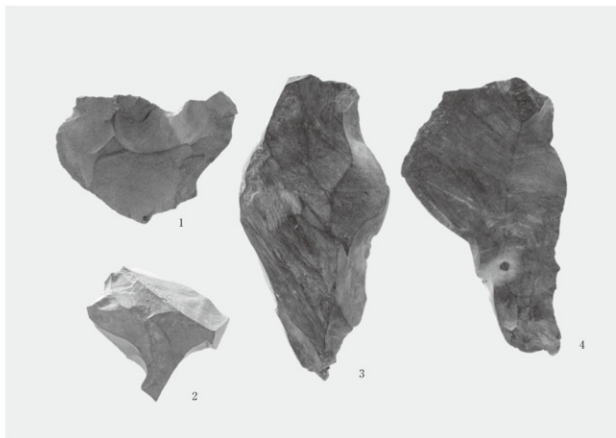
陥し穴状遺構検出状況 (南から)



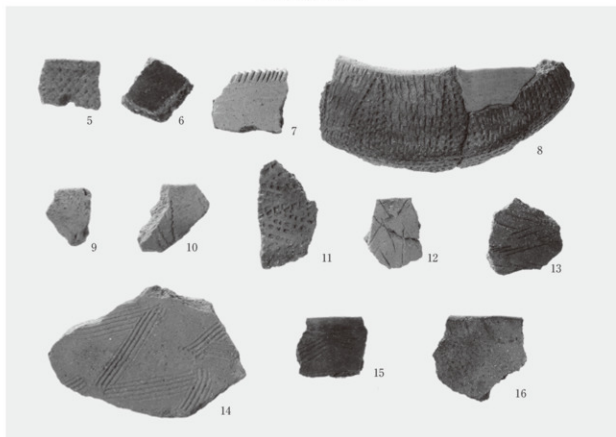
陥し穴状遺構半掘状況 (南から)



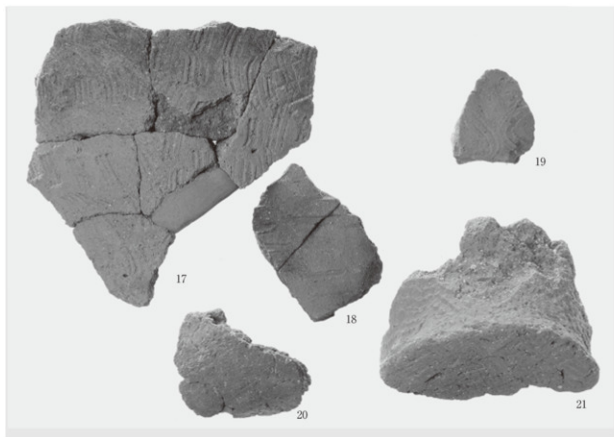
陥し穴状遺構小杭状痕跡半掘状況 (南から)



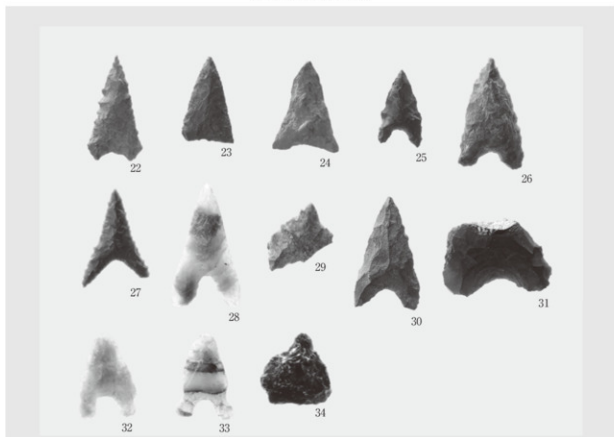
旧石器時代の遺物



縄文土器①(早期)



縄文土器②（早期）

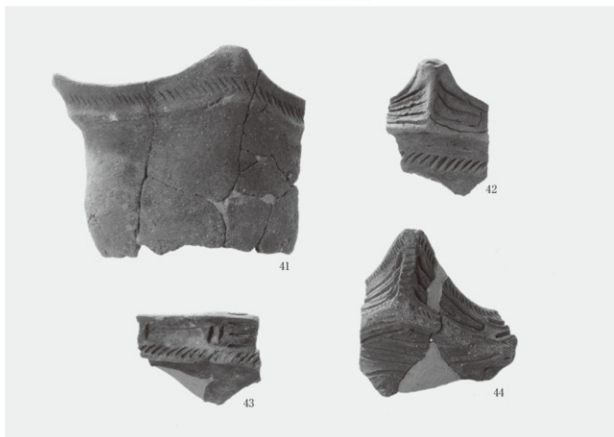


石器①（縄文時代早期）

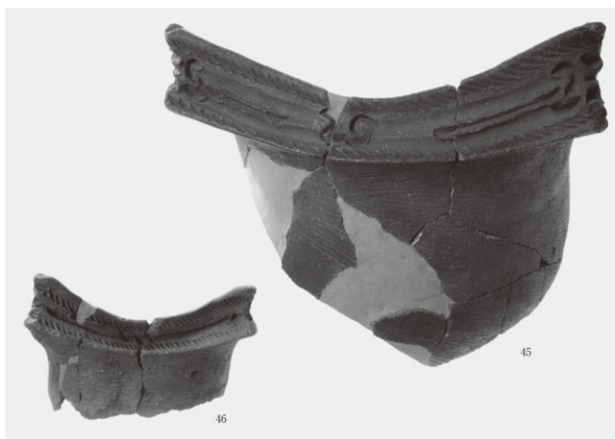




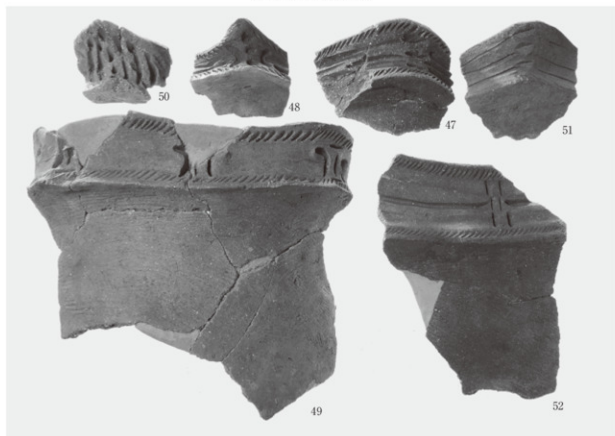
縄文土器③ (後期)



縄文土器④ (後期)



縄文土器⑤（後期）



縄文土器⑥（後期）



縄文土器⑦(後期)



縄文土器⑧(後期)



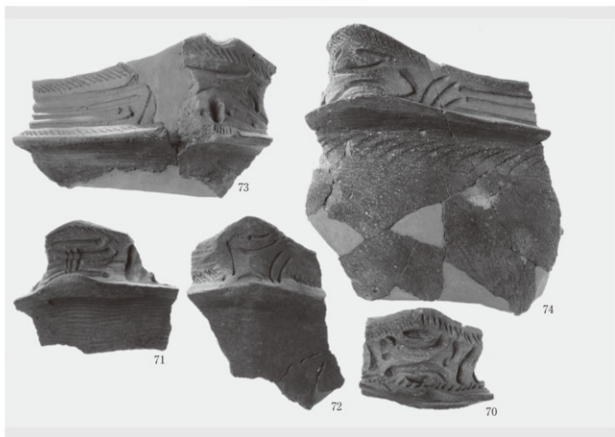
縄文土器⑨ (後期)



縄文土器⑩ (後期)



縄文土器①(後期)



縄文土器②(後期)



縄文土器⑬（後期）



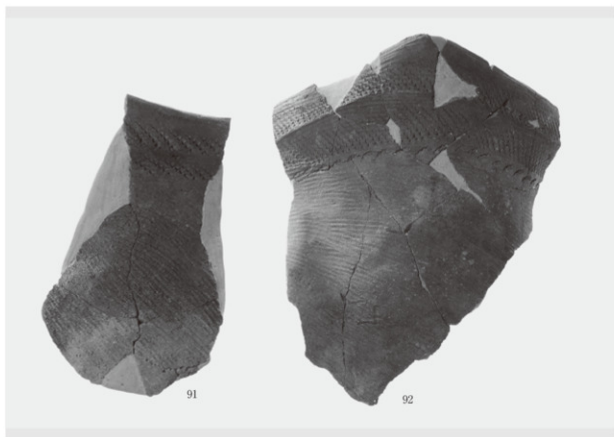
縄文土器⑭（後期）



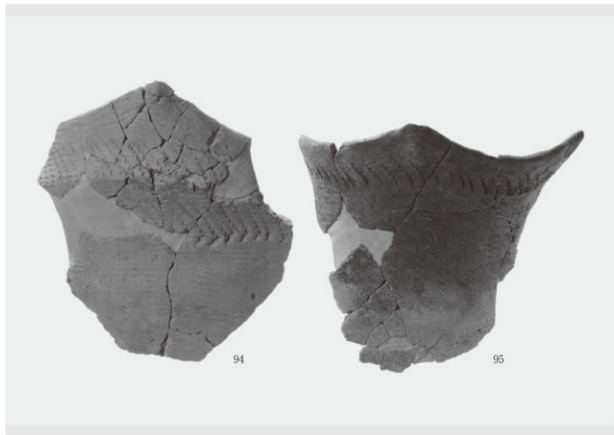
縄文土器⑮ (後期)



縄文土器⑯ (後期)

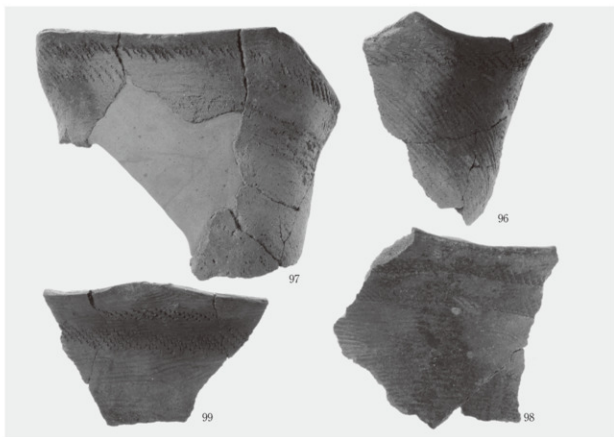


縄文土器⑰（後期）

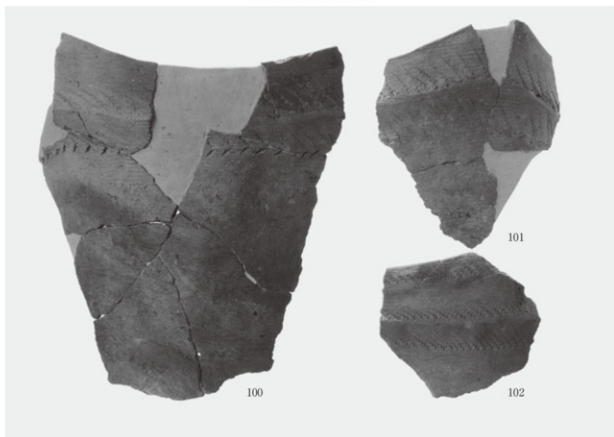


縄文土器⑱（後期）

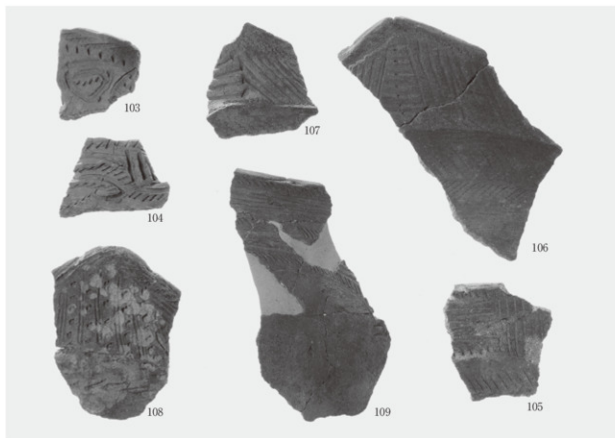




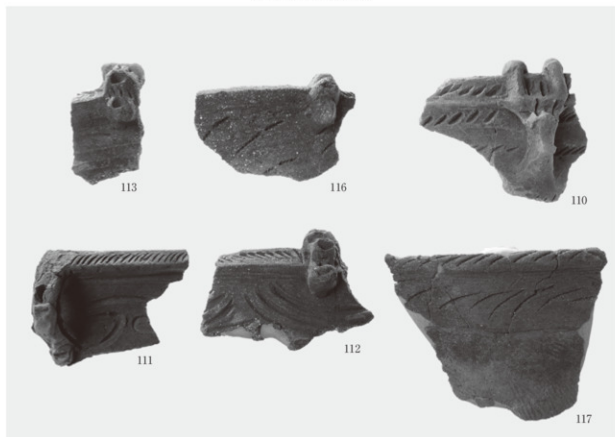
縄文土器㊸(後期)



縄文土器㊹(後期)



縄文土器㉑ (後期)



縄文土器㉒ (後期)



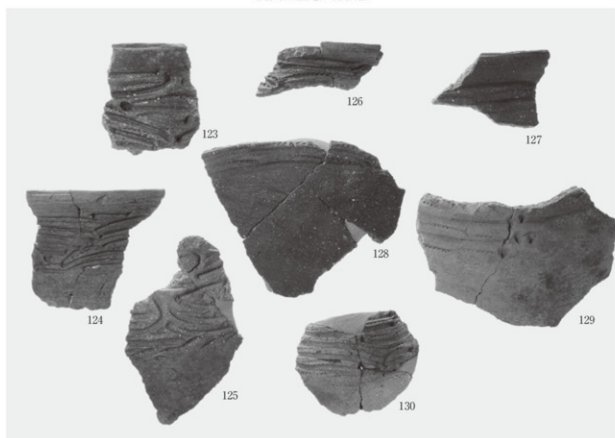
縄文土器㉓（後期）



縄文土器㉓（後期）



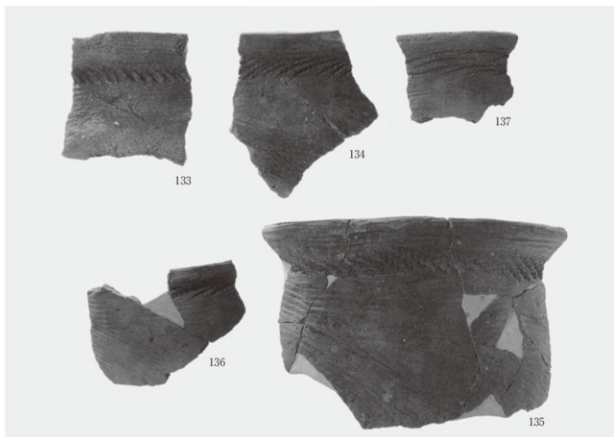
縄文土器㉔ (後期)



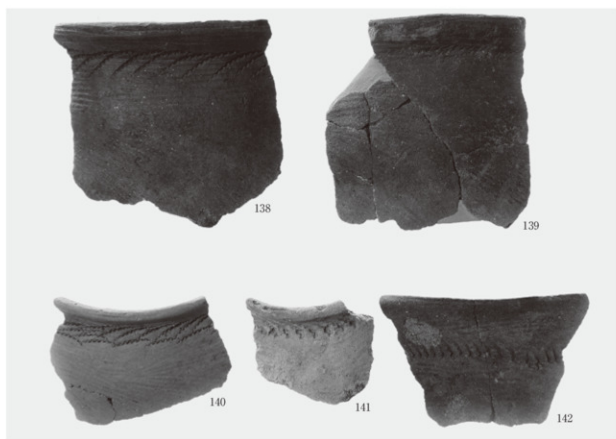
縄文土器㉕ (後期)



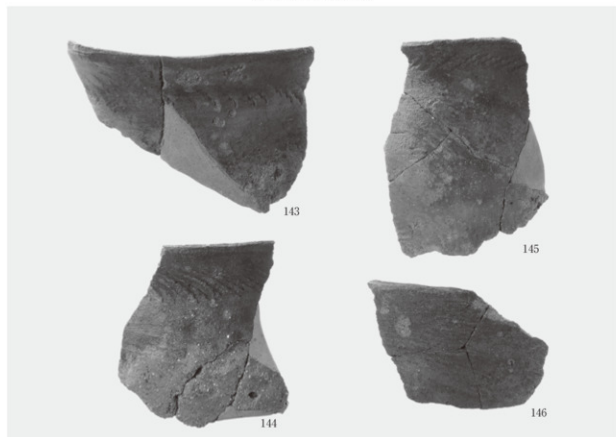
縄文土器㉞（後期）



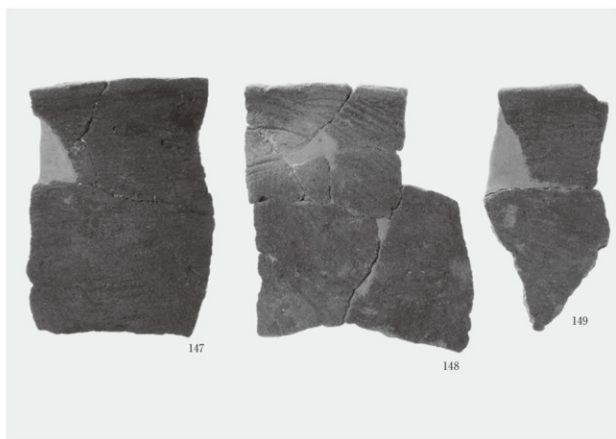
縄文土器㉞（後期）



縄文土器㉨ (後期)



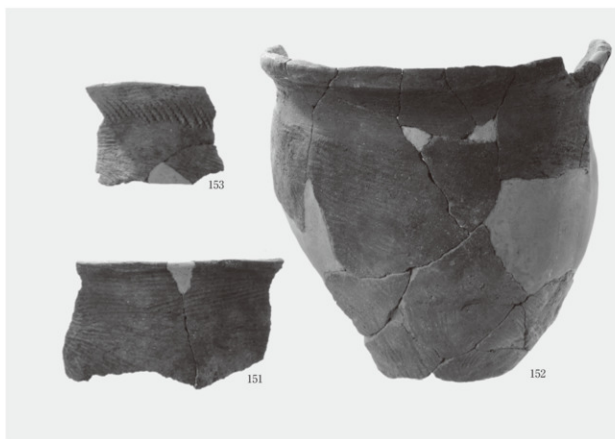
縄文土器㉩ (後期)



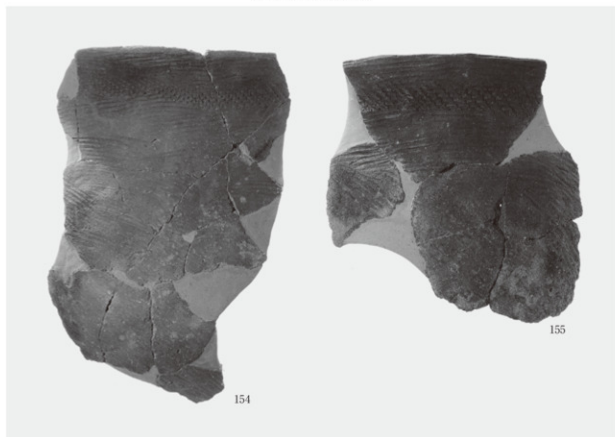
縄文土器㉑（後期）



縄文土器㉒（後期）



縄文土器㉓（後期）

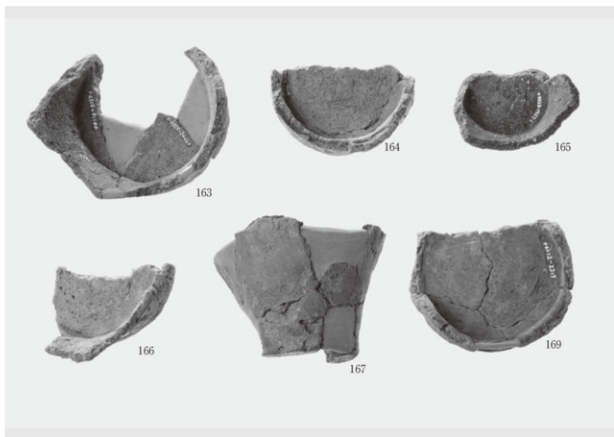


縄文土器㉔（後期）

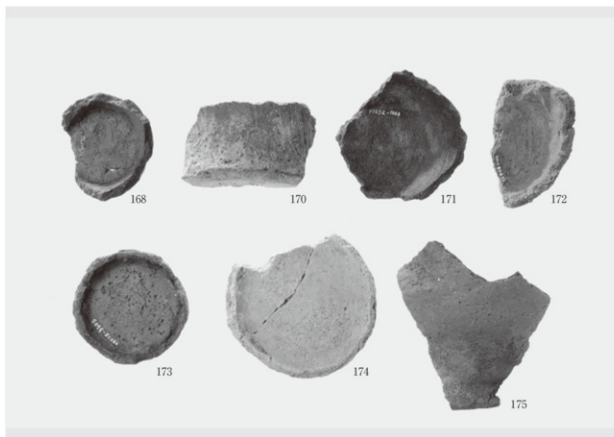




縄文土器㊟(後期)



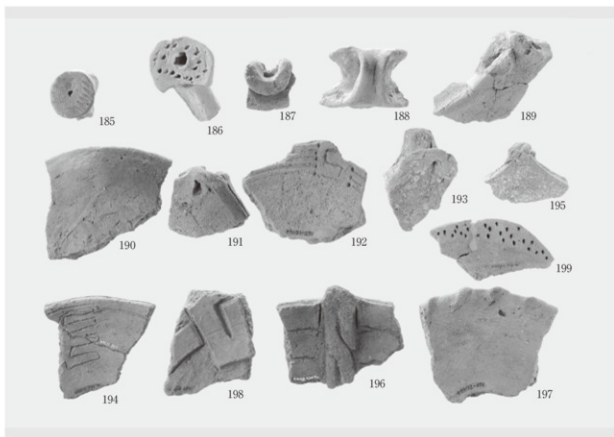
縄文土器㊟(後期)



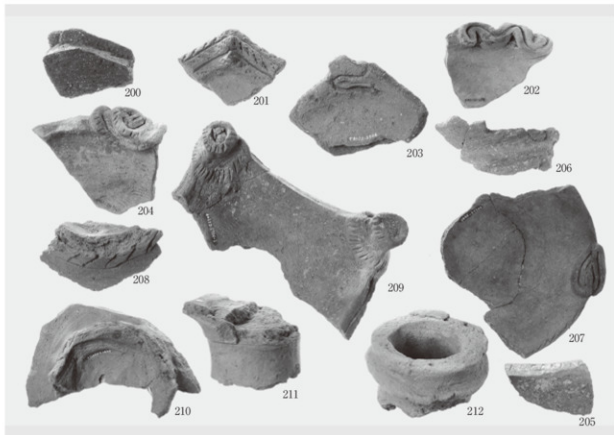
縄文土器㉞(後期)



縄文土器㉟(後期)



縄文土器㉓ (後期)



縄文土器㉔ (後期)



縄文土器④ (後期)



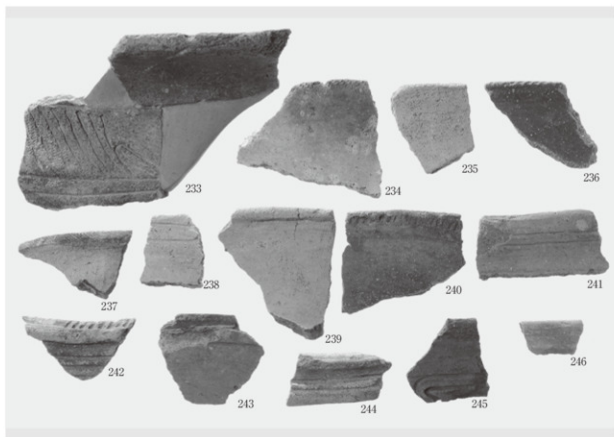
縄文土器④ (後期)



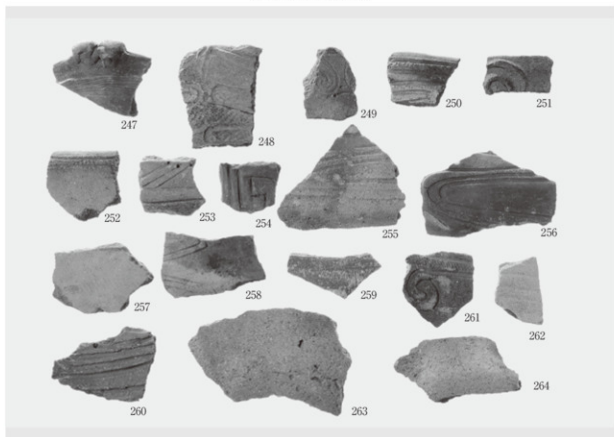
縄文土器④(後期)



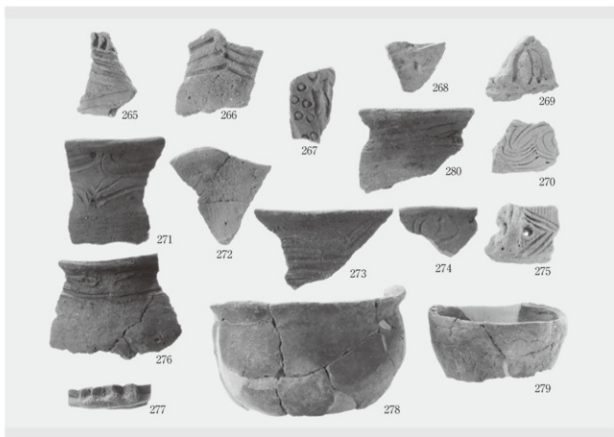
縄文土器④(後期)



縄文土器④ (後期)



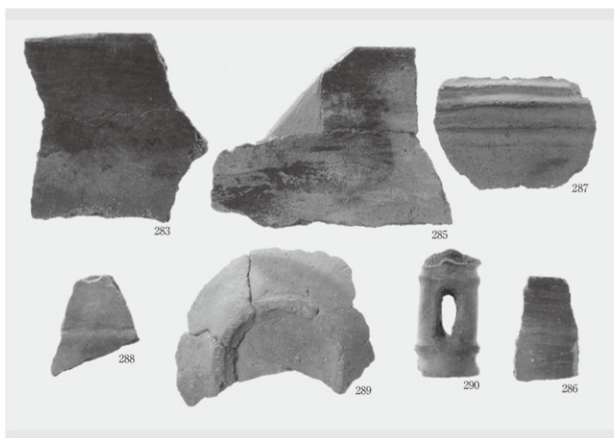
縄文土器⑤ (後期)



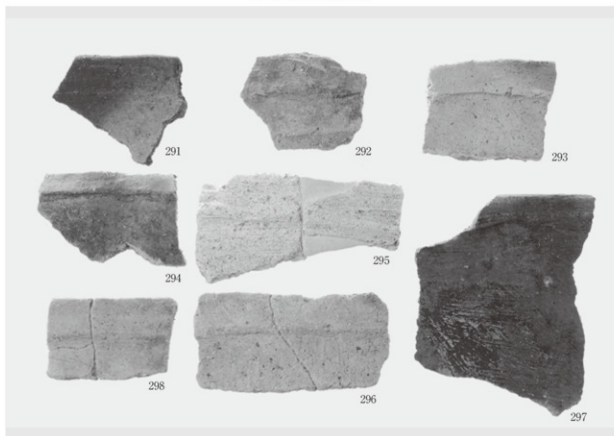
縄文土器㉔(後期)



縄文土器㉕(後期)

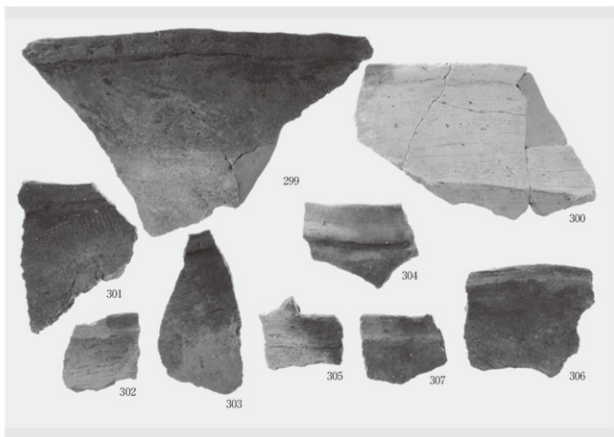


縄文土器④ (後期)

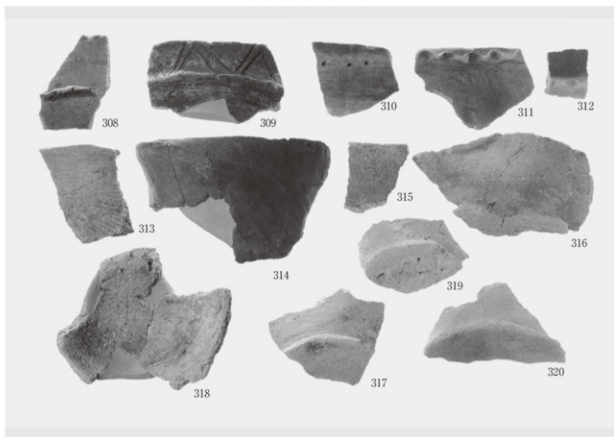


縄文土器⑤ (晩期)

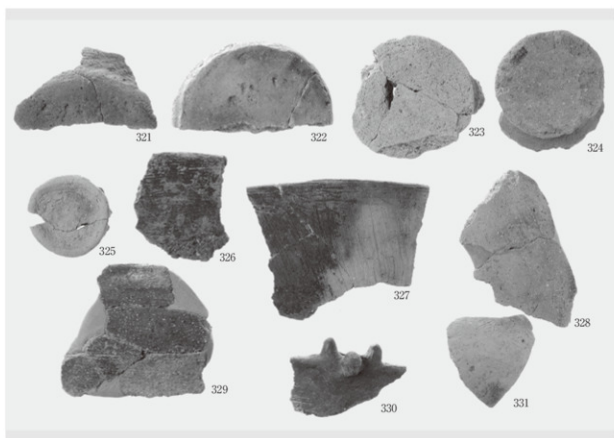




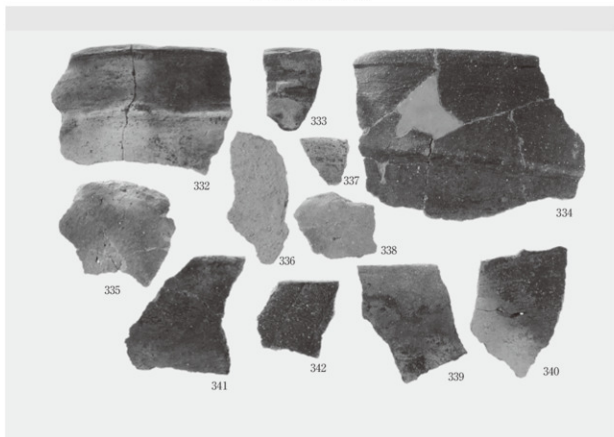
縄文土器㉞(晩期)



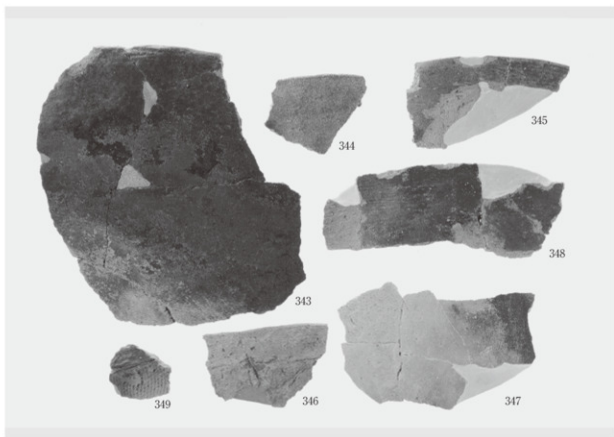
縄文土器㉟(晩期)



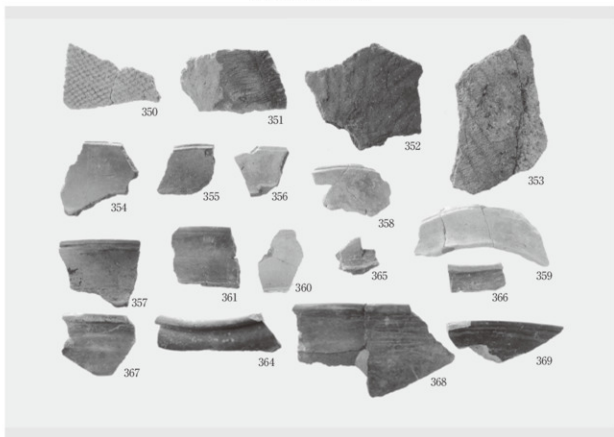
縄文土器㉔(晩期)



縄文土器㉕(晩期)



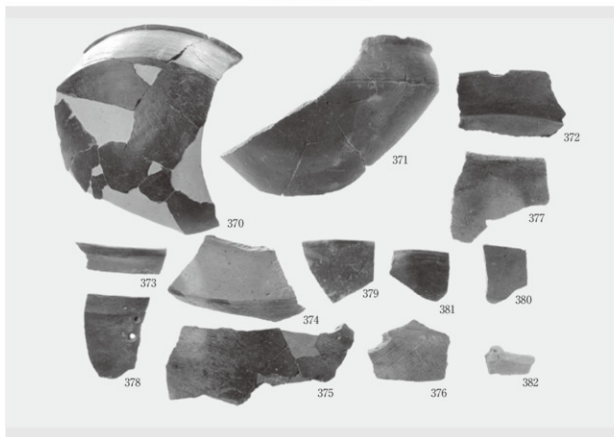
縄文土器㊦(晩期)



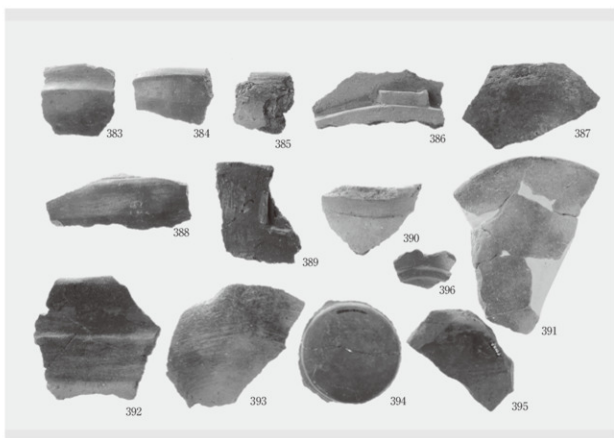
縄文土器㊦(晩期)



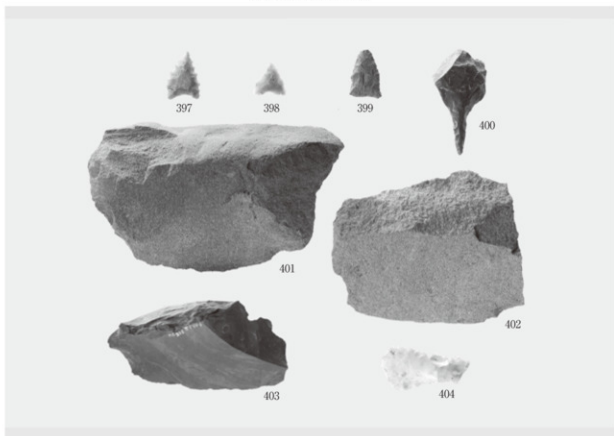
縄文土器㉟(晩期)



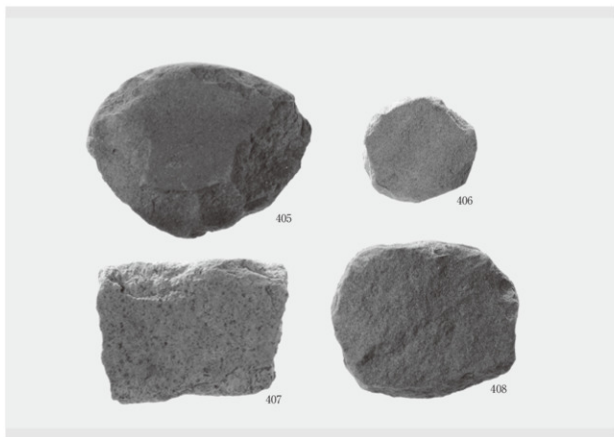
縄文土器㊿(晩期)



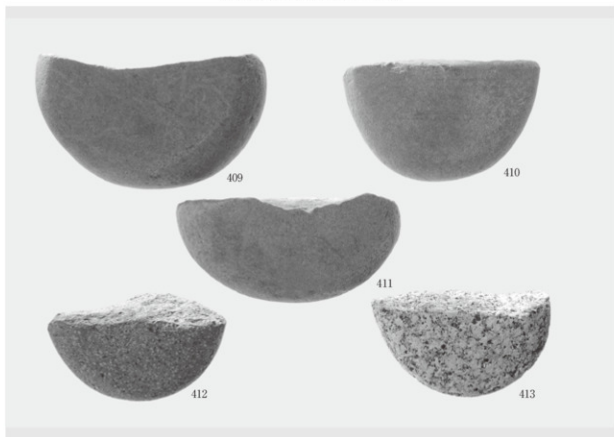
縄文土器② (晩期)



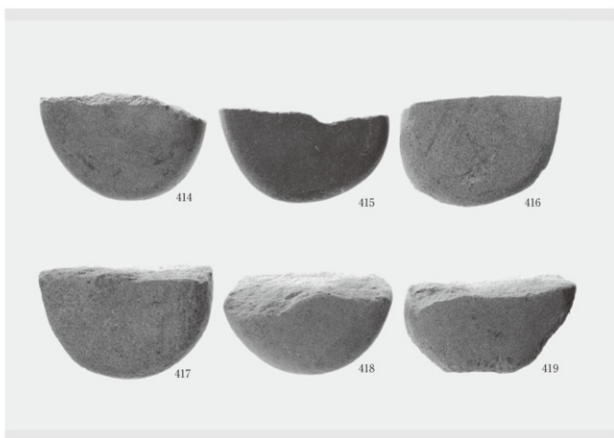
石器② (縄文時代後期～晩期)



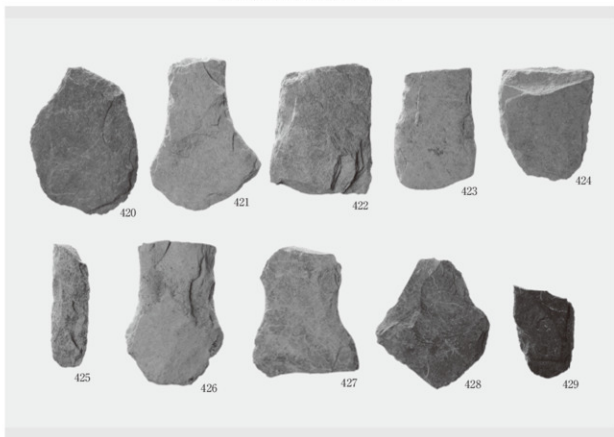
石器③（縄文時代後期～晩期）



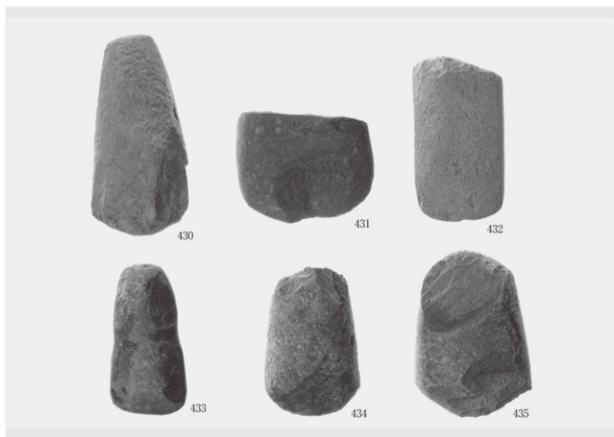
石器④（縄文時代後期～晩期）



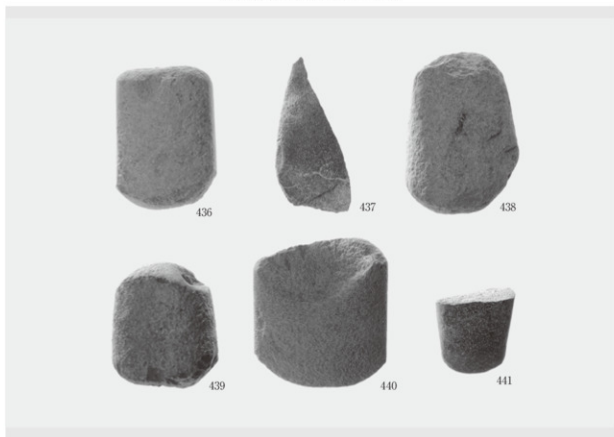
石器⑤ (縄文時代後期～晩期)



石器⑥ (縄文時代後期～晩期)

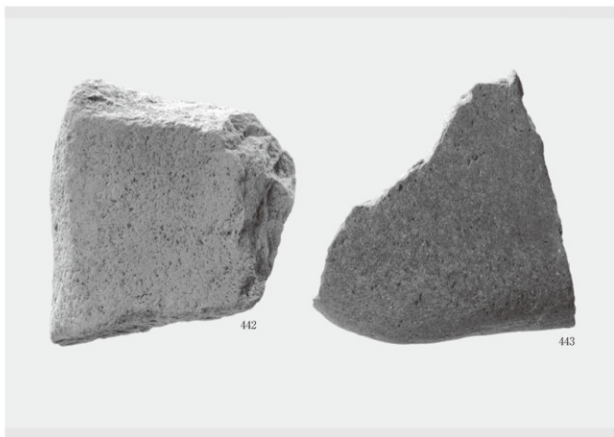


石器⑦（縄文時代後期～晩期）

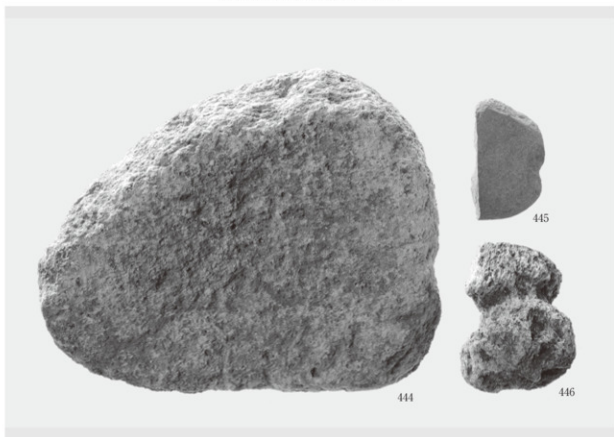


石器⑧（縄文時代後期～晩期）

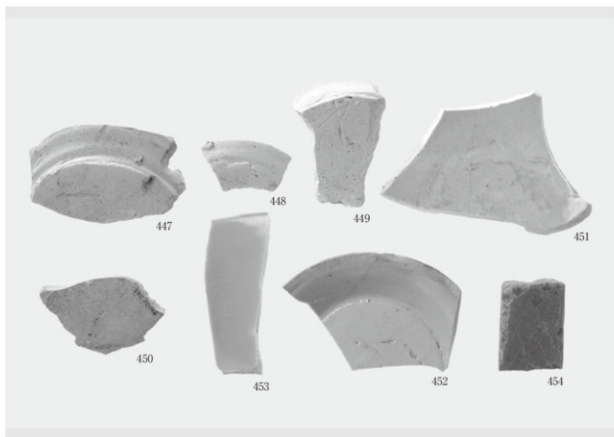




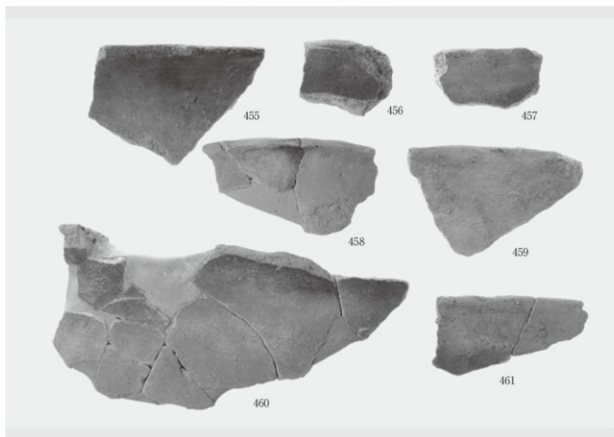
石器⑨（縄文時代後期～晩期）



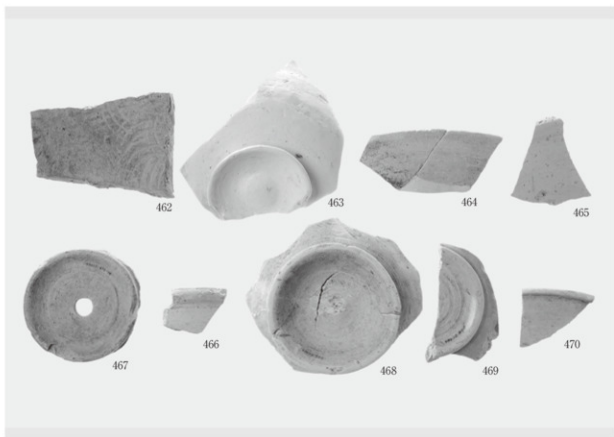
石器⑩（縄文時代後期～晩期）



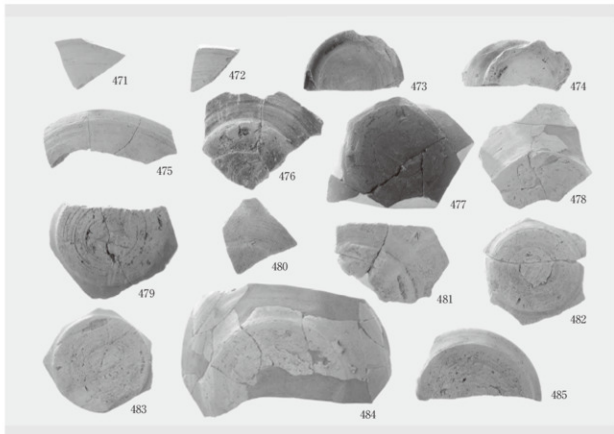
古代～中世の遺物① (SE5)



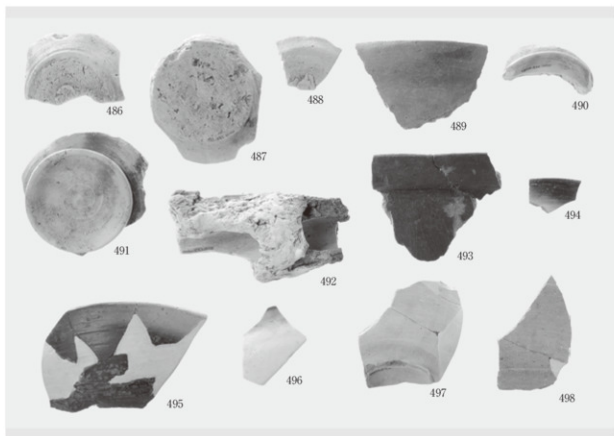
古代～中世の遺物② (SE6)



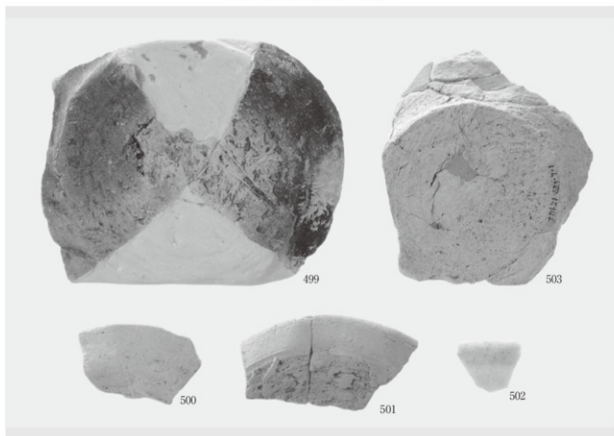
古代～中世の遺物③ (SE6)



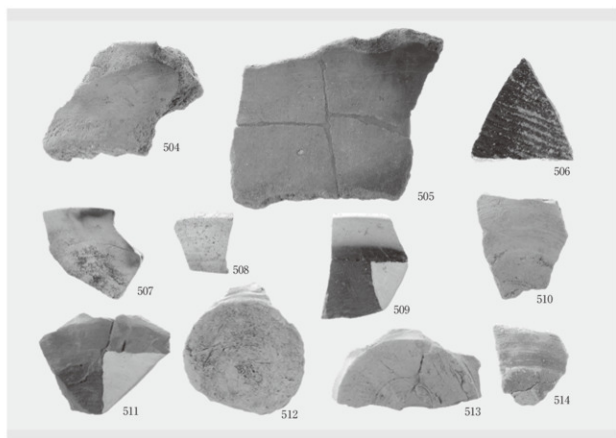
古代～中世の遺物④ (SE6)



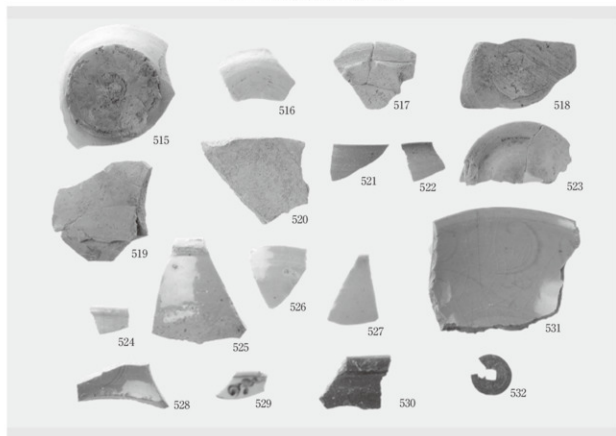
古代～中世の遺物⑤ (SE6)



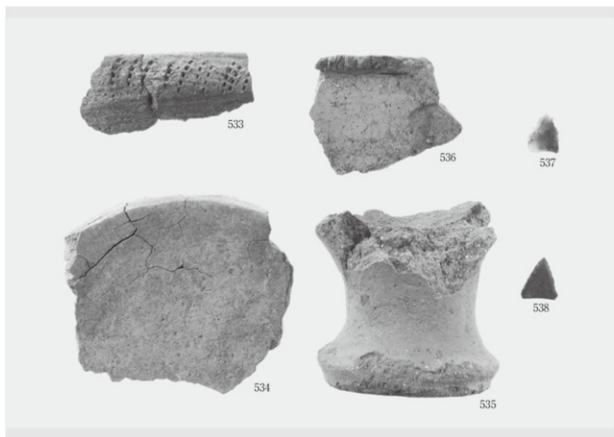
古代～中世の遺物⑥ (SE8・SZ1)



古代～中世の遺物⑦（包含層）



古代～中世の遺物⑧（包含層）



その他の遺物



報告書抄録

ふりがな	なかとこまるいせき							
書名	中床丸遺跡							
副書名	県道飯野松山郡城端（郡域志布志道路）梅北工区道路整備工事に伴う発掘調査報告書2							
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第239集							
編著者名	永野一夫							
発行機関	宮崎県埋蔵文化財センター							
所在地	〒880-0212 宮崎県宮崎市北上原町下郡河4019番地 TEL.0985-36-1171							
発行年月日	西暦 2016年 3月 25日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
中床丸遺跡	宮崎県宮崎市 梅北町 13442番地ほか	45302	7000	31度 40分 10秒 付近	131度 3分 10秒 付近	第1次調査 2013.10.2～ 2014.3.25 第2次調査 2014.4.21～ 2015.1.16	6,100㎡	記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
中床丸遺跡	集落跡	旧石器時代		鏡片				
		縄文時代早期	集石遺構	11基	縄文土器、石器			
		縄文時代 後期～晩期	土坑	1基	縄文土器、石器			
		古代～中世	溝状遺構 掘立柱建物跡 土坑	9条 1棟 1基	土師器、須恵器、白磁、 青磁、輪の出口			
要約	中床丸遺跡は、旧石器時代から中世までの複合遺跡である。調査の結果、縄文時代早期は集石遺構11基を検出し、土器も少量出土した。縄文時代後期～晩期の遺構は土坑1基検出したのみであったが、それに反して遺物層は市来式土器や草野式土器、丸尾式土器とともに磨製縄文土器など多数出土した。古代～中世の遺構は、掘立柱建物跡1棟や土坑1基、溝状遺構9条検出した。特に、溝状遺構の埋土やその周辺からは土師器や須恵器、白磁、青磁などが出土した。							



---

---

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第239集

## 中床丸遺跡

県道飯野松山都城線(都城志布志道路)梅北工区道路整備工事に伴う発掘調査報告書2

2016年 3月

発行 宮崎県埋蔵文化財センター

〒880-0212 宮崎市佐土原町下那珂 4019 番地

TEL 0985-36-1171 FAX 0985-72-0660

印刷 有限会社 宮崎新生社印刷

〒880-0124 宮崎市新名爪中牟田 766 番地

TEL 0985-39-6148 FAX 0985-39-4240

---

---

Miyakonojo City Umekita Town

# Nakatokomaru Site the 1st and 2nd excavation

The Excavational Investigation Report of Miyazaki Prefecture Archaeological Center

Vol.239

2016

Miyazaki Prefecture Archaeological Center